

# 一五世紀の東地中海

渡辺金一

## 序

今から三〇年以上も前、ベルギーの偉大な歴史家アンリ・ピレンヌがその遺著「マホメットとシャルルマーニュ（一九三七）においてさいご的にまとめあげた構想は、従来の中世史研究に、想像もつかないほど広大な視界をひらくことになった。すなわちかれは、八世紀末・九世紀初めのシャルルマーニュのフランク帝国建設という「ヨーロッパ」の事件を、七世紀後半から八世紀にかけてのイスラムの地中海への進出という「オリエント」の出来事と、緊密な歴史的関連のうちにとらえたのであった。

こうして九世紀以降、地中海をはさんで、キリスト教世界とイスラム世界とが相對峙する國際情勢がかたちづけられた。しかし兩世界ともその政治事情は複雑であった。

キリスト教世界の東部には、コンスタンティノープルを首都とする帝国があった。その支配領域は、かつてのローマ帝国の東半部のうちエジプト、パルステイナ、シリアを失って、実際には小アジアとバルカンにすぎなくなったが、

それでも、その皇帝はローマ皇帝として、世界支配者の地位を自らに主張し続けた。これにたいし、西方はカール大帝の偉業によって、自らを政治的統一体として自覚するようになり、ここに、世界皇帝の地位をけっして放すまいとするコンスタンティノープルの皇帝と、この皇帝にたいして対等の地位を主張するフランク皇帝、続いては神聖ローマ皇帝との間には、キリスト教世界内における格付けをめぐる、政治理念上での多端な交渉が開始した。そして、この交渉関係のなから第三勢力として次第にのし上って来るのがローマ教皇であった。

事情はイスラム世界においても同様で、ここでも八世紀半ばから、バクダットのアッバス朝とコルドヴァのオンマヤ朝とに二つの中心が出来、両カリフの間にはさまれて、アフリカ北岸にはいくつものイスラム王朝がおこってはきえていった。

こうして、キリスト教圏およびイスラム圏の諸政治勢力は地中海を介して多彩な政治、軍事関係に入ったが、なかでもキリスト教世界の東西両帝国の宮廷の間には、対イスラム共同戦線の締結のために使者がいくたびか交された。この政治、軍事関係をぬって文化交流もさかんであり、経済関係では、キリスト教、イスラムの両世界の緩衝地帯にあたるとともに、キリスト教東西帝国の中間に位置した南イタリアのガエタ、アマルフィ、つづいてはアドリア海の奥のヴェネツィア、のイタリア都市が活躍した。

地中海を舞台とする国際情勢は、一一世紀あらたな局面をむかえることになる。これをイスラム世界についていふならば、トルコ人の進出という新たな事態であり、また、キリスト教西半部についていえば、十字軍運動、およびこれとむすびついたところの、ヴェネツィア以下のイタリア都市のレヴァント貿易の積極的開拓であった。

地中海を中心としたこの中世の国際関係の歴史に終止符が打たれるのが一五世紀であった。この世紀の地中海の歴史は、専らオスマン・トルコ帝国の主導権のもとで進行していった。小アジア、黒海、そしてバルカンの大半は、トルコ領にぬりかえられた。こうしてトルコ帝国は東地中海最大の統一政治力として、北では、一四世紀以後バルカンにたいして政治的発言権を強化しつつあった東ヨーロッパの雄ハンガリア王国と対峙し、アドリア海をはさんで、イタリアをのぞむにいたった。これを西側からみるならば、この一五世紀の経過のうちに、中世のキリスト教世界は解体した、といいうるであらう。しかしこの解体過程は同時に、歴史的世界としての近代のヨーロッパの生誕の過程を意味する。オスマン・トルコ帝国によって、中世キリスト教世界はその東南部分をけずりとられてしまった。しかし残存部分のなかでは、ヨーロッパを生み出す二つの精神運動、ルネッサンスは進行中であり、リフォーメーションは胎動をはじめていた。しかもこの双つの運動はいずれも、トルコ支配をまぬかれたトルコとの境界地方を舞台としていた。すなわち、クワトロチェントのイタリアと、フス戦争にまきこまれていたハンガリアがそれであった。こうして、中世キリスト教世界が清算される一五世紀の経過のうちに、歴史的個体としてのヨーロッパは、最終的な相貌をととのえて歴史の舞台に登場することになったのである。

このような、大きな政治的転位は、経済的なそれを伴わずにいかなかった。これはヴェネツィア経済の在り方に端的に示されている。アドリア海奥の潟のなかのこの都市は、一三世紀初頭、第四回十字軍と組んでビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルを占領し、東地中海に一大植民帝国をつくり上げた。しかし一五世紀、バルカンの南下と西進によってオスマン・トルコ帝国は、アドリア海からエーゲ海にかけて飛石のようにつらなるヴェネツィア支配の植

民地の鉄環にせまることになった。たしかにこの鉄環は一五世紀に、数箇の、しかも重要な地点で突破されはしたものの、ともかくも植民地体制は全体として維持されつつ一六世紀をむかえるであろう。しかしこの一五世紀は実は意味深い転換が進行中なのである。ヴェネツィア元老院議事録は一四四〇年以降、海 (mare) と陸 (terra) とに類別され始める。いまや海洋政策と大陸政策との可否得失をめぐる議論が、この聖マルコの都市で白熱化したのである。続く世紀、東地中海の拠点を失っていったとき、ヴェネツィアが経済の基盤としたのは、もはや東地中海の植民地ではなく、一五世紀に獲得したところの、イソントオ河からアッダ河にかけての人口の多い豊かな「大陸」の地域であった。この地域の農作物は、かつて海外植民地からまたはそれを通じて搬入された農作物にかわってヴェネツィアを養った。そしてヴィチエンツァ、ヴェロナ、ブレシア以下の都市の毛織物・絹織物生産は、ヴェネツィア経済力の支柱となったのである。このような問題性をかかえた東地中海の一五世紀。オランダの大歴史家ヨハン・ホイジンガがフランスおよびネーデルランドの同時代に名付けた「中世の秋」の標題は、もちろん異なった意味内容をもってではあるが、アルプスを越えたこの東地中海にも、如何にもふさわしい名称といわなければならないであろう。

一

この東地中海の一五世紀の政治史的経過の詳細や、これと密接な関連において進化した経済のうごき、更にはこの時代のこの地域の精神的風土について、最近、歴史学界では、史料の刊行や、研究の発表がさかんにおこなわれている。以下これらの成果を指摘し、それに準拠しながら、一五世紀の東地中海の歴史的全貌を概観してみたいとおもう。勿論その際におこる多く

の個別的問題の解決は、今後の研究にまたなければならぬ。

このような全貌を知ろうとする吾々に、一五世紀はなによりもまず、多彩な国際政、治関係の世界として、自らを開示するであろう。その全貌の概観の書は、いまなおハイドの中世近東貿易史である。いまから八〇年近い昔に書かれたこの古典的名著については、最近復刻版が刊行された<sup>(1)</sup>。

歴史の連続性にもかかわらず、一五世紀の東地中海は、一四〇二年七月二八日のアンゴラの戦いで開幕する。侵入蒙古軍をひきいるティムールはオスマン・トルコ国家のスルタン、バエジット一世に勝利をかちとり、後者は捕えられて幽囚のうちに死亡した。ティムール侵入は黒海北岸のロシアからカフカース、メソポタミア、シリア、小アジア、と、ほぼ近東の全域に量りしれない重要な結果をもたらしたが、そればかりでない。当時すでにオスマン・トルコ帝国の支配はバルカンの相当の部分におよんでいたところから、アンゴラの戦いの結果は、バルカン地域にも直ちに連鎖反応をよびおこさずにはいかなかった。この意味深い一四〇二年という時点で東地中海の歴史の流れを切断してみると、そこに政治的文化的にはぼ三系統の区分けが浮び上るのである。

(一)その第一はイスラム国家群である。エジプトでは一三世紀中葉以来マムルーク朝が支配を続けていた。同朝はティムールの侵入を蒙らずに一五世紀をむかえたが、東地中海の西ヨーロッパ人の動向について、ことにリニエーシニア朝が支配し、一四八九年以後はヴェネツィア領となったキプロス、およびヨハネス騎士団のロードス両島のうごきにたいし甚深な関心をはらっていた。マムルーク朝の北には、ティムール帝国の支配下に立ち、ティムールの死後独立のうごきをはじめた一連のトルクメン族の国家があった。その一はシリア派のカラ・コユン(黒羊部)であり、他

はスンニ派のアク・コユン（白羊部）であった。

この両トルクメン族の研究文献は、「オリエント学教本」におさめられたシュブラーの概説書<sup>(2)</sup>に列挙されている。

前者は一四世紀末カラ・ユースフのもとで擡頭し、その死（一二二〇）後一時内乱が続いたが、ミルザ・ジェム・シヤアの即位（一二三七）とともに事態は安定し、西南ベルシアの担当部分を失ったけれども、なおアルゼバイジェン、メディア、メソポタミア、を支配下におきキルマン、およびオマンの海岸までを領有していた。このミルザ・ジェム・シヤアを殺害（一二六六）し、カラ・コユンの支配を終焉させたのが、アク・コユンの支配者ウズン・ハッサンであった。

アク・コユンは一五世紀前半オスマン・ペグのもとでエデッサ、アミダ、エルジンジャン、シウアスを支配下におさめ、その死（一二三五）後は、内乱がおこり、またカラ・コユン、カラマン、マムルクと戦闘を交えたが、孫のウズン・ハッサンによって再統一された（一二四九）。かれはカラ・コユンを征服した後（一二六八）、ティムール朝のアブ・サイドの攻撃を防いでこれをタブリーズで捕虜とし（一二六九）、ここを首都としてジバル、イスファハンはじめファル、キルマン地方など、全西南イランに君臨するにいたった。ほぼ同じ頃オスマン帝国のスルタン、メヘメット二世は小アジア東部に軍を進め、トラベズントのギリシア帝国を亡した（一二六二）後、後述のカラマンのトルコ人エミールの支配を終らせ（一二六八）ていた。そこで、ティムールの唯一の正嫡の後継者をもって任じていたウズン・ハッサンと、「征服者」メヘメットとの正面きつた衝突は、さけられないものになるであろう。事実ウズン・ハッサンはこの危険を予見していた。そして、その頃オスマン・トルコ勢力の西進の結果おなじくグラニ・トルコ（Gran

Timoo)メヘメットとの対決がもはや回避できない状況においこまれていた開戦前夜のヴェネツィアと接触を開始していたのであった。(一四六〇・一——後述——)

このウズン・ハッサンに先立ってメヘメット二世と対決したのが、カラマンのイブラヒム・ベグであった。

セルデュック帝国の崩壊後独立したところの、コニアを首都とするトルクメン族のこの国家についても、前掲「オリエント学教本」中に研究文献が掲げられている。<sup>(3)</sup>

カラマンを一四二三年以来統治したイブラヒム・ベグは、中世末期イスラムが生んだところの最も傑出した人物の一人であった。イスラム側史料に屢々姿をあらわす丈でなく、グラン・カラマン (Gran Caraman) として一五世紀のイタリア側史料に馴染み深いこの人物は、後にウズン・ハッサンがそうであるようにオスマン・トルコ勢力の脅威に気付いており、登極後いくばくもなく、西ヨーロッパ勢力と接触を保つことによつてスルタンを狭撃する作戦に心をくだした。なおイブラヒム・ベグは、メヘメット二世の父ムラド二世の妹を后としてむかえ、メヘメットの叔父にあつた。

(二)これらのイスラム国家群に隣接し、さきのウズン・ハッサンに自分の娘の、絶世の美女カテリーナを嫁がせていたカロ・ヨハネス四世のトラベズント・ギリシア帝国も含めて、一連のギリシア・ラテン人国家群があつた。これら国家は第四回十字軍のコンスタンティブル占領(一二〇四)に伴つて、かつての統一ビザンツ帝国の領土のうえに並び存するようになったものであつた。その後の経過のうち、そのあるものは歴史から姿を消し、他方、新しく登場するものもあつたが、一五世紀初頭に存在したギリシア人国家としては、今のべたトラベズントの大コムネノス朝のほ

か、コンスタンティノープルのパライオロゴス朝があった。

前者は、ビザンツのコムネノス王朝（一〇八一—一八五）の一族が建てた国家で、同朝の皇帝アンドロニコス一世（一一八三—一八五）の失脚後、同帝の親戚筋のゲオルギアの王室におくられた帝の甥、アレクシオスとダヴィツドが、一二〇四年、ゲオルギア皇后タマル（一一八四—一二二）の支援をえて建設したものであった。

この帝国については、前世紀書かれた *Fallmeyer, Geschichte des Kaiserthums von Trapezunt*. München 1827 のほか、今世紀に入って *W. Miller, Trebizond, the Last Empire*. London 1926. *F. Uspenski, Očerka iz istorii trapezuntskoj imperii*. Leningrad 1929. の研究書がある丈で、第一二回国際ビザンツ研究者会議（一九六一）でも、ラムプシデイスが、史料の徹底的再検討にもとずく同帝国の歴史の書き改めを要請した。

いうまでもなくいま一つのギリシア帝国は、一二〇四年ニカイアに落ちのびたギリシア人貴族の一つパライオロゴス家が、ラテン皇帝をコンスタンティノープルから逐い、そこを再び首都として再建した「ビザンツ」帝国である。この帝国は一五世紀初頭、生死の関頭にたっていた。一三五二年、王朝内の内紛を利用してオスマン・トルコ人はダーダネルスのヨーロッパ岸ガリポリにとりついたが、その後間もなくかれらのものはやとめどもないバルカン進出がはじまったのである。一三五九年にはさいしょのコンスタンティノープル包囲があった。一三六五年には、ブルサからアドリアノープルへとスルタン宮廷が移された。こうしてオスマン・トルコ人はバルカン征服に本腰を入れた。トルコ軍は北上してバルカンの南スラヴ諸民族国家に侵入をはじめる一方、バルカン南部のパライオロゴス朝からは一三八七年テッサロニケをうばい、一三九三年テッサリアを南下、当時モレアと称されたペロポネソスに侵入を開始し

た。その翌年にはバエジット一世のコンスタンティノープル包囲が始まった。この危機のなかで時の皇帝マヌエル二世（一三九一—一四二五）の西方行がおこった。帝は一三九九年、救援をもとめて、包囲中の首都を海上から脱出、ヴェネツィアにむかったのである。帝がアンゴラの戦いの報を耳にしたのは、バリにおいてであった。

ギリシア人国家の現況はこのようであったが、ラテン人側でも、一五世紀初頭の東地中海には、かつてのラテン人支配の残骸が存するにすぎなかった。

**アテネ公国**は、カタロニア傭兵隊の支配（一三一—一八七）を終焉させたフィレンツェの銀行家アッチアイウオリ家の支配するところとなっていた。この家族は一三五八年ナポリのアンジュー家からコリントに土地を与えられていたが、同家のネイロ一世がカタロニア人をアクロポリスにおいて降伏させたのであった。ネイロの死（一三九四）後、コリントは同人の娘婿カルロ・トッコ（後述）の手に移ったが、アテネは遺言によってヴェネツィアに遺贈され、一三九五年から一四〇二年までの短期間、四代のヴェネツィア人ポデスタの統治下におかれた後、ネイロの庶子アントニオによってヴェネツィアから奪いかえされた。つづいて同人は一四〇三年ヴェネツィアと和解し、ヴェネツィア宗主権のもとにアテネを保有することを承認されたのであった。

いま一つのラテン人国家、**アカイア公国**も又、ナヴァラの傭兵隊の支配の時代（一三八二—一四〇二）につづいて、一四〇四年以降ジェノヴァ出身のツァツカリア家のチェントゥリオネに帰した。

そのほかエピロスのアルタには、ナポリ出身の**トツコ家**（前述）が支配するデスポテース領があった。同家はコンスタンティノープルの名目上のラテン皇帝であるタレントの支配者アンジュー家のローベル（一三四六—一四六四）から、

サンタ・マウラ（レフカス）、ケファロニア、ザント（ザキュントス）の諸島をレーエンとして受封され、レオナルドらしいサンタ・マウラのドゥカス、ケファロニアおよびザントの Comes と称されていた。

このトッコ家については、このたびシロが *codd. Vat. gr. 1831. 2214* 所収の一年代記の内容を紹介した。年代記は、レオナルド一世の死（一二三七—七）から、クラレンツァ領有をめぐるカルロとバライオロゴス王朝の戦闘開始（一四二六—二七）までの五〇年間にわたるトッコ家の歴史で、カルロ一世およびレオナルド二世にかんする叙述が中心になっている。著者は同時代人、文体は韻文である。<sup>(5)</sup>

このようなラテン人国家群のなかにまじって一五世紀のさいしょの三〇年ほどのあいだに急速に擡頭してきたのが、コンスタンティノープルのビザンツ帝国に属し、バライオロゴス朝皇帝の弟たちによって統治されるモレアのデスポテース領であった。トルコ帝国の再建者ムラド二世がスルタンの座に登った（一四二一）直後の一四二二・三年の冬からトルコ軍はふたたびペロポネソス侵入を開始したが、それによっても中断されずに、バライオロゴス家のデスポテースたちは、四周のラテン人国家との戦いを続け、一四二八年にはデスポテースのコンスタンティノスがトッコ家から嫁資としてペロポネソスのトッコ家領地を譲りうけ、一四三二年にはアカイア公国がモレアのデスポテース領に吸収された。

ミストラに宮廷をおくこのモレアのギリシア国家の最後の日の栄光については、ザキティノスの基本的研究が完結した。<sup>(6)</sup> ミストラの宮廷でプレトンを中心にした人文主義については、マセの研究が発表された。<sup>(7)</sup>

こうして、一五世紀の最初の三〇年ほどの間に、つぎに叙べるヴェネツィア領メトリーニとコロニー、ナウブリア

(ローマーニアのナポリ)とアルゴス、などを除けば、ペロポネソスのほぼ全土はモレアのデスポテース領支配下に編入されるにいたった。

ラテン人十字軍国家が一五世紀初頭このようにあわれむべき状態であったのに反し、かれらと組んで二〇四年のコンスタンティノープル占領に加わり、「ローマーニアの帝国の四分の一と(その)二分の一(つまり八分の一)の領主」となったヴェネツィアは、東地中海全域におよぶ植民地支配体制をしっかりと足固めしながら一五世紀をむかえていた。

ヴェネツィア史についての基本文献は、いまなお、H. Kretschmayr, *Geschichte von Venedig*. [Geschichte der europäischen Staaten 35] I. (1905) Bis zum Tode Enrico Dandolo II (1920) Die Blüte. Gotha. XVII 522, 701. であるが、このたびティリエの手で、ヴェネツィアのフランチェスコ派修道院サンタ・マリア・ゲロリオサ・デイ・フラリ附属の建物中に保存された長大なヴェネツィア文書探訪の成果と、それに基く研究が発表された。一三二九年から一四六三年にわたる元老院議事録中のローマーニア(後述)関係の部分を要記したレチヌストルがその成果の一である。<sup>(8)</sup> これにもとずいて一二一五世紀の東地中海におけるヴェネツィアの植民地支配の実態を明かにした研究がいま一つの成果である。<sup>(9)</sup> なおごく最近、チェツシおよびサムビンによっても、元老院議事録中の *Missis* が第一一四番号まではラテン語原文で、第一五〇一六番号はイタリア語で、その全文について刊行中である。しかしながらこれら刊行文書も未刊の手書本にくらべればなお九牛の一毛で、*Maggior Consiglio* 文書については、チェツシによって刊行された部分<sup>(10)</sup>(一二九九年まで)の続編、シニョリアと二六人の法曹家 *Sagi* から構成された *Collegio* (ないし *Pien Collegio*) 文書、*Consiglio dei Dieci* 文書、更にはクレタ植民地の首都カンディアの文書 *Archivio del Duca di Candia* など、未刊ヴェネツィア文書が圧倒的である。

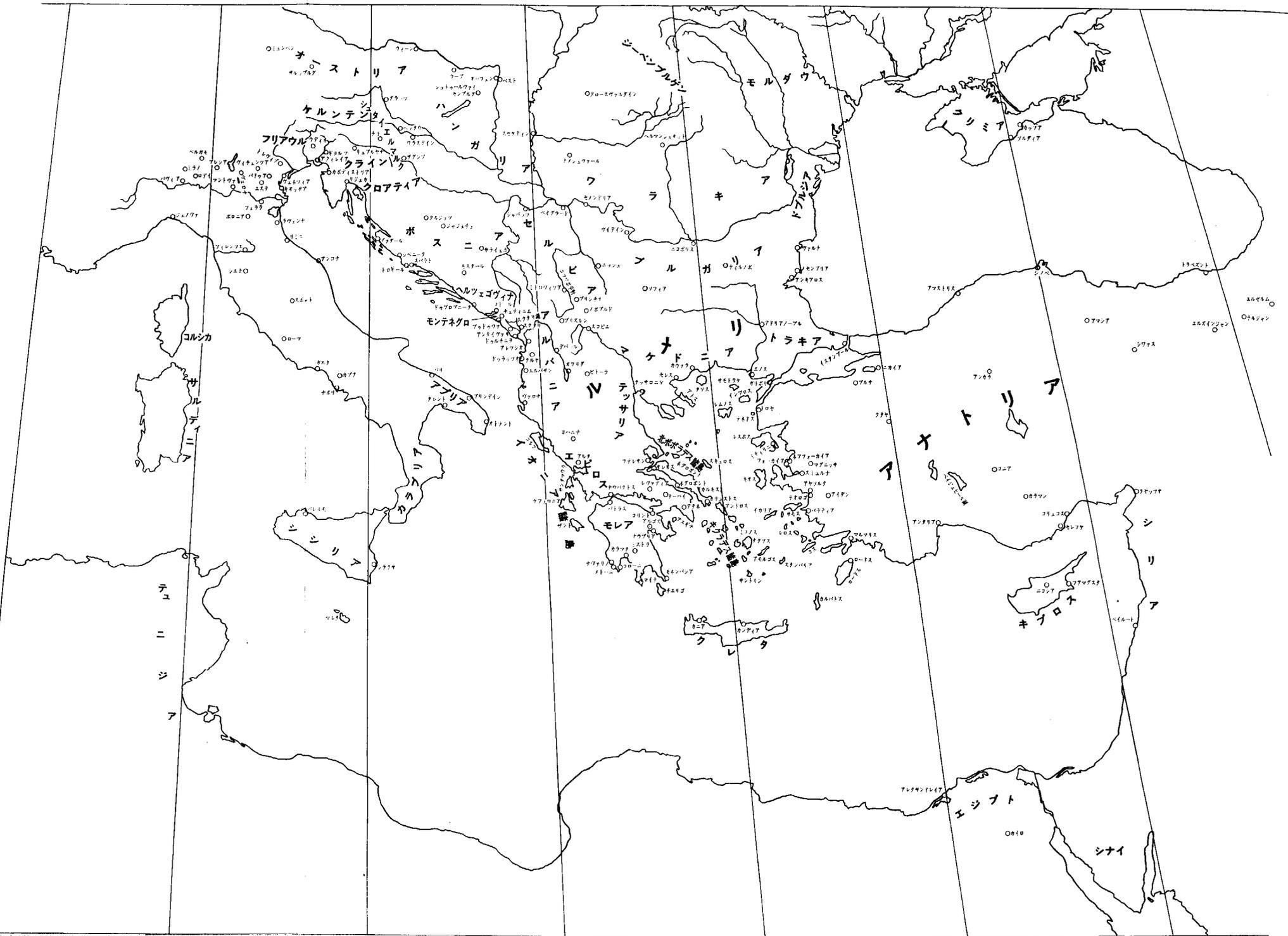
東地中海における（除アドリア海沿岸―後述―）ヴェネツィアの植民地は、ローマニアとよばれた旧ビザンツ帝国領の諸部分から成り、更に下（パッサ）、上（アルタ）に分れていた。

ローマニア・パッサは、コルフの彼方から始り、ヴァネツィア領ペロポネソス、クレタ、エーゲ海島嶼、ネグロポントを含んでいた。なお本来のローマニア・パッサには属しないコルフは、第四回十字軍のコンスタンティノブル占領に続いて一時ヴェネツィア領だった（一二〇六―一四）後、エピロスのデスポテース、アンジュール家と所屬を交え、更に後者からヴェネツィアへ売却されるという迂余曲折を経て、一四〇二年、ナポリのアンジュール家のラディスラウスによってヴェネツィアに正式に売却移譲された。

これらのヴェネツィア領ローマニア・パッサはいずれも、第四回十字軍のコンスタンティノブル占領を機として現出したものであるが、それぞれの植民地ごとに特殊の事情があった。

ヴェネツィアの東地中海への前進基地であるペロポネソス南西端のメトローニとコロニは、一二〇六年ヴェネツィアから派遣された艦隊によって、コルフ島とともに占領された。もともとヴェネツィアは、十字軍との間に交した旧ビザンツ帝国領についてのとりきめ、「ローマニア分割協定」 *Partitio Romaniae* にもとずき、モレア全土の領有権を有していたが、その大半をジョフロワ一世ヴィラルドゥアンに許してしまい、精々モレア公国をヴェネツィアの封土化し、実際にはメトローニとコロニを領有することで満足しなげなかつた（一二〇九）。他面ジョフロワ一世は、ラテン皇帝とも主従関係に立っていた。

同じ関係はネグロポントにもみられた。ヴェネツィアは「ローマニア分割協定」にもとずいて同島北部のオレオ





ス、南部のカリュストスを指定されたが、モンフェラのボニファスに同行したヴェロナの三人の従軍者 *Terciers* が同島を占領するのを許してしまった。こうして *Peccoratio dei Peccorari* がオレオスを、*Ciberto da Verona* がカルキスを、*Ravano dalle Carceri* がカリュストスを占領してしまった。一二〇九年ヴェネツィアはかれらに主従契約をむすばせることに成功したが、ヴェネツィアはこの契約にもとずいて主人としての権利を行使してネグロポントにたいする支配を固めた。これはモレアのヴィラルドゥアンにたいする主従関係がますます名目化したのと対照的であった。

*Terciers* は他方でラテン皇帝とも主従関係に立っており、このラテン皇帝の主君としての権利は、ボードゥアン二世（一二二八―六二）によりモレア公国のギョーム二世ヴィラルドゥアン（一二四六―七八）に移譲されたが、ヴェネツィアはこの主従関係そのものには介入することなしに、モレア公にたいする自らの優越をたかめることにより、ネグロポントにおける権威をたかめるのに成功した。すなわち、一二六二年、当時コンスタンティノブル皇帝ミハエル八世に敗北して権威地に墜ちたギョームから、ネグロポントにおけるヴェネツィアの特権的地位を承認させたのである。一三九〇年、*Terciers* の後裔は絶え、ヴェネツィアは名実ともに島の支配者となった。

エーゲ海島嶼（キクラデス、北スボラデス）の占領は、コンスタンティノブル占領の時のドージェのエンリコ・ダンドロ（一一九二―一二〇五）の甥で、コンスタンティノブル占領後も同地に在住していたマルコ・サヌードとその一党のヴェネツィア貴族によって企てられた。マルコ・サヌードは一二〇五年ヴェネツィアにおもむいて、時のドージェ、ピエトロ・ツィアニにたいし、ヴェネツィアに指定されたローマーニアを、直接本国の勢力圏に立つ部分と、

コンスタンティノープルのヴェネツィア人のもとに立つ部分とに分割する案をのませた。こうして、マルコ・サヌードとその一党は、エーゲ海の島民たちから、トルコ・ジェノヴァ人海賊からの解放者として迎えられて島の領主となった。すなわち、dux Egeopelagi とよばれ、ナクソスに居を構えたサヌード家。ティノス、ミコノス、北スポラデスのギシ家。サントリンのバロツツイ家。スタムバリアのクェリニ家。以上がそれである。このようにして、エーゲ海には、ヴェネツィア共和国から独立した小支配者が出現した。しかしこれらはいずれも同時に、ヴェネツィア市民であり、事実ヴェネツィア本国の権威は次第にこれら島嶼におよんだ。すなわち、ヴェネツィアはこれら諸小王朝の相続問題に介入して発言権をつよめ、ティノス、ミコノス両島を直屬とした(一三九〇)。北スポラデス諸島も、一時ビザンツ領となった後ヴェネツィアはこれをふたたび自国領化するのに成功したのであった(一四五四)。

ヴェネツィア領ローマーニア・パッサの最大、最重要のクレタは、「ローマーニア分割協定」ではなく、ヴェネツィアがラテン皇帝ボードゥアン一世とモンフェラのボニファスとの諍いを仲介した労として、後者から秘密協定でゆずりうけた領土であり(一二〇四年八月一二日のアドリアノープルの密約)、ヴェネツィアは莫大な金額とひきかえに、この島にたいする領有権者となった。しかし同島は当時すでにマルタのコムスであるジェノヴァ人エンリコ・ベスカトールレの占領するところであり、同人の後継者アラマンノ・ダ・コスタの降伏(一二一七)でヴェネツィア・ジェノヴァ協定(一二一八)が締結されるまで、ヴェネツィアは一〇年余にわたり、頑強に抵抗するジェノヴァ人と激しい戦いを続ける一方、クレタ島民が後者との連携しながら企てたレジスタンスとも直面しなければならなかった。ヴェネツィアは、このように対内・対外的に不安定なこの最重要の植民地をしっかりと自らの支配下につなぎとめるために、

すでにジャコモ・ピエトロがこの島のヴェネツィア総督だった時代に（一二〇八—一二一六）軍事植民体制を導入した。クレタ全土は六区（*sestieri*）に区分され、*turma* 々々には *castellanie* と細分された。移住ヴェネツィア人は、ヴェネツィア本国の六区（*Cannaregio, San Marco, Santa Croce, Castello, San Polo, Dorsoduro*）を手本としてクレタに設けられた六区に、それぞれの本国での所属区に準じて配分された。かれらは「受封者」*feudatarii* とよばれ、ヴェネツィア市直屬地および教会領をのぞくクレタ全土が *militie* としてかれらに分与された。こうして一二一一年には、*casa, vecchia* からえらばれた者が一二三二の *cavallerie* を、一般市民が四八の *serventerie* を与えられ、合計一八〇人の「受封者」の軍事奉仕にもとづくヴェネツィアのクレタ支配の基礎がおかれた。その後も一二二二、一二三三、一二五二年と、ヴェネツィア本国から「受封者」はクレタに増派されたが、クレタ島民のヴェネツィア植民地支配にたいするレジスタンスは依然激しく続き、クレタの平和化は一世紀半を要した。しかしついにヴェネツィアは、強固な軍事植民体制をもって危機をきりぬけた。クレタ島民、ことに在地豪族の間には和解の空気も次第に芽生え、クレタのヴェネツィア貴族の側でもフィル・ヘレーネの空気が高まった。

ローマーニア・パッサにたいするかかるヴェネツィアの支配は、一四世紀後半トルコの圧力が次第におよびはじめさなかで、一層ひきしめられることになった。このような情況を利用してヴェネツィアは、その支配を更に一段と固めることに成功したのである。ネグロポントへの途上にある重要な仲継地点ナウプリア（ローマーニアのナポリ）とアルゴスの獲得がそれであった。ヴェネツィアは、アルゴスのヴェネツィア人貴族ピエトロ・コルナロの寡婦マリア・デンギンからこの二地域を買取った。そして、一三八八年にはナウプリアを接収し、アルゴスについては、モレ

アのデスポテースのテオドロス一世の同意をまつて、一三九四年これを入手したのであった。

以上のヴェネツィア領ローマーニア・パッサが、いずれも、ヴェネツィア本国の政治機構にかたどった *regimen* によって統治されたのにたいし、ローマーニア・アルタのヴェネツィア植民地は、ビザンツ帝国都市のコンスタンティノーブル、テッサロニケ、のそれぞれの都市内の商館 (*protiaktos, rectoria*) から成っていた。これら両都市は一四世紀後半、トルコ軍のいやます脅威にさらされていた。一三八九年には、この第二のギリシア都市テッサロニケが長きにわたる包囲の後に陥落した。

ヴェネツィアは一二〇四年のコンスタンティノーブル占領いご直ちにここを根拠地として、*Hare majus* (黒海) に進出し、貿易をおこない、トランペズント帝国の首都トラベズントや、アゾフ海の奥のタナに商館をおいていた。

一四世紀末、バエジィット一世のコンスタンティノーブル包囲により、海峡には暗雲がたれこめた。しかし打撃をうけたのは、ヴェネツィアよりもむしろジェノヴァだった。

一二六一年、バライオロゴス朝初代の皇帝ミハエル八世はラテン帝国の首都を占領し、ここにコンスタンティノーブルを首都とするビザンツ帝国が再発足したが、この復帰を支持したのが、ジェノヴァであった。こうして一二六一年いごには、一二〇四年以後にヴェネツィアにとって現出したと同じ将来が、ジェノヴァの前途にひらけることとなった。ジェノヴァ人はエーゲ海、黒海に進出した。かれらは一二六七年、コンスタンティノーブル旧市街と金角江をへだてて向いあうペラに租界を獲得し、ここを根拠地として活潑な黒海貿易を営んだ。クリミア半島南東岸のソルダニア、なかんずくカッファがジェノヴァ東方貿易の前進基地であり、カッファのコンスルは同時にガザリア地方の全

ジェノヴァ人になりたいし、本国を代表する最高の権威者としてのぞんだ (*caput et primordium dictae civitatis et totius maris majoris in imperio Gazariae*)。しかしながら、ヴェネツィアがローマーニアの自国植民地にたいする統制力を強化しつつあったとは対照的に、同じ一四世紀後半、海峡や黒海のジェノヴァ植民地は、本国からますます独立するの観を深め、一方ジェノヴァ自体は政治的に振わず、ミラノのヴィスコンティ家(一三五三年以来)、つづいてフランス王(一三九六年以来)の支配下におちるなど、レヴァント植民地のジェノヴァ人を本国にむすびつけるきづなは弱まるばかりだった。

その他、ジェノヴァ人はエーゲ海東北水域において一四世紀中葉、諸島嶼を獲得したが、これらも本国とのむすびづきの点で、海峡および黒海の植民地と同様であった。

ジェノヴァは一二七五年、ビザンツ帝国から、みょうばん坑で有名なフォーカイア(フォツザア・ヴェツキア)を譲りうけ、つづいて一三〇四年、その軍事指揮官ベネデット・ツァツカリアが、乳香プランテーションのおこなわれる対岸のキオス島を占領した。キオスは一三二九年ビザンツが奪回したが、一三四六年ジェノヴァのコンドティエシ、シモネ・ヴィニョソが再び占領した。ジェノヴァは一三四六年のこの遠征にあたって、船主およびその他のジェノヴァ人から成る団体 *Maona* に資金を仰いでいたが、返済の能力なく、長い折衝の後この団体 *Maona* にキオス島の開発権を移譲した。こうしてジェノヴァ人のキオス会社の支配のもとにキオス島は新しい時代をむかえた。

こうしてジェノヴァ領となったキオス島が一五六六年トルコ領となるまでの歴史が、前史としての一・二・三世紀における東地中海のジェノヴァ植民地の概観とともに、同島出身のアルゲンティによって著された。<sup>(12)</sup>

その他、ジェノヴァ人が支配したエーゲ海の島嶼として、ミティリニ（レスボス）、スタリメネ（レムノス）、イムプロス、サモトウラキ、タソス、エノスの島々があった。ジェノヴァ人海賊フランチェスコ・ガッティルシオは、たまたまビサンツ帝国内に内乱がおこりヨハネス五世とカンタクゼーヌスとが闘っているさい、二せきのガレー船でエーゲ海に獲物をもとめて航行中であつた。ヨハネス五世はフランチェスコ・ガッティルシオにたいし、皇帝の妹マリヤを与えること、当時なおビザンツ領として残存した最大、最重要のエーゲ海島嶼レスボスを移譲すること、を条件に、援助を要請した。こうしてレスボス島以下の島々はジェノヴァ人ガッティルシオ家を領主としてむかえることになつたのであつた（一三五四）。

十字軍と関連して東地中海に形成されたラテン人国家として、最後にふれなければならないのが、キプロスおよびロードスである。

キプロスは、十字軍のコンスタンティノーブル占領に先立って、すでにアンドロニコス一世コムネノスのとき（一一八三—一五）イサキオス・コムネノスの反乱があり、コンスタンティノーブルの支配から脱落する徴項を示していたが、つづいて第三回十字軍に従事したイギリス王リチャード「獅子心」王が同島を占領（一一九二）し、イサキオス・コムネノスを捕虜とし、キプロスにおけるビザンツ支配を完全に終焉させた。続いて同島は翌一一九二年、イエルサレムからおわれたリュージニアン王家のギュイに移譲されたのであつて、ここにフランク時代のキプロスの歴史がはじまる。つづいてキプロスでは、一三七三年に、シリア、エジプトとの交易の拠点であるファマグスタ港のジェノヴァによる占領があり、キプロスの一角がジェノヴァ勢力下に立つにいたつた。

一五七一年トルコ人の占領によって終焉するまでの同島のフランク人支配の時代は、ヒルのキプロス史の第二、第三巻で扱われている。<sup>(13)</sup>

ロードスでも、一三世紀初頭には、ギリシア人豪族レオン・ガバラスがこの島に割拠し、ビザンツ帝国から脱離の様相が濃くなった。ガバラスは続いて一二三四年ヴェネツィアと主従関係を結んだ。ロードスは一二四六年ふたたびニカイアのギリシア人皇帝ヴァタゼスの支配下に復帰した。つづいて、一二九一年聖地からキプロスに撤退したヨハネス騎士国が、一三〇七・八年キプロス王アンリ二世と不和をおこし、同島を去ってビザンツ領ロードスを占領した。こうして一五二三年にトルコ軍が占領するまで、騎士団長の統率する騎士団国家時代のロードスの歴史が始った。

以上が、一五世紀初頭の東地中海の、ギリシア・ラテン諸政治勢力の情況であった。

(三)この同じ頃バルカン北部には、南スラヴ諸民族から成るさらに一群の政治諸勢力があった。すでにみたように、第四回十字軍のコンスタンティノーブル占領の前夜、ビザンツ帝国は分裂のきざしを濃くしていたが、バルカンもその例外でなかった。一一八五年ブルガリアにおこった反乱を指導した兄弟は、アッセン一世(一一八九―九六)、ペーター(一一九六―七)と、引つづいて支配者となり、ここに第二次ブルガリア王国が成立した。同じ頃セルビアでもステファン・ネマンヤ(一一六七―九六)が出て、ここにネマンヤ朝が開かれた。こうしてバルカンの歴史は新しい局面をむかえることになった。

東南ヨーロッパの歴史の一環として、中世末期のこの地域をとり上げてゐるのがシュタット・ミュラーの著述であり、最近の「バルカン学」雑誌の発刊<sup>(14)</sup>とあわせ、学界動向の一つとして興味ある問題を提起する。

一四世紀、セルビア王国はステファン・ドゥシャン（一三三一—一三五五）治下バルカンの覇者となったが、その死とともに王国の急速な瓦壊が始まった。続くツァール・ウロシュ（一三五五—一三七七）の時代、かつての広大な統一セルビアの国土には、いくつもの小独立ないし半独立の支配者たちがならびたつにいたつた。ネマンヤ朝傍系のボスニアのトゥルトウコ（一三五三—一三九一）もその一人であつた。セルビアではウロシュの死でネマンヤ朝の直系は絶え、傍系のラザレヴィッツ朝（一三七七—一四二七）、ブランコヴィッツ朝（一四二七—一四五九）がセルビアの王冠を継いだ。同じ頃ブルガリアでは事態は一層劣悪で、国内は分裂し、経済的困窮と宗教上の擾乱（ボゴミリズム）に見舞われていた。このような事態のなかで、ムラド一世（一三六二—一三八九）以来トルコ軍のバルカン北上が開始した。ブルガリアはトルコ軍と事を構える意図なく、年金支払いの義務を負つて臣従国となつた（一三六六）。続いてセルビアに番がまわつてきた。トラキアを平定したトルコ軍はマケドニアを目指し、ここにトルコ・セルビア両軍が相まみえることになつたが、セルビアの部分的支配者ヴカシン王と、その弟である南東マケドニアのデスポテース、ウゲルジュシャとの連合軍はマリカ河畔の戦いでトルコ軍に破れ（一三七二）、セルビア両王は戦死し、セルビア豪族たちはスルタンに軍役と年金の義務を負うことになつた。一三八八年トルコ軍は、当時トゥヴルトウコ王の下に急速に国力を伸長したボスニアに侵入し手痛い反撃を蒙つたが、一三八七年マケドニア北西の「歌鳥の野」（コツソボ・ポリエ）にむかえうつセルビア王ラザール指揮下の統一セルビア・ボスニア連合軍と血戦を交えた。ムラド一世は戦死したけれども、後継者のバエジットが戦局を急転換させた。ラザール王は破れて捕えられ、スルタンによって刎頸に処された。こうして最後の抵抗は破砕され、バルカンのスラヴ族の運命は定まつた。セルビアもまた軍役と年金の義務を負うにいたつたのであ

る。続いてブルガリアが最後の処理された。一三九三年首都トルノヴォはきびしい包囲をうけて陥落し、残余のブルガリア領も征服された。こうしてトルコ軍はドナウ下流でいよいよハンガリアの勢力圏内に進出することになった。一三九五年ハンガリアの支援をうけたワラキアの支配者ミルケア大王はロヴィネ平原の戦いでトルコ軍に勝利をおさめたものの、続いて年金支払いの義務を負わねばならなくなった。ドブルジャ地方はトルコの領有下に入り、ドナウ渡河地点はトルコ守備隊によって占領された。こうしてトルコとハンガリアをへだてている緩衝地帯の垣はつきつきと取りのぞかれ、両勢力は一三九六年ニコポリスで相見えることになった。ハンガリア王ジギスムンドは西ヨーロッパから集めた十字軍を指揮して戦ったが、大敗を喫し、ヨハネス騎士団長およびドイツ騎士たちの小部隊にまもられて、海路コンスタンティノープルを経由し、エーゲ海、アドリア海をとおって漸く故国の土をふむことができた。王のダーダネルス海峡通過にさいして、バエジット一世はキリスト教徒捕虜を海峡兩岸に並列させ、その叫び声によってジギスムンドをこの上ない屈辱感におとしいれた。

バルカン北部の戦局は直ちに南部にはねかえる。一三九七年には、アテネが一時的に占領された。バライオロゴス朝のデスポテースが支配するモレアは、南部海岸まで深くトルコ軍の侵入をみた。包囲されたコンスタンティノープルの運命はいよいよ絶望的にみえた。アンゴラの戦いは、バルカンのこのように緊迫した空気に、一時的小康をもたらずことになった。

(1) W. Heyd, *Histoire du Commerce du Levant au Moyen Âge*. Édition française refondue et considérablement augmentée par l'auteur, publiée sous le patronage de la société de l'orient latin par F. Raynaud. Réimpression

- anastatique de l'Édition Leipzig. Amsterdam, Harrassowitz 1885—1886. Adolf M. Harkert, 1959. 2 vols. XXIV 554, 799 p.
- (2) B. Spuler, *Geschichte der islamischen Länder*. [Handbuch der Orientalistik] 6. Bd., Geschichte der islamischen Länder. II. Abschnitt, Mongolen Zeit. Leiden E. J. Brill, 1952.
- (3) B. Spuler, Op. cit. III. Abschnitt. 第 3 卷 4 号。
- (4) O. Lampsidis, *Où sommes-nous avec l'histoire des grands Comènes?* XII. Congrès international des Études Byzantines. Ochrïde, 10—16 Sept. 1961. Séances des Sections. Section I: Histoire A.
- (5) G. Schiro, *Struttura e contenuto della cronaca del Tocco*. Byzantion XXXII (1962) 203—250, 343—344 p. Cf. 1d.. Una cronaca in versi inedita del secolo XV. „Sun duch i conti di Cefalonia.” Akten XI. Intern. Byz.-Kongr. 1958 (München) 504—507 p.
- (6) Demy A. Zakynthinos, *Despotat grec de Morée*. I. Histoire politique. II. Vie et Institutions. I. (1932) Collection de l'Institut Néo-hellénique de l'Université de Paris. Paris, Société d'Édition Les Belles Lettres 336 p. II. (1953) Athènes, l'Hellenisme Contemporain. 408 p.
- (7) François Masai, *Plethon et le Platonisme de Mystra*. Les Classiques de l'Humanisme Collection publiée sous le patronage de l'Association Guillaume Budé. Paris, Société d'Édition Les Belles Lettres, 1956. 410 p.
- (8) F. Thiriet, *Régestes des délibérations du Sénat de Venise concernant la Romanie*. [Documents et Recherches sur l'économie des pays byzantins, islamiques et slaves et leurs relations commerciales au moyen âge. I, II, IV] I. (1958) 1329—1399. II. (1959) 1400—1430. III. (1961) 1431—1463. Paris, Mouton La Haye. 247, 300, 276 p. 1) 1) P

ヴェネツィア元老院について簡単にふれておこう。ヴェネツィアには、さいしょ Arengo とよばれた市民全体の集合があったが、ついでその一々クシオンである Maggiore Consiglio が、母胎である Arengo の機能を吸収し、Doge 任命をはじめ、すべてにわたる権限をもった。Maggiore Consiglio は二二七七年の serrata の結果、それいご今までのように広い層からではなく、もっぱら貴族によって独占補充されることになったが、それでもなお千と千五百人を擁する大会議であり、一三世紀の東地中海への進出の結果ヴェネツィアが果すべき役割を担うには機動性が欠けていた。この要請から、一三世紀前半には、Maggiore Consiglio の司法的権限を委託された四〇人委員会 Quarantia とならんで、その権限の大部分を委託された Consiglio di Pregadi など Consilium rogatorum が発足した。続いて後者は委託者たる Maggior Consiglio の犠牲におして権限を拡大、軍事・外交事項を司るとともに、sindacati ad partes Levantis の派遣により植民地経営を主宰した。

元老院は一四世紀には前記四〇人委員会をも吸収、更には、一三二〇年創設された司法委員会 Consiglio dei Dieci と、Signoria (つまり Doge とその六人の顧問、四〇人委員会の三人の代表、から成る行政機関)、および主要長官、もこの構成に参加することになった。こうして Consiglio di Pregadi はヴェネツィア共和国最高の機関となった。元老院 Senato という名称は、これに一五世紀中葉、人文主義者たちが附した名称である。

ティリエが編集したロマニア関係の元老院議事録は、(1)政治、経済、軍事、司法、外交にかんする雑多な文書を含む *miscela* (2)秘密委員会文書 *Secreta Consilii Rogatorum* と *Secreti* (3)海外植民地に派遣の使節にたいする指令書 *Sindacati* の三種から成る。ティリエのレヂストルは、つぎの三群から成る。(1)については、一三三二〜一四四〇年(第一五〜六〇番、なお一三九三〜一三三二年に相当する第一〜一四番は喪失して目次のみ存在)、および *listi* の続編としての *Senato Mar* のうち一四四〇〜一四六四年。(2)については、一三四五〜一四八八年、一三三八九〜一四一一年、の三時期にかんする *Secreta consilii Rogatorum* をよび、途切れのない一四〇一〜一五〇〇年。(3)は一三二九〜一四二五年。

- (9) F. Thiriet, *La Romanie vénitienne au moyen âge. Le développement et l'exploitation du domaine colonial vénitien* (XIIe—XVe siècles). [Bibliothèque des Écoles françaises d'Athènes et de Rome. 193.] Paris Édition E. de Boccard 1959. 471 p.
- (10) R. Cessi & P. Sambin, ed., *Le Deliberazioni del Consiglio dei Regaldi (Senato)*. Serie "Mixtorum." I. Libri I—XIV a cura di R. Cessi & P. Sambin. II. Libri XV—XVI a cura di R. Cessi & M. Brunetti. [Monumenti Storici pubblicati della Deputazione di Storia Patria per la Venezia, N. S., XV—XVI.] Venezia, Spese della Deputazione 1961. XIV, 490, & XII, 425 p.
- イタリヤのヴェネチア共和国の歴史書。R. Cessi の再編の歴史書。イタリヤの歴史書未訳。 *Le colonie italiane medievali in Oriente*. I, La conquista. 1942.—*Storia della Repubblica di Venezia*. Milano, 1944—46. 2 vols.—*Venezia Ducale fino alla morte di Pietro Orseolo* (1008). Venezia, 1940. 2 vols.
- (11) R. Cessi, *Deliberazioni del Maggior Consiglio di Venezia* (fino 1299). 3 vols. Bologna, 1932—1950. 續集未訳。
- (12) Philip P. Argenti, *The Occupation of Chios by the Genoese and their Administration of the Island*. 1346—1566. With a Preface by Sir Steven Runciman. Vol. I. Text, II. Codex and Documents. III. Notarial Deeds. Cambridge at the University Press. 1958. XXIII, XVII, 961 p. イタリヤの歴史書。Diplomatic Archive of Chios. 1571—1841. Cambridge at the University Press, 1954. Vol I, II. xlii, 1117 p. イタリヤの歴史書。イタリヤの歴史書。Philip. R. Argenti, H. J. Rose, *The Folk-Lore of Chios*. I, II. Cambridge at the University Press, 1949. xii, x, 1199 p. イタリヤの歴史書。Philip P. Argenti, *Libro d'Oro de la Noblesse de Chio*. Vol. I. Notices historiques. Vol. II. Arbres généalogiques. Oxford University Press, 1955. 174, 332 p. イタリヤの歴史書。

- (31) Sir George Hill, *A History of Cyprus*. I. To the Conquest by Richard Lion Heart. II. The Frankish Period 1192—1432. III. The Frankish Period 1432—1571. IV. The Ottoman Province, The British Colony 1571—1948. Cambridge at the University Press, 1944, 1948, 1952. XVIII 352, XL 496, VI 497~1198, XV 640 p. (ed. by Sir Harry Luke).
- (41) G. Stadtmüller, *Geschichte Südwestopas*. München, R. Oldenbourg, 1950. 527 S. なきロムスタンチーノール陥落 511205124, L. S. Stavrianos, *The Balkans since 1453*. New York, Rinehard, 1959. XXII, 970 p.
- (2) Balkan Studies. Institute for Balkan Studies (*Ἰστορικὰ Μελετῶν τῆς Κερκυραίου τοῦ Ἀΐμου*). ed. by St. P. Kyriakides, N. P. Andriotes, D. Delvanis, Ch. Fragitas, B. Laurdas. Bd. I (1960)~: Zeitschrift für Balkanologie Wiesbaden, Otto Harrassowitz I (1962)~(cf. B. Z. 55 (1962) 211.)

二

アンゴラの戦いによってバルカンにたいするトルコの危機は一応とおのいたけれども、この緊張緩和はただちにキリスト教の側の陣營をふたたび分裂にみちびいた。

この間の事情については、前掲のハイド、クレッチマー、ティリエ、アルゲンティの著書のほか、バービンガーの筆になるトルコ・ヴェネツィア一五世紀政治交渉史がある。この論文は、このたび編纂されたかれの論文集に収録されている。<sup>(16)</sup>

ヴェネツィアはアンゴラの戦いの結果を耳にすると、ただちにテラ・フェルマで攻勢をとり、一四〇五年カラレ家のバドゥア支配を消滅させて、大陸側から潟を包囲する環の一角をきりひらいた。続いてヴェネツィアは一四〇九年

から、ダルマティア領有をめぐってハンガリアとあらそった。すなわち、ハンガリアから奪われたこのアドリア海の旧領土回復を、ニコポリスの敗戦で権威地におちたジギスムンドからとりもどそうと試みたのである。一四〇九年ヴェネツィアは、ハンガリア王冠への権利を主張するアンジュール家の一族のラディスラウス（ドゥラツツォのシャールの子）からダルマティアの都市ザダルを買収、これに異議をとなえるジギスムンドとの間に戦闘状態に入った。一四一一年にはドイツ皇帝をも兼ねるにいたったジギスムンドのフリアウルへの侵入を蒙りながら、ヴェネツィアのダルマティア併合は続いた。一四一二年にはシベニークに、一四二〇年にはカッタロ、トゥラウ、スプリットに、サン・マルコの獅子の旗がなびいた。沿岸島嶼の併合と相俟って、一四二一年初頭には全ダルマティアのヴェネツィア領化が完成した。しかし、やがてせまり来るトルコの脅威をまえに、ハンガリアはダルマティアのこの事態を黙認したままヴェネツィアと同盟関係に入るであろう。

同じ頃アルバニアでも同様の事態が進行していた。すでに一四世紀末ヴェネツィアは、トルコ軍のアルバニア山中への侵入によって恐怖のどん底につきおとされたバルシャ家、トビア家などのアルバニア豪族と手をむすび、かれらからこの地方の要衝を買収によって手に収めつつあった。こうして、ドゥラツツォ（一三九二）、アレッシオ（一三九六）、スクタリ（一三九六）が最後のヴェネツィアに帰した。一五世紀に入ってもアドリア海の入口を固めようとするヴェネツィアの努力は続けられ、その間ヴァロナ（一四一七）がトルコ軍の手におちたものの、コルフ島（一四〇二）のほか、ドゥルチニョ（一四二三）、ダニョ（一四四一）アンティヴァリ（一四四二）、ドゥリヴァスト（一四四二）、ブドゥヴァ（一四四二）などのアルバニア都市が最終的にヴェネツィア領に編入された。こうしてアルバニアは、やがて

二〇数年後、ヴェネツィアとトルコとの最後の決戦場となるであろう。

ペロポネソスでもヴェネツィアの足固めは着々すすんだ。古來からの植民地メトローニ、コロニ、新しい領有のアルゴス、ナウブリアに続いて、一四〇七年にはレバント(ナウバクトス)が、また一時的ではあるがナヴァリノ(ゾンキオ)、パトラスがヴェネツィア領となった。一五世紀後半にはアエギナ(一四五二)、北スボラデス諸島(一四五四)、モネンバシア(マルヴァシアのナポリ)がこれに附け加わるであろう(一四六二)。

エーゲ海、東地中海の方面でも、ヴェネツィアはアンゴラの戦いごの有利な情勢を利用して積極的に近東貿易を展開した。ジェノヴァもこの方面に同様の経済的関心をもっていたところから、両イタリヤ都市の利害は衝突した。フランス領ジェノヴァの若き総督マレシャル・ブーシコーは東地中海、なかんずくキプロス周辺のヴェネツィア植民地をジェノヴァ艦隊を指揮して荒掠し、ヴェネツィアは一四〇三年メトローニ沖海戦でこれに報復した。一四二一年にはミダノの領主フィリップ・マリア・ヴィスコンティがフランスにかわってジェノヴァの支配となり、一四二六年からヴェネツィア・ミラノ間に三〇年戦争が始ったが、そのレヴァントではねかえりが、ヴェネツィアのキオス島占領の企てと、キオス島ジェノヴァ人の反撃であった(一四三二)。しかしヴェネツィアのレヴァント問題にたいする取組み方は、ジェノヴァとくらべものにならないほどの本格的なものであった。

ヴェネツィアは、アンゴラの戦い以後、スレイマン(一四〇二—一〇)、ムーサ(一四一一—一三)つづいてメヘメット一世(一四〇二—二二)と相継ぐスルタンとつきつぎに協定をむすんで、自国の征海権を確保することに成功した。この協定の結果トルコ側は、ダーダネルスの入口のテネドス島の西および南に艦隊を維持してはならず、この禁止海

域に入ればヴェネツィア艦隊によって拿捕されねばならなかった。こうして、テネドス、ネグロポント、カルパトスをむすぶ三角海域におけるヴェネツィアの海上支配が完成した。そればかりではない。一四一三年単独スルタンとなつたメヘメット一世が艦隊を建設してエーゲ海に投入しようとしたとき、ピエトロ・ロレダンの指揮するヴェネツィア艦隊は、ガリポリ沖でトルコ艦隊におそいかかつてこれを全滅させ、コンスタンティノール救援におもむこうとする態勢さえ示した(一四一六)。スルタンはやむをえずヴェネツィアに和平を申し入れた(一四一九年締結)。

アングラの戦いごしばしの間、オスマン・トルコ帝国はバルカンの被征服民にたいし、闘入者たることを止め、精精のところ法律上の主人の状態で満足していた。しかし一四二一年、齡一八才のムラド二世(一四二一—一四五二)がスルタンに即位すると、攻撃は再開した。一時的ではあつたがコンスタンティノールが包囲され(一四二二年六月—八月)、一四二二・三年の冬にはペロポネソス、続いて一四二三年春にはアルバニアへの侵入がはじまつた。

一九六四年一月一日で七三歳をむかえたミュンヘンの碩学パービンガーのメヘメット二世伝は、このムラド二世の即位で筆をおこし、やがて、一四三二年三月三〇日生れた第三王子メヘメット・チェレビが父の死(一四五一年二月三日)後、スルタンとしてその仕事を継承、一四八一年五月三日死亡するまでの、オスマン帝国建設の六〇年の全歴史を画いた名作で、すでに仏訳、伊訳もおこなわれている。おそらくこの大著は二〇世紀の歴史記述のなかに不朽の名をとどめるにいたるであろう。<sup>(17)</sup>

著者は全く脚註なしのこの一卷にたいし、第二巻を註に予定しており、この第二巻は未刊であるが、このたび論文集が刊行され、この第二巻の使命が部分的に果されることになつた。ここに収録された諸研究、ならびに巻頭に掲げられている一九六一<sup>(18)</sup>年までの作品目録を通じて、著者がいかに周到な準備と個別研究の集積のうえにメヘメット伝を書いたかを知ることができる。

オスマン・トルコ勢力のこの急速な擡頭は、ひろく東地中海一帯の地域を、比類ない高度の政治的緊張関係においた。パービンガーがトルコ・ビザンツ学について強調した *Grenztudien* の必要は、そのまま、一五世紀にトルコと交渉関係に入ったあらゆる政治勢力についても妥当する。そのさい、かれが述べているように、まずなによりもクルムパツハーの「ビザンツ文学史」に相当するような、トルコ文学史が書かれねばならないであろう。ただその間にあって、オスマン・トルコ年代記のヨーロッパ語訳が次第に数を増していることはよるこばしい。<sup>(19)</sup> ビザンツ文学作品におけるトルコ史関係の記事については、このたびハンガリアの碩学モラヴチツクの手で組織的な大著が著され、安心して拠りうることとなった。<sup>(20)</sup> さらにまたドゥブプロブニーク研究も発表された。一三五八年ハンガリア・ヴェネツィア戦争の終焉により、ヴェネツィアの支配を脱して以来ハンガリア王の緩い支配のもと（教会で祈禱のさい、王の名をとなえること、ハンガリア王に年金を支払うこと）、都市貴族のあいだではほとんど完全にちかい自治をおこなったこのアドリア海の商業都市ドゥブプロブニーク（ラグーサ）について、このたび、ユーゴのクレキツツが市文書探訪の成果を刊行した。<sup>(21)</sup> この聖ブラシウスのまちは、中世のレヴァント貿易で大きな役割を演じただけでなく、政治的にもバルカンおよび西ヨーロッパのほとんどの政治勢力と交渉をもっており、問題の一五世紀、トルコのバルカン進出が積極化するにつれて、西ヨーロッパ・キリスト教世界からオスマン・イスラム世界につき出た触角の機能を果たすことになった。こうして、ドゥブプロブニーク都市文書は、両世界の交渉を、その微妙な局面において写し出すであろう。イタリアの諸政治勢力とオスマン帝国、なかんずくメヘメット二世との関係も、パービンガーがのべているように、なお未開拓の歴史研究領域である。事実イタリアの「当時の有力な政府の中、何時か一度メヘメット二世やその後継者と気脈を通じて他のイタリア諸国に敵対するという背徳行為の覚えないものは殆んどなかった。そしてこのような事実のなかった場合にも、かれらは互に他を疑ってそのような事をもしでかしかねぬ者と考えていた」（ブルクハルト「イタリア文芸復興期の文化」）。しかしパービンガーの指摘するように、ヴェネツィア、フィレンツェ、ミラノ、ナポリ、さらにはリミニ、アンコナの小支配

者とメヘメット二世とのかかる政治関係は、きわめていりくんでいる。そのうえこれらの関係の逐一を解明する手掛りとしての一五世紀の秘密文書は、地域的に、しかも、断片的、に伝わっているにすぎない。

さらにアルプスをこえた北方でも、「東方勢力の新たな進出と、ギリシア帝国の危険や滅亡によって、大勢においては再び西ヨーロッパ諸国民の昔時の感情が、たとい熱情まででなくとも、よみがえって来た」(ブルクハルトの前掲書)。一五世紀を通じてかれらの間で幾度かおこった十字軍のうごきを即刻、適確に把握するため、メヘメット二世はイタリアはもとより、ドイツにまでスパイ網をはりめぐらしていた。ハンガリアないしドイツの地で開催された帝国議会にして、ハンガリア・ドイツ人スパイによりスルタンに情報が提供されないものとなかった。しかしおなじくバービンの指摘するように、この点でも未だ個別研究はなされていない現状である。

以上記したような研究状況を承知のうえで、上記諸論文に拠りながら、一四二一年いごの東地中海の政治史のながれをたどってみよう。

一四二三年はヴェネツィアにとって意味深い年であった。この年の四月一日、その後三〇有余年ヴェネツィアを指導すべき新ドージェ、フランチェスコ・フォスカリがえらばれた。「おどろくほど非人格的なこのヴェネツィアの最後の卓越した人物」フォスカリ。かれのドージェ就任の初年、ヴェネツィアの東地中海植民帝国は、今までにまして偉大さをほころかみえたけれども、「大陸派の領袖」としてフォスカリは、それが幻影にすぎないことを見抜いていた。「半ばひびの入ったレヴァントの支柱を基礎とする、容易にゆれうごく国家建築は、テラ・フェルマの堅牢な柱石にうつしかえねばならなかった。」しかしかれもまた文字どおりのヴェネツィア人として、事態収拾をいくども試みた後にはじめて大陸においてミラノとの戦争に突入するであろう。

このおなじ一四二三年の九月には、トルコ軍の包围がますますつよまるなかでテッサロニケ住民の要望によりヴェネツィアはこのまちの保護をひきうけることになった。一四二六年ヴェネツィア・トルコ間に協定が成立して、スルタンは従来どおりテッサロニケ市と周囲農村地方からの収入をはっきり保証され、イスラム教臣民にたいする裁判権および自国の商人の自由取引権をヴェネツィアに認めさせ、さらにそのさいヴェネツィアがさし出す金銭提供をうけたけれども、ヴェネツィア領テッサロニケはスルタンにとって、トルコの肉体にさされた槍先きにほかならなかつた。ムラド二世はこの挑戦に応じた。その結果ヴェネツィアは封鎖されたこのまちに七年ものあいだクレタから食料をはこびこまねばならなかつた。海上でも、トルコとヴェネツィア間には戦闘状態が続いた。ヴェネツィア領となつてから七年目の一四三〇年三月二九日、テッサロニケは陥落した。ヴェネツィア艦隊は海峡で報復手段に出たが、大勢は挽回できず、同年九月四日和平が成立した、条約はヴェネツィア商人にトルコ領内での取引の自由をみとめたが、他面ヴェネツィアに、レバントおよびアレッシオ、スタタリの領有につき年金をスルタンに支払うべき義務を課していた。テッサロニケ陥落に続く四分の一世紀ほどの期間、ヴェネツィアの対トルコ関係は比較的平穩であつた。これにかわつて、テネドス海域ではヴェネツィア艦隊とジェノヴァ艦隊とが戦火を交え、ヴェネツィア人がキオス占領を企て、ジェノヴァ人がコルフ占領を企てた。そして一四二六年早春からは、一四五四年四月九日（ロディイの和平）に終るべきのべ四回にもわたるヴェネツィア・ミラノ戦争が始つていた。一四三〇年のトルコとの条約は、アルバニア、モレアにおけるヴェネツィア領土を保証していたけれども、バルカンの情勢は年とともに深刻化した。アルバニアでは、トルコ人コンドティエレおよびゲリラ部隊に支援されたアルバニア人豪族たちが、ヴェネツィアと戦い、その南エビ

ルスでは、一四三一年一〇月九日、ルメリ総督カラ・シナン・ベグが首都ヨハニナをデスポテース、カルロ二世トッコ（一四二九―四八）からうばった。トッコ家の支配は縮小し、カルロ自身スルタンの臣従下におちた。イオニア海のサンタ・マウラ、レフカス、ザント、ケファロニアの島々は、トルコ人海賊およびコンドティエレのいやます脅威にさらされた。（モレアについては前述）

かかる情況の下におかれて、ヴェネツィアはトルコとの衝突をとめて回避した。しかしそれは、ヴェネツィアがローマーニアから手をひいたことを決して意味しない。ただトルコ側の実力を知悉しているが故に、ヴェネツィアは周到な準備も、同盟者もなしにトルコと戦う危険をおかさなかつたにすぎない。そしてヴェネツィアがたち上るべきそのような機は、西ヨーロッパ内に熟しつづつあつたのである。ヴェネツィアも加わつた一四四四年のハンガリア・トルコ間のヴァルナの戦いを理解するためには、ハンガリアでおこつた政変にまで遡らなければならない。

一四一一年いごにはドイツ皇帝をも兼ねたハンガリア王であるルクセンブルグ家のジギスムンドは、一四三七年一二月九日、ベーメンからハンガリアへの帰途、ツナインで波瀾の多い七〇才の生涯を閉じた。ジギスムンドはムラド二世と何回も和睦し、ことに一四三三年一二月には、スルタンが折から開催中のバーゼル宗教会議に使節を派遣し、ハンガリア王はこれをミュンスターに出迎えるという両者の友好ぶりだつた。しかし一四三八年初頭オーストリアのアルブレヒトが義父にかわつてハンガリア王に就任すると、ムラドはこれをハンガリア、セルビア侵入の口実とした。一四三八年秋、ジーベンブルゲンへの陽動侵入作戦をもつて、トルコ軍のセルビア侵入が開始した。翌一四三九年にはムラド二世自らが出馬した。目標は、セルビア・デスポテースの首都セメンドリアであつた。同じ頃アドリア海を

へだてたフィレンツェでは、ピザンツ皇帝ヨハネス八世（一四二五—一四八）の出席のもと、対トルコ十字軍の前提である東西教会の統一問題が議せられていた。

このフィレンツェ宗教会議については、長期にわたる老大な会議文書の刊行が今回終了し、編者の一人、ギルが基本的研究をあらわした。

アルブレヒト王はハンガリア貴族との対立に明け暮れて、軍事行動をおこせなかった。八月一日にはセメンドリアが陥落し、セルビアの大半がトルコの支配下に入って、ここにボスニア侵入への途がひらけた。ハンガリアへの侵入に障害となるのは、ベオグラードのみとなった。一〇月末にはアルブレヒト王がウィーンへの途次急死し、後継問題をめぐってハンガリア国内はわきかえった。一四四〇年四月以来トルコ軍の河陸からするベオグラード包囲が開始した。同時にトルコ軍は牽制のためジーベンブルゲン、ハンガリアをタイス河まで侵入した。ベオグラードは勇敢に防衛し、九月にはスルタンはかこみをといて撤退した。その間ハンガリアの玉座には、ポーランドのヤゲロ朝のウラディスラヴ三世が登った。一四四一年六月二七日には、さいごのセルビア都市である同地方南部の鉞山都市ノヴォ・ブルドが陥落した。こうしたなかでおこったのが、新ハンガリア王による、ニコラウス・ウジュラク、なかんずくジーベンブルゲンの貴族ヨハネス・フニアディの起用であった。後者はすでに対トルコ戦およびフス戦争で勇名をはせていたが、続く数一〇年の対トルコ戦でキリスト教世界全体の立役者となるであろう。こうして、ヴァルナの戦いの前哨戦はじまった。

フニアディは一四四一・二年セルビアに攻め入ってトルコ軍を蹴散らした。ハンガリアの士気は昂揚した。一四四

二年初頭には教皇エウゲニウス四世が全ヨーロッパの靈界指導者に回状を發して、トルコ戦争のための資金調達をよびかけた。オーフェン（ブタベスト）では、教皇がすでにそこに派遣していた枢機卿ジュリアノ・チェザリーニが、持ちまへの熱狂的演説で、人々の心を十字軍にかりたてていた。ハンガリア王ウラディスラヴは詳細な計劃をねりはじめた。対トルコ共同戦線締結をめぐって、オーフェンと、カラマンのイブラヒム・ベクの首都コニアとの間に、接触がおこったのもこの時であった。ヴェネツィアには一四四二年教皇からの十字軍のよびかけがとどいた。ビザンツ皇帝ヨハネス八世から軍事援助要請の書面をたずさえた使者も、この渦のまちに現れた。十字軍計劃のなかでヴェネツィアに割当てられた任務は、一〇せきのガレー船を派遣することであった。元老院は持ちまへの冷静さと慎重さで、この計劃を討議しはじめた。態度の煮つまらないヴェネツィアに転機となったのは、一四四三年一二月から翌年一月にかけて、フニアデイがハエムス山中の凍結地帯でトルコ軍にたいしおさめた輝しい勝利であった。十字軍の計劃は成功の望みが濃くなってきた。その成功の暁、テッサロニケは再び奪回され、ガリポリ港は占領され、アルバニア、エピロスの旧ヴェネツィア領は再征服されるであろう。ヴェネツィアはガリポリ向けの一〇せきのガレー船の艤装に着手した。一四四四年六月一七日ガレー船は準備完了し、アルヴィゼ・ロレタン提督にひきいられて出港した。枢機卿フランチェスコ・コンドゥメルが全キリスト教艦隊の総指揮官であった。その間ムラド二世は、カラマンおよびハンガリアにたいする二面作戦の危機を省み、自分の后マラがセルビア・デスポテースのゲオルグ・ブランコヴィッツの娘であるところから、この路線を通じてハンガリアに休戦を打診していた（一四四四年四月）。一四四四年六月二二日、ムラドはハンガリア王ウラディスラヴよりの使者をアドリアノーブルの宮廷にむかえた。スルタンはハンガリア王に

一〇年間の休戦を提案、トルコ使節は帰還するハンガリア使節に従ってオーフェンにおもむいた。このように後背を固めた後、ムラドは七月一二日海峡を渡航してアナトリアのイブラヒム・ベグめざして出陣した。

ウラデイスラヴ三世がスゼゲディンで七月末日と八月一日スルタンよりの使節をむかえ、一〇年の休戦条約に宣誓をしたこと、しかし八月四日にはこの条約を破棄して「不信の徒」にたいする宣戦布告をしたこと。その詳細はバービンガーの論文<sup>(18)</sup>に委ねよう。ヴェネツィア艦隊は八月海峡に現れた。ムラドの海峡渡航はすでにおこなわれていた。フランチェスコ・コンドゥメル<sup>(19)</sup>のハンガリア王あての激的な書簡で陸上をすすむ十字軍は行動をおこしたが、ポーランド軍はドナウ河畔にたつすると進軍を停止してしまった。ヴェニスには不安になり、九月九日ロレダンに指令して、ムラドとの和平交渉を開くべきこと、ヴェネツィアの十字軍参加の責任をチェザリーニにおしつけてしまふべきことを申し伝えた。こうしてキリスト教艦隊がダーダネルスで無為に時をすごしているとき、カラマン遠征をおえたムラドが、バルカンにとつてかえすため、海峡に到着した。そして一〇月下旬ポスフォロスのアナドルヒッサルで渡航に成功した。十字軍のドナウ横断がおこなわれたという報せがヴェネツィア元老院で確認されたのは一〇月一九日、提督の手もとに、海峡から再進発し、ヴァルナで十字軍と合流すべき元老院からの指令がといたのは、一二月初めであった。その月の一〇日には、ヴェルナの戦いがあった。十字軍は大敗北を蒙った。ウラデイスラヴ三世、枢機卿チエザリーニ以下ほとんどの従軍者が戦死した。ヴェネツィア艦隊はついにこの会戦に会わなかったのである。

ヴァルナの敗北でキリスト教世界は立ち上る氣力を失った。そのなかにあつてヴェネツィアのみが事態を率直に認識していた。元老院は、翌一四四五年三月までネグロポントにしりぞいて待期し、つづいて海峡にむかった提督アル

ヴィゼ・ロレダンに指令して、コンスタンティノープルのヴェネツィア総督と協議の上「ヨーロッパ」の سلطان、メヘメット・チェレビと和平をむすぶよう命じた。こうして一四四六年二月二十五日、当時マグニッサ引退のムラド二世に代って سلطان の座についていたメヘメット二世との間に和平条約がむすばれた。

この条約のギリシア語原文はデルガーにより、パービンガーの歴史的解説を附して発表された。<sup>(23)</sup> その内容は一四三〇年の条約の確認であり、再登極したムラド二世によって翌一四四六年秋に再確認された。

ヴァルナの会戦の結果ハンガリアの脅威から解放されて、ムラド二世は一四四六年の秋以来、モレアおよびアルバニアに攻撃を開始した。翌年早春にかけてのムラドの出馬でバライオロゴス家の支配するモレアは、 سلطان にたいし年金支払いの義務を負うにいたった。一四四八年夏にはムラドは上アルバニアに侵入した。山中で食糧に欠乏した سلطان は守備隊をのこして秋のはじめアドリアノープルにひき上げたが、ムラドの手の届かないアルバニアの地域にはスケンデル・ベグが拠っていた。そしてその年の一〇月、トルコ軍に挑戦するため折から南下中のフニアデイのハンガリア軍に合流しようとした。

正式の名をカストロイアのゲオルグといったスケンデル・ベグは幼少の頃人質としてアドリアノープルに送られイسلامに改宗したが、一四四三年フニアデイがブルガリアでトルコ人を敗走させたとき、故国に逃げ帰ってキリスト教にもどり、一一月末にはクルヤに拠って、トルコ人抑圧者に対するレジスタンスを宣し、翌年デバルでの戦勝をもってはなばなしく抗戦を開始した。かれを中心にアルバニア貴族は糾合した。一四四八年一〇月四日かれはアレッシオ城下でヴェネツィアと和を結んだ。こうしてからかれは、近づきつつあるハンガリア軍と今や合流しようとしつ

つあったのである。このハンガリア軍を指揮するのがフニアディであった。かれは、幼少のハンガリア王ラディスラウス・ポストゥムスの摂政に就任（一四四〇）以来、ヴァルナの復讐を片時も忘れたことはなかったが、今や行動をおこし、コッソボ平野までセルビアの野を南下していた。

いち早くハンガリア軍南下の報を耳にしたムラドは、急遽アジア、ヨーロッパで全国動員をおこなわせ、ソフィアからコッソボの野に急いだ。一〇月一七日、フニアディとムラドとは、奇しくも一三八九年セルビアの運命が決定された（前述）その同じ「歌鳥の野」で相見えた。スケンデル・ペグのアルバニア軍が姿をみせないままに、麾下ワラキア人の裏切りもあって、一九日にはフニアディの敗色が濃くなった。そして翌二〇日、敵対的な空気のセルビアを通過しながらハンガリア目指しておちのびねばならなくなった。こうしてフニアディの復讐は成らなかつた。

コッソボ・ボリエでのキリスト教側の敗北は、すでにスルタンと和平条約もむすび参戦もしていないヴェネツィアに、なんらのはねかえりをもたなかつた。しかしロンバルディアにおいては、ヴェネツィアは対ミラノ戦争の最後の局面に突入しつつあつた。この第二回目のコッソボの戦いの七月一六日、ヴェネツィアのポー河艦隊がカサルマヂオレで撃沈された。九月一日にはヴェネツィアのコンドティエレ、コレオニがカラヴァツォでズフォルツァから、ヴェネツィア・ミラノ三〇年戦争を通じて最大の敗北を蒙つた。このズフォルツァは一四五〇年のマリア受胎告知の日ミラノに入城し、翌日には、舅フィリッポ・マリア・ヴィスコンティの跡を襲つてミラノのドゥクスに就任するであろう。こうして、イタリアの四列強、ヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ、ナポリの間には、戦線の配置がえがおこる。フィレンツェはヴェネツィアとの従来の友好関係をすててミラノとむすぶ（一四五二・七・三〇）。ヴェ

ネツィアはアラゴン家のアルフォンゾと同盟関係に入る（一四五一・四・一六）。アペニン半島におけるヴェネツィアとフィレンツェとの間のこの対立発生は、両都市とも経済的に深い関心の対象である東地中海に、はねかえりをもたらずにはいないであろう。

この同じコソッポの戦いの年一四四八年の一月三十一日には、コンスタンティノープルのビザンツ皇帝ヨハネス八世が突然この世を去った。モレアのデスポテースである弟のコンスタンティノスは、子供を遺さなかった兄の跡を継ぐため、翌年一月六日ミストラの宮廷で戴冠式を挙げた後、三月に首都入りをした。こうしてビザンツ最後の皇帝コンスタンティノス一二世はコンスタンティノープルにおいて、残る二人の弟デメトリオス、トマスはモレア最後のデスポテースとして、中世ギリシア文化の最後に立会人となるであろう。

ヴェネツィアとの公式の平和状態にもかかわらず、小アジアの西岸マグニッサの居所からメヘメット・チェレビがティノス、ミコノス、ネグロポントにたいしておこなった海賊荒掠（一四四九）。不成功におわったムラド、メヘメット親子の五ヶ月にわたるスケンデル・ベグのクルヤ城包圍（一四五〇）。こうした国際関係は、一四五一年二月三日のムラド二世の死で、当時一九才であったメヘメット・チェレビにうけつがれることになった。ムラド二世をもって、平和的で公正で中庸を得たオスマン・トルコのサルタンの系列がおわった。新スルタン、メヘメット二世はその統治三〇余年の間に、トルコ史に新たな一頁をひらくであろう。そして、エーゲ海、バルカンにかけてのギリシア・ラテン・スラヴ国家の大半はその劔のもとに歴史から姿を消すにいたるであろう。

一四五一年二月一八日登極したメヘメット二世は、差しあたり周囲の国家群と和平をたもつ政策をとり、ムラド二

世時代には戦闘關係にあつた国々とも協調した。セルビアのゲオルグ・ブランコヴィツとの間の平和友好条約（一四四四年八月一五日のセルビア単独でのトルコとの条約。この条約はセルビアに、セメンドリア、ノヴォ・ブドノなどの占領都市とセルビア全土の返還を定めた）は確認された。アドリアノーブルの سلطان 宮廷には、ウラキア、キオス・ミティリニのジェノヴァ人支配者、ガラタのジェノヴァ人、ロードスの騎士団長ジョヴァンニ・ドゥ・ラステイク、が新スルタン登極を祝福する使節を送ってきた。アトス修道院の特権は確認された。アドリア海岸の自由都市ドゥプロブニークは使節を送つて、従來の年金をひき上げたいと申し込んだ。一四五二年九月二〇日には、フニアディとの間にさへ、三ヶ年の休戦条約が成立した。このハンガリア摂政は国内貴族、国王ラディスラウス、さらにはハブスブルグ朝のドイツ皇帝フリードリッヒ三世（一四四〇—九三）ともまづい關係に立っていたのである。こうした全般的な平和ムードのなかでヴェネツィアとの平和条約も更新された（一四五二・九・一）のはいうまでもない。しかしこの間、「ビザンツ領コンスタンティノーブルはオスマン・トルコ領土の真中であつて、トルコ領アジアとヨーロッパとを分つていた。この異質体を消滅させ、コンスタンティノーブルを形成途上のオスマン帝国の國家の中心にすえること。これが若いスルタンの第一の目標であつた。」メヘメットのこの意図は、ボスフォロスの最もせまかつた地点の西岸ルメリ・ヒッサルの丘に城塞構築がはじめられたことで、もはや疑う余地のないものとなつた（一四五二・三七八）。こうしてビザンツ帝国さいごのアゴニーが始まつた。コンスタンティノス一二世は西ヨーロッパの諸勢力に援助をよびかけたが、ビザンツ救援の十字軍が結成されるには、余りに多くの障害が介在した。教皇なしにはこの種の企ては考えられなかつたが、ニコラウス五世が必須の条件としてもち出した東西教會の統一は（一四五二・一二・一三、キエフ大

主教であるイシドルス枢機卿のコンスタンティノーブル派遣)、「ラテン人の僧帽ミトラーよりトルコ人のターバンを」という反響をビザンツ人の間によびおこすのみであった。シシリアの晩鐘以来シシリアとナポリをはじめてあわせ統治したアラゴン家のアルフォンゾがアンジュ一家のシャルルの夢を実現するためには艦隊が不足していたし、自国内の不安定がそもそもそれを許さなかった。ルメリ・ヒッサルの要塞で黒海との交通を遮断されたヴェネツィアもジェノヴァも、かつてエンリコ・ダンドロやシモーネ・ヴィニョーソが東地中海で展開したような果敢な行動によってこの要塞をくつがえす丈の気力をもち合せていなかった。落ち目のジェノヴァは問わないとしても、ヴェネツィアは当時ロンバルディアでの戦鬪の帰趨にすべてをかけていた。こうして、自らにたよるほかなくなつたコンスタンティノーブルは、七〇〇人のジェノヴァ人をのせたジュステイニアニ指揮下の二ガレー船をむかえただけで一四五三年四月初日包囲をうけ、同月二九日陥落した。入城したメヘメットには今やファティ(征服者)の名が冠せられ、コンスタンティノーブルはイスタンブール(「まちなかへ」をいみするギリシア語 *εὐστανία πόλις* に由来)とよばれるようになった。

このビザンツ帝国の最後については、スフランツェスの作と称される年代記の關係部分が独訳されたほか、コンスタンティノーブル陥落五百年目の一九五三年には、これを記念する雑誌の特集があつたり、論文が発表されたりした。<sup>(25)</sup>

コンスタンティヌスのまちの陥落の報は六月二九日、メトリーニおよびネグロポントのそれぞれのヴェネツィア総督によって本国に伝えられ、ついで西ヨーロッパの各地に伝達された。折から開催中のヴェネツィア元老院で、一〇人委員会の書記アルヴィゼ・ベヴァザンが信書を朗読したとき、悲歎と茫然自失のあまり、この不幸のしらせの写しを求め議員とてなかつたという。しかしながらそのヴェネツィアはまた、西ヨーロッパのキリスト教的なすべての願

慮をさしおき、ただ専ら自己の利益のために、若いオスマン支配者と正式の条約をむすび和平を確立した最初のキリスト教国家であった。ヴェネツィアは、コンスタンティノール救援のため建設した一五せきのガレー船を派遣するにあたって、一四五三年五月七日に提督ジャコモ・ロレダンにたいし、挑戦されなければ海峡でトルコ艦船を攻撃しないこと、コンスタンティノス帝を元気づけ、ヴェネツィアはロンバルディア戦争をしているからといってビザンツ救援をけっして忘れたわけでないむねを同帝に説得すること、を指示し、またバルトロメオ・マルチェロを同船させ、同人には、トルコ・ビザンツ和平条約の結成に努力するよう、さしづしていた。現実の進行がこのような予測に反したものとなったとき、ヴェネツィアはジャコモ・ロレダンをエーゲ海水域にとどめておき、ネグロポントをかためさせる一方、その周囲のスキュロス、スキアトス、スコペロス島を占領させた。そしてバルトロメオ・マルチェロをメヘメットのもとに派遣して、ヴェネツィア人のコンスタンティノール防衛参加について釈明させるとともに、和平条約の締結に努力させた。こうして一四五四年四月一日、両国間に条約が成立した。マルチェロはトルコ支配下のイスタンブールの、初代ヴェネツィア総督となった。キリスト教西ヨーロッパを見捨てたこのヴェネツィアの行動は当然ながら教皇側からはげしい批難をよびおこさずにはおかなかった。

レヴァント貿易にヴェネツィア同様深い関心を有していたジェノヴァも、一四五三年九月二八日ルチアノ・スピノラ、バルダッサレ・マルツフォの二人をスルタンの許に派遣したが、この方はヴェネツィアのような外交上の成果をおさめることができなかつた。ガラタ地区が返還されなかつただけでない。ヴェネツィア以上に深入りしていた黒海沿岸の自国植民地についても、ジェノヴァは当時ナポリを支配していたアラゴン家のアルフォンゾとの戦いで財政的

に全く疲弊していたので、これら植民地を保護するに足るだけの艦隊の建設さえおぼつかなかった。市当局は一四五三年一月一日、これら植民地を契約により、サン・ジョルジュ銀行に委ねた。国中に国をつくっていたこの強力な対国家債権者団体は、ジェノヴァにとって、さいごの頼みの綱にみえたのであった。しかし現実の事態はこれにおかまちなしにどんどん進んだ。一四五四年夏にはトルコ艦隊がカッファ沖に現れ、クリミアの汗の騎兵隊と呼応して、黒海のジェノヴァ植民地のこの中心地を包囲した。

ミラノのズフォルツァにコンスタンティノーブル奪回の十字軍思想がある筈はなかった。反対にかれは、ヴェネツィア苦境を利用してブレシアにこまを進めた。このミラノと組んでヴェネツィア・ナポリ共同戦線に対抗していたフイレンツェは、ヴェネツィアがレヴァントで蒙った傷手をよろこんだ。ナポリのアルフォンゾは、一四五四年初頭、復讐十字軍を組織して自らその先頭に立つことを公に宣言した。事実アルフォンゾは、当事シリア、サルディニア、アラゴニア、カタロニア、バルセロナ、バレアリック島をおさえ、ジェノヴァ領コルシカをのぞく西地中海全域をその手中におさめていた。しかしつづいて平穏な数ヵ月が流れ、東方からの危険がさほどさしせまったものでないことが明らかとなったとき、王の熱意は急速にさめはじめた。フランス王シャルル七世にいたっては、イギリスとの戦争が最大の問題であった。

一四五三年七月八日ヴェネツィアからコンスタンティノーブル陥落の報をうけとった教皇庁は事態の深刻さを身にしみて感じ知らされた。ニコラウス五世は、お互いに争い合っているイタリアの諸政治勢力にむかって、平和と、不信の徒にたいする共同防衛とをよびかけた。しかし教皇庁の財源は空であり、十字軍に先行すべきイタリアの平和実

現も際限のない将来にのばされてしまった。

中世的觀念からするならばキリスト教世界を背負って立つべき皇帝フリードリッヒ三世は、帝の顧問である当代の代表的ヒューマニスト、シエナ司教のエンネア・シルヴィオ・ピッコロミニからすでにビザンツ帝国の悲惨さについて聞かされて、心の底からうごかされていた。ヴェネツィアのドージェ、フランチェスコ・フォスカリからコンスタンティノーブル陥落の報をうけとったとき、皇帝は部屋にひきこもって涙に明け暮れ、祈禱と、人生のうつろさにたいする考察に数日をすごした、エンネア・シルヴィオは後日ライヒスシュテンデにこうのべている。フリードリッヒ三世は一四五三年七月一二日、ニコラウス五世によびかけをおこない、それにうごかされて教皇も二ヶ月の後、メヘットをアンティ・クリストにみたてた有名な教書を全キリスト教世界におくった。しかし予期したような反響は得られなかった。フリードリッヒがエンネア・シルヴィオの執拗な説得で一四五四年初頭らしい召集した幾回かのライヒスタークも、一致した決議を得られないままに散会した。こうして西方からの十字軍が期待されなくなったとき、バルカンの残存キリスト教小国家群の命脈も数えられていた。コンスタンティノーブル陥落後の一〇年間に、これら国家群を消し去ることによって、オスマン・トルコ帝国は、北ではハンガリア王国と、南ではヴェネツィア植民帝国と直接境を接するに至ったのであった。

一四五四年四月一八日、メヘットとヴェネツィアとの間に締結された和平条約は一〇ヶ年維持された。時をかせぐこと、そして自らの防衛体制を固めること、出来うれば反撃に転ずる機会をつかむこと、これがヴェネツィアに課せられた至上命令であった。まずイタリアでの平和が得られなければならなかった。一四五四年五月のロディの和議

で、三〇年間にわたるヴェネツィア・ミラノ戦争に終止符が打たれるとともに、翌一四五五年二月二十五日には、マキアヴェルリの「五列強」、つまり、ヴェネツィア、ミラノ、フィレンツェ、ナポリ、そしてローマ教皇国家の間に、現状維持を確認する平等条約が締結された。こうしてヴェネツィアは、大陸に獲得した新領土から人的・物的資源をつぎこんで、東方における足固めの政策にのり出す。クレタ、ナウブリア、ネグロポントへの補助ガレー船派遣。植民地駐屯部隊の増強。カンディア、カニア（いずれもクレタ）、メトリーニ、カルキス（ネグロポント）での要塞改善工事。ヴェネツィア元老院では、このようなヴェネツィアの軍事的準備がいわば毎日の議事日程となる。モネンバシアが一時教皇庁領となった（一四六〇）後、ヴェネツィアに保護を仰ぐにいたったのもこのような状況下においてであった（一四六二）。

しかしながらこの一〇年間、ヴェネツィアはトルコ帝国の重圧が次第につよく自国植民地の連鎖にのしかかってきつつあることを、ひしひしと感じなければならなかった。

一四五六年にはアッチアイウオリ家のアテネ支配が消滅した。さいごの同家支配者は、メヘメットの寵をえて、テレーに送られ、そのの代官をつとめたが、アクロポリスに拠ってなお続けられたレジスタンスも一四五八年六月には終焉し、いまや三日月と星の旗がアクロポリスの丘高くひるがえることになった。同年八月の最後の週にメヘメット二世はこの「賢者たちのまち」に尊崇の念をいだいて入城した。一四六〇年にはメヘメットの最後の攻撃で、モレアにおけるパラライゴス家の支配が消滅した。五月末日には、首都であるラケダイモンのミストラにスルタンが入城した。デスポテースの一人デメトリオスは降伏し、修道士ダヴィッドとなって一四七〇年その生涯を閉じるであろう。

残る一人のデスポテース、トマスも、続いてスルタンに攻撃され、ナヴァリノからコルフに逃亡（七月二十八日）、続いてイタリアに渡って一四六五年、ローマのサント・スピリト病院で死亡する。ただロシアのモスクワ大公イヴァン三世・ヴァシリエヴィッチと一四七二年結婚式をあげる娘ゾエの父として歴史に名をとどめるであろう。

黒海貿易は終幕に近づきつつあった。一四五二年に建設されたルメリ・ヒッサル要塞のボスフォロス海峡封鎖で最初の犠牲となったのは、同年末黒海から穀物をはこんで海峡にさしかかった三せきのヴェネツィア船であった。二せきは辛うじて難をのがれたが、残りの一せきは拿捕された。すでにこの年いご、ヴェネツィアのローマーニア・アルタおよびタナ向けの国家船団（ムダ）——後述——はおこされなかった。一四五三年コンスタンティノブルを占領したスルタンは今や海峡の死命を制するにいたった。それいごも若干の私的船舶は海峡を通過できたけれども、ヴェネツィアそしてなかんずくジェノヴァの交易のまえにはいまや致命的な障害がたちはだかった。続いて一四六一年にはトラベズントのギリシア帝国がメヘットの攻撃をうけて亡び、トラベズントに商館をもっていたヴェネツィア、ジェノヴァ両市の通商上の利益は大打撃をうけるであろう。そしてトルコ・ヴェネツィア戦争がつづいていた一四七五年には、トルコ艦隊のカッファ、タナ遠征で、黒海貿易一般にさいごの息の音がとめられるであろう。

そればかりでない。エーゲ海東部でも、ガッティルシオ家のキオス以下の島嶼支配が、一四五五年から一四六二年にかけてのトルコ艦隊の度重なる攻撃で終焉せしめられた。こうして、エーゲ海におけるヴェネツィア支配の要ネグロポントへの道が開けることになった。

更には、そしてなかんずく、トルコ軍の西進によって、アドリア海岸のヴェネツィア領が脅威にさらされることに

なった。しかしこの方面でヴェネツィアに先立ってトルコの進撃の矢面にたたねばならなかったのが、バルカンの小国家群であり、またこれらを自分の勢力圏内におさめていたハンガリアであった(後述)。

このような危機のさなかにおいてヴェネツィアは、三〇余年の間慎重さと果斷さをもって嵐の波濤をくぐりぬけながら楫をとりつづけてきたフランチェスコ・フォスカリの手をはなれた(一四五七・一〇・二三)。そして一五世紀の終りまでの五〇年未満の間に、ドージェが九人も交代するという悲運に見舞われた。しかしこのサン・マルコのまちの元老院の父たちは、すべての準備が完了しなければトルコにたいし戦端をひらかない、という満を持した態度を一貫してとり続けた。ニコラウス五世の後継者であるカリクストゥス三世(一四五五―五八)の非難にこたえた一四五八年六月二一日づけのヴェネツィア元老院の回答に、ヴェネツィアのこの態度はいかなく表現されている。すなわち、一、ローマでおこなわれているヴェネツィアにたいする非難は許し難いものであり、シニョリアはつねにその義務を果してきたこと。二、一四一六年ヴェネツィアがガリポリで博したトルコ艦隊に対する勝利はほとんど完全なものであったこと。三、しかし他のキリスト教国家はただ拍手喝采をおくるのみで、ヴェネツィアの要請になんら応ずることがなかったこと。四、一四二三年、ヴェネツィア領となった第二のコンスタンティノープル、テッサロニケは、ほかの誰からの援助もなしに、想像を絶した努力と莫大な費用をつぎこんで、七ヶ年の間保持されたこと。五、一四四四―四五年、ヴェネツィアはガレー船を艤装して冬の期間中戦闘をおこなわせたが、教皇エウゲニウス四世は約束の艤装費用をヴェネツィアに支払わなかったこと。六、教皇は、ヴェネツィアにたいする中傷に耳を籍すよりは、全ヴェネツィア領土にオスマン・トルコが追いせまっている現状を認識すべきであり、ヴェネツィアの場合は他のキリス

ト教国家のそれとは本質的に異なること。七、シニョリアは、時機尚早の現在トルコ攻撃を考えることはできないこと。しかしシニョリアはネグロポントを防衛し、また一二せきのガレー船をエーゲ海上に遊弋させて海峡看視にあてているのであり、これに比肩できるような努力をいかなる国家がつくしているのであろうか。ヴェネツィアの抗議文は以上であつた。

更には、カリクストゥス三世につづいて教皇の座に登つたかつてのエンネア・シルヴィオ・ピッコミニ、すなわちピウス二世（一四五八・九・三）の首頭とりで招集されたマントヴァ会議（一四五九・五・二七）でも、ヴェネツィアの態度は不変であつた。南東ヨーロッパから、トルコ軍のとどめ難い進撃をつたえる報知が相繼ぐなかでひらかれたところの、全ヨーロッパ十字軍結成のためのこの会議に、ヴェネツィア使節は、おかれて、九月二五日はじめて姿をみせた。そして、全ヨーロッパ的共同戦線が結成された暁、はじめてそれに参加する旨の原則をくりかえすのみであつた。しかしかかる共同戦線自体、会議末期トルコ問題という本題の代りにナポリ問題がとび出し、またドイツ代表が教皇および自分の主人皇帝にたいする批難をはじめめる雰囲気のなかでは、実現の望みがなかつたことというまでもない。会議は漠然たる決議で幕を閉じ、一四五九年はじめ教皇は失意のうちにマントヴァを退去した。

西方における十字軍結成の成行きがこのようであつたとき、トルコの進撃を直接蒙つたバルカンで、自己防衛を通じて次第にクローズアップされつつある二つの勢力があつた。アルバニアのスケンデル・ベグがそれであり、ハンガリアのマティアス・コルヴィヌスがそれであつた。ヴェネツィアはやがてこの二人に有能な同盟者を見出すであらう。このうち、一五世紀の国際関係という点からすると重要なのがハンガリアであつた。すでにのべたように摂政フニ

アディは、新スルタン登極にさいしてこれと三ヶ年の休戦条約をむすんだが、コンスタンティノープル陥落直前の一四五三年四月初頭これを破棄した。フニアディの使節がスルタンにのべるには、主人フニアディは摂政職を辞し、国王ラディスラウスに国政全般をひきわたしたので、フニアディはその約束したところをもはや果しえない。したがってかれはスルタンへ休戦文書を返却するから、スルタンの方も手許にあるフニアディ署名の文書を返還してほしい、と。それから一ヶ月とたたないうちにコンスタンティノープルは陥落した。ハンガリアはこの早まった休戦条約破棄をくやまなければならなかった。

コンスタンティノープル攻略の翌一四五四年早春、メヘメット二世はセルビアのデスポテース、ゲオルグ・ブランコヴィッツに最後通牒をつきつけた後、自らセルビア侵入に出馬した。ビザンツ帝国の残骸がトルコ領に編入された後は、ハンガリアがスルタンのもっとも懼れた唯一の政治勢力であった。そこでこれを打倒することがかれの心をとくとらえていた。セルビア侵入はその手始めだった。セルビア南部にすんだ一隊はオストロヴィツアを攻撃した。北部にすんだ一隊はセメンドリアを包囲したが攻略できず、メヘメットはかこみを解いて四月一八日イスタンブルに帰還した。その秋にはフニアディがセルビア北部都市のトルコ守備隊攻撃をもってこれにこたえた。翌一四五五年初頭、メヘメットはふたたびセルビア西部に出馬し、四〇日の包囲の後に六月一日鉞山都市ノヴォ・ブルドを攻略した。つづいてセルビア西南部がすべてオスマン帝国領となった、スルタンはマケドニアを経てイスタンブルに初秋帰還した。ノボ・ブルド市の陥落の報はラープで折から開催中のハンガリア国会に、六月二一日、セルビアのデスポテース、ゲオルグ・ブランコヴィッツによってもたらされた。国会では対トルコ・キリスト教同盟の大計劃

が、長広告のフランチェスコ派修道僧ジョヴァンニ・ディ・カピストラノによって推進された。一四五六年五月スルタンは周到な準備をもって、ドナウ右岸のハンガリア要塞ベオグラード攻略を企図し、これを突破口としてハンガリア平原への進出をはかろうとした。しかしベオグラードは、七月からはじまった河と陸からの攻撃によくたえ、一三・一四日夜ドナウ河上でトルコ艦隊が大敗北を喫して勝敗の帰趨は定まった。続いて二一日フニアディの奇襲でスルタン自らが傷つき戦線を離脱した。こうしてハンガリア心臓部への直撃は挫折した。フニアディの勝利の報は西ヨーロッパ全土をわきたたせた。ローマでは教皇カリクストゥス三世の命で、すべての教会では鐘がなりひびき、神への感謝の祈禱がなされた。このふんいきのなかで、勇ましい十字軍計劃はすめられた。しかし教皇にこのような熱意をわきたたせたベオグラード戦の両雄がこの同じ年にこの世を去った。八月一日にはフニアディがセリスで黒死病のため不帰の客となったし、一〇月二三日には、ベオグラード戦のさいのつかれがもとでカピストラノがイロクで永遠の眠りについた。こうして十字軍の計劃も事実上不可能となった。

七〇才の老フニアディの突然の死はハンガリアの政局に大変化をよびおこした。一六才のハンガリア王ラディスラウス・ポストゥムスが親政するハンガリアでは、フニアディの長男ラディスラウスとチリのグラーフ、ウーリッヒとの間で両家の長年の不和が一気に爆発した。つづいて翌年、殺害されたチリ家の所領の所屬をめぐってハンガリア王とハプスブルグ家の皇帝フリードリッヒ三世とが争い、教皇カリクストゥスが仲介役を買って出なければならなかった。つづいてハンガリア王が、フランス王シャル七世の娘との結婚を前に、一四五七年一月二三日、ブラーハで夭折した。こうして、ヨハネス・フニアディの第二子である当時一六才のマティアス・コルヴィヌスが一四五八年一

月二二日ハンガリア王の位についた。一四九〇年まで玉座にあった武人兼文芸愛好者の同王の治下でハンガリア史には新たな一頁が開かれるであろう。

ハンガリアの政情がこのようにめまぐるしい変化をみせているとき、セルビアでも、デスポテースのゲオルグ・ブランコヴィッツが八一才でその悲劇的な生涯を閉じた(一四五六・一二・二四)。父の跡をついだラザール・ブランコヴィッツは(一四五七・一・一五)、親トルコ政策によってハンガリアと不和になったが、一四五八年一月二〇日、つまりマティアス・コルヴィヌスの登極数日前、王家内の不和を遺してこの世を去った。王には男系の相続者がなかったところから、王の死はボスニア、トルコ、ハンガリアのセルビア介入をよびおこした。一四五八年四月トルコ軍はセルビア北部に進撃した。セメントリアをのぞくすべての部分がトルコ軍の占領するところとなった。一〇月には、ハンガリア王マティアスの、これにこたえた南下進撃があった。一四五九年一月、スゼゲデンでのハンガリア国会は、ボスニア王ステバン・トマシュの子ステパンが故ラザール・ブランコヴィッツの娘イエレナと結婚してセルビアのデスポテースとなり、同時にハンガリア王マティアスと臣従関係に入ること、を承認し、事実四月一日には結婚式がもようされた。自己の臣従国とみなしていたセルビアにボスニアが介入するのをスルタンは自己の権利侵害としてうけとらない筈はなく、事実三月に軍事行動をおこして、セルビアの最後の処理に乗出した。セルビア王国の首都セメントリア(一四五九・六・二〇)をはじめセルビア北部の全都市がトルコ軍に降伏し、ブランコヴィッツ家の一族も散り散りになった。ステバン・トマシェヴィッツはいち早くボスニアに逃亡した。こうして、ハンガリア・トルコ間の緩衝国の一つセルビア・デスポテース国家が歴史から姿を消し、さいご的にトルコ領に編入された。北部セルビアでも

イスラム化が急速にすすんだ。二〇万人と伝えられるセルビア人が、奴隷化されてトルコ軍に編入されたり、遠隔の地に移住させられたりして、故国の土を離れた。こうして住民のいなくなった地域には次第次第にオスマン・トルコ人その他がそれぞれの風俗慣習をもって移り住んできた。

一四六一・二年の冬メヘメットは、ハンガリアとの間に介在する今一つの緩衝国ワラキアの完全占領を企図した。

ワラキアはムラド二世以来スルタンに年金を支払う義務を負ったトルコ臣従国であったが、ここでは一四五六年以来、「悪魔」と綽名された残酷趣味のヴラドが支配していた。かれはなかでも人間を杭にさすことをその好みとしていた。一四六一年春、マティアス・コルヴィヌスは、自領テメシエヴァール地方にトルコ軽騎兵隊（アキンジ）の奇襲をうけたが、直接自ら手を下す代りに、ヴラドをつかって復讐することを企図した。そのため両者の間に秘密同盟がむすばれたが、スパイ網を通じてこれを事前に知ったメヘメットは、かつてコンスタンティノブル攻略に投入したほどの軍事力を一四六一・二年の冬に動員した。一四六二年四月二六日、動員軍は輸送船でイスタンブールからドナウ河口にむかった。その一せきにはメヘメット自らも乗りこんでいた。陸軍もこれに呼応してアドリアノーブルからフリッポポリスを通してドナウ河畔におもむいた。しかし、ワラキア遠征は、トルコ軍にとって、従来手掛けてきた攻城戦とは大部勝手がちがっていた。灌木の生い茂るワラキア平原は、ヴラドにとって恰好のゲリラ戦場を提供した。スルタンは決定的勝利をえないままに、七月イスタンブールに帰還した。そして手許の人質であるヴラドの弟ラドゥをワラキアに支配者としてはなつことで満足せざるをえなかった。

翌一四六三年には、ハンガリア・トルコ間の第三の緩衝国ボスニアがトルコ軍の遠征目標となった。こんどは自分

の番であること。ボスニア王ステバン・トマシエヴィッツはこれをすでに知りすぎるほど知っていた。事実、一四六一年九月初めボスニア王に就任するすこし前すでにかれは、教皇ピウス二世にあてて救援をもとめる書簡を送っている。当時のボスニアはたくさんの問題をかかえていた。ハンガリアとの関係は断絶していた。マティアス・コルヴィヌスはピウス二世と一緒にあって、セメンドリア陥落（前述）の責任をボスニアの裏切りに帰し、ハンガリア国内のセルビア・デスポテースの財産をすべて没収したのであった。多額の金を払い、ボスニアの若干の要塞を割譲すれば、ボスニア王と和解してもよい。これがマティアスの態度だった（一四六二年夏）。ボスニア国内の「異端」、ボゴミール派の宗教運動は、国王が救援のためローマ教皇と接近したことから激化する一方であった。弾圧された農民教徒たちは、すでにトルコ支配下に立っていたボスニアの地方に逃亡した。そのなかには多くの貴族も交っていた。このような情況のなかで服属をすすめるスルタンからの使者が到来した（一四六二）。この勧告を拒否したステバン・トマシエヴィッツはヴェネツィアに救援を要請する使者を派遣したが、ヴェネツィアははっきりこれをことわった（一四六三・二・二八）。やむなくボスニア王はスルタンに一五年間休戦条約締結をもとめたが、すでにおそすぎた。メヘメットは三月末行動をおこした。そしてスコピエを迂回してヴチトルンにむかい、シトゥニャア河をこえてミトロヴィツァ、スジエニツツからボスニアに侵入した。ボスニアでの戦いは、山嶽の要塞攻略戦であった。ボボヴァツ、ジャジュチエ、クルジュツはあいついでは陥落し、ボスニア王は降伏した。残余のボスニア都市も王のすすめでトルコ側に服した。スルタンはつづいてボスニアを南下し、六月中旬ヘルツェゴヴィナに突入した。しかし山嶽地方での攻城戦は困難をきわめた。ゲリラ攻撃になやまされてスルタンは、モスタル南東の首都ブラガユを無駄に包囲した後、ヘル

ツェゴヴィナ征服を打ちきり、スジェニツァ（七・七）、スコピエ（七・一七）を経て帰還した。ボスニア住民は奴隸として、トルコ軍に編入されるが、イスタンブールその他の都市に移された。ボスニア王ステパン・トマシエヴィツは降伏後殺害され、王族も散り散りになった。

ボスニア王国滅亡の報は、直ちにイタリアに伝えられた。六月一〇日いち早くこの報をうけたヴェネツィアの驚愕と苦悩は量り知れなかった。すでにモレア（一四六〇）、レスボス（一四六三）がメヘメットの手におち、いままた、イタリアへの関門であるキリスト教のさいごの堡壘ボスニアも征服された。こうして、ダルマティアからヴァルダル河に連なるヴェネツィア植民地の連鎖は分断される危険が濃くなってきた。戦いに打って出づべきか、それとも、自国の権力と富の基礎であるギリシアおよびレヴァントの自国領がスルタンの手におちるのを、みすみす手を拱いて待つべきか。ヴェネツィアは生死の関頭にたたされた。ところで丁度この頃アテネのトルコ人総督の奴隸がヴェネツィア植民地コロニに逃亡し、ヴェネツィアとスルタンとの間にはモレアで、そのひきとり方をめぐって紛争が発生していた。導火線はこうしてすでに準備されている。これに火を点ずべきか否か。元老院では白熱した議論がたたかわされた。しかしついに主戦派が勝を占めた。ヴェネツィアは七月二八日トルコに宣戦した。こうして、今後一六年間つづくべきヴェネツィア・トルコ戦争がはじまった。

このように開始した戦闘がペロポネソスで進行の最中ヴェネツィアはハンガリア王マティアス・コルヴィヌスとの間に対トルコ攻守同盟を締結した（一四六三・九・一二）。すでにマティアスは皇帝フリードリッヒ三世との間の、帝位をめぐる争い（マティアスは一四五九年以来対立皇帝）をやめて和解し（一四六三・七・一九）その全軍勢力を対

ルコ戦争につきこみ得る態勢にあったが、いまやハンガリア軍をとまなつて一四六三年九月末ボスニアに進撃した。ジャジュチュエをはじめ多数のボスニア都市はトルコから奪回され、マティアスはクリスマスマスの日多数のトルコ人捕虜を伴つて首都に凱旋した。

当時上記のペロポネソス、ボスニアとならんでキリスト教諸国家とオスマン・トルコ帝国との決戦場をなしていたのが、アルバニアであった。ボスニアとおなじく、イタリア海岸へ到達する前のさいごの関門であるこのアルバニアでは、すでにのべたように一四四四年以来スケンデル・ベグが健闘していた。かれはアルバニアの豪族を対トルコ共同戦線に糾合することに成功し、一四五七年以来「アラゴン王の総大将」の称号をナポリのアルフォンゾからさずけられるとともに、後者からすでに長いこと軍隊、武器、糧食、それに資金の供給をうけていた。

アルフォンゾとスケンデル・ベグとの結びつきには因縁浅からざるものがあった。一二世紀のノルマン王朝以来すべての南イタリア・シシリア支配者がそうであつたように、アルフォンゾもまたエピルスに拠点をもつて東方に進出したいという悲願の持主であり、こうしてスケンデル・ベグとの間にはすでに早くから同盟関係が成立していた。この同盟をヴェネツィアがおそれたのはいうまでもない。そこでヴェネツィアは、共同の敵トルコにたいしスケンデル・ベグと同盟をむすびながら（一四四八・一〇・四）、後者がヴェネツィア領スクタリに加える圧力に脅威を感じてトルコ側にも物質をなしたり、またアルバニア貴族内に対立をあおりたてる一方、アルフォンゾとは一四四七、一四四八年イオニア海で砲火を交えていた。

一四五七年九月二日スケンデル・ベグは、南アルバニアのトモリツアで大勝を博した。しかしそのかれも、アラゴ

ン家から送られてくる資金だけでは戦闘の遂行に困難を感じはじめていた。スケンデル・ベグは西方のキリスト教君主に救助をもとめた。しかしナポリから僅かの軍隊、教皇カリクストゥス三世からトルコ戦の教皇庁総大将の肩書きが贈られたにすぎない。ヴェネツィアにいたっては法外な代償をふきかけて、アルバニア戦局の有利な展開という望みを失わせてしまった。こうして結局スケンデル・ベグは自力で戦闘を遂行するはかなくなつた。

このような、バルカン諸地域での個々の対トルコ戦を統一的な十字軍にまでまとめあげる努力が、マントヴァ会議（前述）での不成功（二四五九）にもめげず教皇ピウス二世によって続けられていた。すでに一四六二年三月、信頼するただ六人だけの枢機卿に教皇が打ちあけた十字軍計劃によれば、このたびは、キリストの代理者である教皇が自ら出馬して「聖戦」の指導に当る手筈になつていた。そうすれば西方の全ての支配者もかれに続かざるを得まい。一四六三年九月二三日、すなわちヴェネツィアがトルコと宣戦し（七・二八）ハンガリアと同盟と締結した（九・一二）その直後、教皇は、枢機卿全員にその意図を発表した。詳細な実施計劃が練られた後、一〇月下旬には全ヨーロッパにあてて十字軍教書が発せられた。キリスト教国家群の連帯感にうったえるこの呼びかけは、君主たちよりも中・下層身分に熱狂的反響をよびおこした。教皇の遠征準備が長びく間に、十字軍の出発地点アンコナには各地から、略奪品をめあてにした連中が続々と集まっていた。これに反して君主たちはなんとか新しい口実を設けては参加をしぶつた。ヴェネツィアではドージェ、クリストフォロ・モロが老齢を理由に従軍を回避し、主戦派の指導者ヴェットーレ・カペルロによって、ドージェの一身よりシニョリアの幸福と不幸の方がさきではないか、ときめつけられて、エンリコ・ダンドロの役目をひきうける破目においこまれた。一四六四年六月一八日、教皇はようやく腰をあげてローマをあと

にした。真夏の太陽の照りつけるアベニンを通過してのアンコナへの旅は、老いて病んだピウス二世にとって荷が重すぎた。教皇は七月一九日アンコナに到着したが、疲労は極にたっしていた。医師たちから、舟に乗れば二日しか命がもつまいと告げられたが、それでも教皇の意志は変えることができなかった。行をともした枢機卿たちは、この頻死者をそっちのけにして、目の前にせまったコンクラーベに熱をあげる始末であった。十字軍をのせるべきヴェネツィア・ガレー船は待てどくらせど姿をあらわさなかった。八月二日、ドージェはようやくヴェネツィアを出帆したが、アンコナへは直航せず、まずイストリアにむかい、そこでガレー船の艤装を仕上げたのである。こうしてようやく八月一二日、ヴェネツィア船の接近がアンコナで告げられたとき、アンコナ司教邸の寢室に病臥中の教皇は、海に面した窓辺に身をほこばせ、近づく船にむかって、こう悲痛のさけびをもらしたという。「今日まで出航の船が私には欠けていた。しかし今となつては、私の方が舟に欠けなければならぬ」と。事実八月一五日ピウス二世はこのアドリア海の港町で息をひきとつた。すでにその四日前には教皇の友人であった枢機卿ニコラウス・クザヌスがさきだつて生涯をおえていた。エンリコ・ダンドロの役柄を果せなかったクリストフォロ・モロは、アンコナからヴェネツィアにひきかえして、ガレー船の艤装を解かせた。こうして、成るかにみえたピウス二世の十字軍計劃もその寸前で挫折した。しかし一歩しりぞいて考えれば、当時のキリスト教世界の精神情況そのものが、かかる企てとは疾うにかき離れたものになつていたのであつた。

一四六三年の開戦以来ヴェネツィアがコンドティエレを派遣して遂行していたモレアでの陸戦も甚だ香ばしからざるものとなつていた。アルゴスはトルコ領となり（一四六三）、一四六五年には、幾つかの地点のヴェネツィア領を残

したまま、戦闘の主要舞台はすでにモレアを去っていた。ヴェネツィアのコンドティエレであるリミニの支配者シジモンド・バンドルフ・マラテスタはナウブリアを發つて、一四六六年故郷のまちへ帰還し、そのさいミストラに埋葬されたプラトン哲学者ゲミストス・プレトンの遺骨をもちかえった。スルタンの出馬によってこの一四六六年いご戦闘の重点は、スケンデル・ベグのアルバニアにおかれることになった。

一四六五年を、新首都づくりに専念し、学芸を振興する「創造的休憩」の年としたメヘメットは翌一四六六年二月、目標を秘匿して行動を開始した。それがアルバニアであることは、ヴェネツィアにおいてさえ、六月中旬はじめて判明した。メヘメットはマケドニア山中のビトーラを通過してアルバニアに入り、スケンデル・ベグの居城クルヤを包圍した。しかし攻略は成功しなかった。スルタンは自らその攻略を指揮することを断念し、軍隊を残し、エルバザン城塞を建設してアルバニアから引きあげた。こうした情況のなかをスケンデル・ベグはその年の一月一日援助要請のためローマにおもむいた。翌一四六七年にも、メヘメットは春から夏にかけてアルバニア戦線に出馬した。この年にはクルヤとともに、ヴェネツィア領ドゥラツツオが攻撃目標になったが、今回もまたスルタンはこれを攻略できず、夏のさなかアルバニアをひき上げざるをえなかった。しかしこの頃ボスニアのトルコ軍はすでにザダル、シベニークなどのヴェネツィア領ダルマティア都市に圧力をかけはじめた。ヘルツェゴヴィナでは、ステパン・ヴクチツの支配はマティアス・コルヴィヌスの一四六三年のボスニア出馬（前述）で挺入れされたけれども、ステパンの息子たちの兄弟争いを利用してトルコ軍はアドリア海のラグーザ周辺まで進出した。トルコ軍の接近は、数世紀の間バルカンの多端な政情を慎重な中立政策できりぬけてきたこのまちを恐怖の淵におとし入れずにおかなかった。すでに

スルタンに多額の年令をおさめ(一四五八年以来)、トルコ領内での自国商人の活動も次第に窮屈となつて、この聖ブラシウスのまちの栄光もこの頃ではもはや過去のものとなりつつあつた。こうしたなかでラグーサは年金の大幅ひき上げをもとめるスルタン要求に応ずるほかなかつた。ボスニア、ヘルツェゴヴィナのトルコ化はますますすすんだ。ボスニアのトルコ人総督はサライェボを本拠にえらび、ドリナ河畔のフォチャが軍指官サンジャク・ペイの基地になつた。こうして今や本来の掠奪専門の軽騎兵アキンジイのみでなく、このボスニアのトルコ正規軍が、セルビア北部の基地セメンドリアのトルコ軍と相呼応して、ダルマティア北部、クロアティアにむけて、一四六九年いごにはクライン、フリアウル、ケルンテンにまで掠奪行を試みるであらう。

一四六八年の年頭(一・一七)、アルバニア戦線には急転回がおこつた。二回にわたるスルトンの遠征にもかかわらず、いつ果てるとも知れなかつたこの山嶽地方の抵抗も、スケンデル・ベグの熱病による急死でくずれ去つたのである。トルコ軍はスクタリ、アレッシオ、ドゥラツツオ城下まで進出した。ヴェネツィアは、スケンデル・ベグの居城クルヤを接収したが、この「キリストの斗士」(cattola di Cristo)から、アルバニアの維持という、どえらい遺産を背負い込むことになつた。モンテネグロではチェルノジェヴィツが不信の徒にたいし不屈の斗争を続けたが、その南のエピルスでは、デスポテースのトッコ家は、大陸部ではアングロカストロ、ヴォニツツア、ヴァルナツツア、に領土を局限され、その他にレフカス、ケファロニア、ザキュントスの諸島を支配するにすぎなくなつた。こうしてトッコ家はヴェネツィアに頼りその代理人として、ヴァロナのトルコ人バシャと交渉する役を演ずることになつた。

一四六八年、西方が積極的行動に出ないとみてとつてメヘメットは、イブラヒム・ベク死(一四六四)後子供たちの

相統あらそいで国内が分裂しているカラマンにむけて自ら出馬し、首都コニアをおとしいれ、十一月イスタンブールに帰還した。これでカラマン問題が最終的に解決されたわけではなかった。イブラヒム・ベクと王妃であるムラド二世の妹との間に生れた子供の一人カシム・ベクはカイロのマムルーク朝のもとに、またイブラヒム・ベクと奴隷女との間に生れたイシヤクはウズン・ハッサンのもとに逃亡中であり、後には、寡婦となったイシヤクの妻がセレフケにたてこもるといふ具合で、禍根が絶たれたわけではなかった。しかしともかくもこうしてカラマンはトルコ帝国領に編入された。その間、メヘメットが予見したとおり西方は積極的行動に出なかった。ピウス二世に継いで教皇の座にのぼったパウルス二世は対トルコ戦の決意の程において、前任者の比ではなく、ヴェネツィアもこの年、出征前のスルタンに和平使節を派している程で戦意を欠いていた。ドイツでは教皇のすすめで対トルコ戦を議するため一四六六年一月にニュールンベルク・ライヒスタークが開かれ、これを皮切りにそれいご一連の召集がおこなわれた。だが具体的な成果はなんら得られなかった。かてて加えてマテイアス・コルヴィヌスは教皇庁の要請を入れてこの年の三月末日、フス派のボヘミア王ゲオルグ・ボディエブラドに戦いを宣し、ベーメンに侵入、メーレン・シュレジア・ラウジッツの大部分を占領、五月三日にはボヘミアの王冠を帯びたのであった。

一四六九年にはメヘメットは戦場に姿を現さなかつた。スルタンは数年来バルカンで暴威をふるっていたベストをさけるため、年のはじめをバルカン山中にさけた模様である。だがこの年には、ボスニアのサンジャク・ベイが指揮する騎兵隊が一月にザダル、シベニクまで進み入り、多数の人々を奴隷として連れ去つた。五月二一日には軽騎兵アキンジイがクラインのメドリリンクに現れ、小部隊に分れて掠奪をおこないながらリュブラーナ城門まで足をのば

した。クロアチア、イストリア、ダルマチア、そしてオーストリアまでがこのトルコ軍の掠奪行のまえにおびえた。この掠奪行はその後毎年のようにくりかえされることになった。

この年はエーゲ海でも戦斗があったが、ここでイニシアティブをとったのはヴェネツィアであった。ただしそれは、ヴェネツィアの常習とする海上からの掠奪行であった。このたびはテッサロニケ、エノスが目標にえらばれた。これを指揮したヴェネツィア提督ニコロ・ダ・カナレはこの仕事がすんだ八月、本国からの指令で、対トルコ共同戦線結成のためアク・コユンのウズン・ハッサンに使者を派遣するよう本国から指示をうけた。こうして、両国間の使節交換によって繰返されるであろう挾撃体制確立のための接触がはじまっていた。

ヴェネツィアのエノス奇襲（一四六九・七・一四）はメヘメットの側でのネグロ・ポント攻撃によって復讐されなければならなかった。メヘメットは丸一年がかりで艦隊の建設に本腰を入れた。この情勢をいち早く察知したヴェネツィアは、一四六九〜七〇年にネグロポントで越冬した自国艦隊を三段權船三五せきにまで増強した。前哨戦はすでにはじまっており、トルコ艦隊はスキュロス島を攻撃し、ネグロポントまで侵入して、カルキス近傍の海岸都市ストラ、ヴァシリコのごときを灰燼に帰せしめた。一四七〇年六月メヘメットは陸軍をひきつけて西方にむかい、同時にトルコ艦隊もダーダネルスを通してネグロポントに航行した。六月一五日トルコ艦隊はネグロポントと大陸の間の水域に抵抗もうけずに進み入った。圧倒的なトルコ艦隊に挑戦することをやめた臆病なヴェネツィア提督ニコロ・ダ・カナレはネグロポント南端の岬に投錨していたのである。艦隊のはこんできた兵員と、メヘメットが陸路でひきつれてきた主力軍とによって間もなく首都ネグロポント（カルキス）の包围がはじまった。メヘメットは大陸側か

ら対面の首都ネグロポントにむかって、せまい急な流れのエウリュッポス海峡に船をつらねて橋梁を渡し、そこをわたって主力攻撃をかけた。クレタで数せきの増強をえてダ・カナーレはふたたびネグロポント水域にもどってきたが籠城者の切なるねがいにもかかわらず船橋を破壊しようとしなかった。結局かれの帰還は、ネグロポント落城に目撃者として立会うためだったにすぎない。提督として幸先きよいスタートを切ったかれも、矢張り結局は、「読書のために生をうけた」人文主義者にすぎなかったのである。総攻撃は七月一日にはじまり、一二日未明までつづけられて、ネグロポント島の同名の首都はついに陥落した。

七月三〇日この悲報が伝わったとき、ヴェネツィア本国の市民たちは忙然自失した。七年間の戦争で巨額の戦費を投じた後にやってきたものが、この、ヴェネツィア領ローマーニア中最も富んだ植民地の一つの喪失であった。ヴェネツィアの権力と富の基盤であるレヴァント貿易はいまや大きくゆらぐかみえた。その間にあって元老院は、断乎戦いをやりぬくことを決議した。八月二五日教皇バウルス二世は全キリスト教君主にあてて、ネグロポント陥落の報をつたえるとともに、イタリヤ都市の間のあらそい、なかならずヴェネツィアとミラノの不和を解消させようと骨折った。事実ミラノのガレアツツオ・マリア・ズフォルツツアはヴェネツィアの苦境を利用して、ベルガモ、クレモナ、ブレシアなどの失地の回復をねらい、ナポリのアラゴン家のフェランテから参加を拒絶されてとりやめる一件もあったのである。教皇の努力が実をむすんで、一四七〇年一月二二日にはローマで全イタリアの対トルコ攻守同盟が成立した。しかしすぐつづいてミラノとフィレンツェが脱落してこの同盟も実効のないものとなった。トルコ問題はドイツのライヒスタークでも、一四七一年六月末、教皇使節をむかえて議事に上されたが、賛同はえられなかった。ラ

イヒス・シユテンデの自己中心の政策のまえに、もはやキリスト教帝国理念は色あせたものとなっていたのである。こうして、ひとりふたたびたかうことを余儀なくされたヴェネツィアが、一四七一年メヘメットにたいして試みようとしたのがその常套とする毒殺計劃であった。ヴェネツィアは一四五六年から一四七九年までの二三年間に合計一四回を下らないスルタン殺害計劃をはかった。今回白羽の矢が立ったのは、メヘメットの侍医であるガエタ出身のユダヤ人医師マエストロ・ヤコボであった。しかし今回もまた不成功におわった。

一四七一年メヘメットはイスタンブールを離れず、ファティ・ジャームを仕上げさせるとともに、学芸を愛好する「メセーム」としての日日をおくった。おそらくこの年最初の悪化の徴候をみせはじめた持病の痛風がかれに戦場への出馬を不可能にしたとおもわれる。そしてまたこのような健康状態が、メヘメットに、夢である全西方世界の征服が生涯のうちに果して実現できるかどうかを反省する機会を与えたのであろう。アドリア海の渦のまちは、一四七一年七月三日スルタンよりの使者をのせた一せきのガレー船が到達した。もとよりメヘメットの持ちだした和平条件はヴェネツィアのみうるような内容のものでなく、和平は成立しなかった。

一四七一年にメヘメットを苦しめたものに、その健康状態とならんで国際政局にたいする不安があった。この年の七月二六日に急逝したバウルス二世についての教皇の座にのぼったシクストゥス四世（一四七一—一四八四）は、ヴァティカンのあの有名なシステイン礼拝堂の建立者であるが、同時に十字軍計劃を全ヨーロッパ的な規模ですすめたさいごの教皇であった。シクストゥスはこの年のクリスマス、秘密枢機卿會議を開いて五人の教皇特派大使を任命し、それを全キリスト教君主の許に派遣して十字軍結成をよびかけることになった。こうして、ピザンツから亡命したベッサリ

オンはフランス、ブルグンド、イギリスに、ロドリゴ・ボルチアはスペインに、アンジェロ・カブラニカはイタリアへ、マルコ・バルボはドイツ・ハンガリアに、オリヴィエロ・カラッファはナポリ王の援助で建設さるべき艦隊の指令官に、という具合に、五人の枢機卿はそれぞれ部署を割当てられた。しかし今回もまた成果はなんら得られなかった。ベッサリオン枢機卿は翌年一月一八日ローマ帰還をまえにラヴェンナで不帰の客となった。シクストゥスはそれにくじげず、教皇庁の財政不如意のなかを艦船建造のために一四万四千ドゥカートも出費し、ヴェネツィア・ナポリと結んで十字軍艦隊の結成にのり出した(後述)。この教皇のうごきにも増してメヘメットの頭痛の種になったのが、この教皇、およびヴェネツィアとむすんでトルコ帝国の東境をおびやかそうとするウズン・ハッサンの存在であった。翌一四七二年から三年にかけて、事実、メヘメットはアク・コユンに兵をすすめなければならなくなった。

このメヘメットの東部国境における戦いが、西部国境で続いていた戦斗情況と、いかなる関連のもとにおこなわれたか。その一部始終は詳かでないけれども、すでに一四六九年に(前述)おこっており、遡っては一四六三・四年にはじまったウズン・ハッサンとヴェネツィアの交渉関係が、ネグロポント陥落いご、きわめて緊密度を加えたことだけはたしかである。それに、カラマンのイブラヒム・ベグの遺児たち(前述)にたいして、一四七〇年ネグロポント攻撃と平行してすすめられ、翌七一年にもおこなわれた出兵の結果、これら遺児たちのうしろで糸をひくウズン・ハッサンとの対決は次第にさげ難いものとなっていた。こうして、一四七二年一〇月二日、メヘメットは、全船艦を差押えて船団を確保し、軍隊を徴集し、基幹軍団のイエニ・チェリの給料をひき上げてその士気を鼓舞するなど、準備万端をととのえたのち、ボスフォロスを渡ってアナトリアを進撃した。晩秋のアナトリア行は暴風雨の到来でメヘ

メットをくるしめたが、かれはベイジェヒール湖畔のたたかいで勝利をつかみ（一四七二・一〇・一九）、アナトリア奥地で越冬した後、翌一四七三年八月上旬、エルゼルムとエルジンジャンの中間テルジャンでウズン・ハッサンを敗走させた。しかしメヘメットはそれ以上ウズン・ハッサンを深追いすることをあきらめた。そしてアマシアで休息をとり、アンゴラ、クタヤをとおってその年の晩秋イスタンブールに帰還した。アナトリア遠征はメヘメット本来の持病である痛風を激化させた。一四七四年、かれはそのため戦場におもむけなかった。スルタンは、新築のスュルチャ・セラユにこもって作戦計画を練った。その間トルコと西ヨーロッパの関係はどうなっていたであろうか。

シクストゥス六世が企てた十字軍艦隊糾合についてはすでにふれたけれども、教皇艦隊はようやく出来上り、枢機卿オリヴィエロ・カラッファに指揮されて、ヴェネツィア艦隊と合流した（一四七二・六）。アラゴン家のフェランテが拠出したナボリの艦隊もこれに加わった。ヴェネツィア提督は、ネグロポント陥落の責任を問われて罷免されたニッコロ・ダ・カナレ（前述）の後任者ピエトロ・モチエニゴであったが、この名提督が全キリスト教艦隊の事実上の指導者であった。この全艦隊は計八五せきのカレー船から成り、その内訳は、四八せきがヴェネツィア（うち一二せきがダルマティア都市に所属）、一八せきが教皇庁、一七せきがナポリ、二せきがロードスの提供になるものだった。トルコ艦隊はダーダネルスから出撃の態勢を示さなかった。挾撃作戦のためすでにいくたびか使節交換をしていたウズン・ハッサンと直接接触をもちうる地点として小アジア西南岸は重要な意味をもっていた。この間にあってモチエニゴは、イブラヒム・ベクの遺児がカラマンに舞いもどってメヘメットに反旗をひるがえすのを支援して、セレフケ、シギノ、コリュコスを一時的に占領し、キリキア、カリア、リュキアの海岸を荒掠し、スミルナを奇襲した（一

四七二・九・一三)。事実かれの墓碑銘はこううたっている、かれはヘレスポントからキプロスにわたってアジアを火と鉄で劫掠し、ヴェネツィアの同盟者カラマンの諸王をオスマン・トルコの抑圧から解放して、王位にふたたび復帰させた、と。しかしながら、勇敢な戦士ではあっても海の英雄ではなかったかれにとつて、それがすべてであった。かれは、メヘメットがウズン・ハッサンとの戦いに出馬中に(一四七二・秋—一四七三・秋)、ダーダネルスを突破してイスタンブールをつくべき好機をみすみすのがした。ウズン・ハッサンとの接触も保てなかった。一四七三年三月二九日、武器供与について議するためタブリーズのウズン・ハッサンの許におもむく途次のヴェネツィア使節ジョサファト・バルバロがキプロスに到着したが、トルコ人が小アジア海岸を封鎖して、使節は一ヶ月以上も島に足ぶみしなければならなかった。折からモチエニゴの艦隊はキプロスに碇泊していたが、バルバロの要請にもかかわらず、提督はイブラヒム・ベグの遺児をたすけて小アジアにとりつくことを肯じなかった。その間ウズン・ハッサンの運命は決定してしまった(一四七三・八)。

一四七二—三年の東地中海におけるキリスト教艦隊の活動がこのようであつたとき、バルカンではひきつづいてトルコ軍のクライン、シュタイエルマルク、ケルンテンへの遊撃作戦がおこなわれた。フリードリッヒ三世は四周の敵対者にたいし手一ぱいで、ライヒ南東国境地帯になんら統一的防備措置を施しえず、この地方の防衛はあげて貴族やラント・シュテンデに委ねられなければならなかった。ハンガリアが防衛を負担すべきクロアチアもこの遊撃作戦にさらされた。そしてすでに一四七〇—七一年、ドナウとサーヴェの両河にそつて、シャバツをはじめとする一連のトルコ要塞がハンガリアの鼻先きにたてられた。マティアスは折からボヘミアをめぐつてポーランドと争っているさ

い中で、トルコ側のこの要塞工事を阻止することができなかった。イタリアでは、諸都市の間の戦列配置がめまぐるしいほど転移した。

ウズン・ハッサンを討って東方における禍根をとりのぞいたメヘメットが一四七三年晩秋イスタンブールに帰還すると、ここにトルコの暗雲は重くバルカンの山と野にたれこめた。ヴェネツィアはすでに危機を予感して、アルバニア海岸を固め、ドゥリム、ボヤナなどの河口を援護する仕事にとりかかった。丁度任期をおえてキプロスから帰国の途にあったピエトロ・モチエニゴは後任提督トゥリアダン・グリッティと合流し、両者はともにたずさえて一四七四年五月以来アルバニア海岸で、この沿岸防備の任務を担当することになった。スクタリ湖畔のこの地方の中心スクタリの守備隊長には、勇者をもつて鳴るアントニオ・ロレダンが任命された。

ヴェネツィアの予感は的中した。ルメリ総督スレイマン・パシヤは大軍をひきつれてセルビア、マケドニアと南下し、同年五月初頭スクタリ前方に陣を布いた。ヴェネツィア側は、ガレー船をコトール（四せき）、ドゥリム河口（五）、ドゥラツツオ（四）、のほかブドゥヴァ、アンティヴァリ、ドゥルチニョなどに分散配置するとともに、このりのガレー船は二提督が同船してボヤナ河口を廻り、スクタリから六マイル川下の地点に投錨した。モンテネグロのイヴァン・クルノジエヴィッツがヴェネツィア側に援助をする筈であった。包囲は七月一五日はじまり、八月二八日までつづいた。トゥリアダン・グリッティ提督はボヤナ河口の、勝負の帰趨定まらない激戦中に湿地帯の熱病におかれコトールにひきかえして死亡した。スクタリも圧倒的な包囲軍をひきうけて危機におちいったが、指令官アントニオ・ロレダンの勇気がこれをすくった。スレイマン・パシヤは囲みをといて撤退した。ボヤナ河口の熱病になや

まされていたヴェネツァ艦隊も、スクタリの危機が去ったのをみて、ラグーザを経て本国に帰航した。この年の一月一日、こうして帰還したピエトロ・モチエニゴはドージェの地位についた。しかしすでに七〇歳のこの名提督は、一〇ヶ月ドージェ職を在任したにすぎなかった。

この一四七四年のイタリアでは対トルコ共同戦線をめぐって新なうごきがあった。この年の秋、ヴェネツィア、ロレンツォ・デ・メディチのフィレンツェ、ガレアツォ・マリア・ズフォルツアのミラノの三者間には同盟がむすばれたが、つい最近まで十字軍艦隊でヴェネツィアと行をともししてきた教皇庁およびフェランテのナポリがこのたびは参加しなかった。

一四七四年にもまたトルコ軍のハンガリア領内およびハブスブルグ領内への遊撃がおこなわれた。フリードリッヒ三世はケルンテンのシュテンデにむかって、クライン、シュタイエルマルクと協力して国境地方で抵抗をおこなうよう呼びかけた。一月ハンガリア王マテイアス・コルヴィヌスはボヘミアをめぐるポーランド王カシミール四世との戦争を一応終結し、対トルコ戦争と取組みはじめた。これにはマテイアスがアラゴン家からフェランテの庶子ベアトリチエを妃としてむかえるという再婚話しが当時進行中だった事情も一役買っていたことが見のがせない。こうして、オスマン・トルコ帝国と西ヨーロッパとの間にはさしたる変化もないままに一四七四年は暮れた。

翌一四七五年はトルコ軍のワラキア侵入で明けた。モルダウの好戦的貴族、大ステファンは一四七三年メヘメットの東征を利用してワラキアに侵入し、メヘメット側の傀儡ラドゥ（前述）にかわるべき自分の側の傀儡バザラブ・ライオタを擁立した。こうして、ワラキアでは、トルコ派とモルダウ派とが入乱れて政權獲得のために争うことになっ

たが、メヘメットは一四七四年の初秋、軍隊をドナウ北岸に出動させて事態を解決しようとした。しかしこのたびもワラキアの地勢は、やがておとずれた苛酷な冬の気候と相俟ってトルコ軍を苦しめた。明けて翌一四七五年の早々の一月一〇日、モルダウ軍はトルコ軍に殲滅的打撃を与えた。ステファンは早速、ポーランド王カシミールのもとに、捕虜としたトルコ人隊長および分取った三六の連隊旗を、援助をうけた返礼として贈った。ハンガリア王マティアス・コルヴィヌス、教皇シクストゥス六世までが同様のお裾分けにあずかった。こうして、以前はトルコ軍によって占領されていたモルダウとベッサラビアの国境地帯のほとんどすべての城塞が、いまやトルコ人守備隊によって放棄されて、モルダウ支配者ステファンの権力の下に立つにいたった。

メヘメットは、こうしたモルダウ遠征の結末を甘受しようとせず、自ら出馬してステファンに復讐をいともうとしたが、痛風で果せなかった。その間、カッファ攻略計画の方は順調にすすみ、五月一九日、トルコ提督ゲディック・アーメッド・バシヤが艦隊をひきいて遠征の途にのぼった。遠征は成功で、カッファ以下の、黒海北岸のジェノヴァ植民地はすべて消滅し、レヴァント貿易のためにジェノヴァにのこったのは、キオスとその対岸のアナトリア海岸にすぎなくなった。八月三日、提督は莫大な捕虜と戦利品を載んでイスタンブールに凱旋した。

この一四七五年、スルタンはヴェネツィアにたいしては和解的な態度に出、和平条約を示してきた。その内容はヴェネツィアの到底のむことの出来ないものであったが、そのさいスルタンは和平条約の諾否決定のためにヴェネツィアに六カ月の猶予期間を与え、この期間中は休戦状態を続けようと申出でた。すでに一二年も戦をつづけてきたヴェネツィアにとって、一いきつくひまとして、これは充分に魅力ある話だった。五月二四日スルタンの申出では受理

され、ヴェネツィア提督には戦闘行為停止の指令が伝達された。こうしてトルコ側は少くとも半年の間、対ヴェネツィア戦から解放されて、行動の自由を確保した。キリスト教世界ではシャル豪胆公を謀本人とするブルグンド戦争が中部ヨーロッパの諸国を広般に緊張関係に捲き込んで、トルコにたいする一致した行動を思いもつかぬ彼方におしやうてしまった。この一四七五年にもまた、トルコ軍はクライン、ケルンテン、シュタイエルマルクに遊撃作戦をくりかえした。そしてこれをむかえうつのは今回もまたハプスブルクの皇帝でなく、この地方の地方貴族であり、なかでもラドゥケルスブルクの領主ジギスムンド・フォン・ポルハイムは八月二四日ソットゥラ河畔のカイゼルスベルクで奮戦したが、仲間の貴族とともに捕えられた。

オーストリアへの侵入口にあたるクロアチアもトルコ軍の荒掠を蒙ったが、これを防衛しなければならない筈のマティアス・コルヴィヌスも、この地方をトルコ軍のなすがままにまかせた。但しかれの場合、すでにのべたように、一四七五年から対トルコ戦の準備を着々とすすめていたのであり、一二月には自ら出馬してベオグラードに陣を張り、翌年一月初旬にはベオグラード西方数マイルの地点にあるシャバツツ攻撃に着手した。二月一五日このトルコ城塞は降伏した。王はこれをハンガリア城塞に転ずるとともに、ドナウ・サーヴェ河にそって上流に向い、トルコ軍前進基地セメンドリアを攻略しようとした。しかし堅固に武装化されたこの城塞を陥落させるには攻城器が不足しており、マティアスはセメンドリアの対面に、木材で三城塞を設けることで満足しなげばならなかった。ハンガリアのこの軍事行動はその年の夏トルコ側の報復侵入を生んだ。マティアス自身はべつにそれを阻止するため軍事行動に出なかつたのであり、ただハンガリア地方貴族がこれを邀え撃つたのであって、トルコ軍がセメンドリアからドナウを越え

テメシエヴァールに侵入したとき、その指令官であるナジ家のアルベルトおよびアムプロスが、ベオグラード防備隊長以下のハンガリアの勇士たちとともにむかえうち、ヴァイスキルヘン東南方ドナウ河畔のポゼナ山腹で侵入トルコ軍に壊滅的打撃を与えた。この一四七六年には、ハンガリア南東国境をこえてオーストリアへもトルコ軍恒例の侵入が繰り返されたが、皇帝の側からも、シュテンデの側からも見るべき抵抗は試みられなかった。見放された平地の農民たちは、トルコ軍の侵入がシュテンデの諒解のもとにおこなわれているとして自分たちの主人をとがめ、地域によっては地方当局者にたいして反抗にたち上った。

マティアスがシャバツを占領しセメンドリア対面に木造城塞を構築しただけで、対トルコ戦をそれ以上おしすすめなかった(前述)ことについては、事情があつたのである。マティアスは当時フリードリッヒとまたしても不和になつてゐた。すなわち、マティアスはその頃レーゲンスブルグでひそかに二四せきの小艦隊を建造中であり、おなじくドイツで調達中の攻城機とあわせてセメンドリア攻略に用いようと考えていたのであるが、マティアスがこれら艦船・武器の免税輸出をフリードリッヒに要請したとき、皇帝はこれを拒絶したばかりでなく、ドイツ盗賊騎士団をそのかしてハンガリア国境に侵入させたのである。このフリードリッヒとの不和にもまして、マティアスに対トルコ戦の続行を思いとどまらせた原因が、ほかならぬベアトリーチェとのさしせまった結婚であつた。式は一〇月に予定されていた。一〇月二日、一九才のこのアラゴン家の花嫁は多勢の随行者を伴つてマンフレドニアから乗船した。しかしダルマティアに上陸するという予定は、トルコ人の跳梁でどうしても果せず、花嫁一行はイタリア東岸に上陸、ヴェネツィア領を通過してクライン、シュタイエルマルク、と旅をつづけなければならなかつた。これを聞きつたえ

たトルコ輕騎兵隊は花嫁を捕えんものと一行が通る道筋で放火、殺掠の限りをつくした。花嫁はゆく先々でこの荒掠の跡を目撃して限らない恐怖の旅の毎日をおくったが、それでも一月初旬ようやくベッタウにたどりつき、ハンガリア国境をこえて無事マティアスの領内に入った。華燭の典と戴冠の儀はシュトゥールヴァイセンブルグとオーフェンでおこなわれた。尨大な費用捻出のためには、人民に重税が課され、新王妃がイタリヤ・ルネッサンスのナポリ宮廷からもちこんだ華美な好みが王室財政を一層火の車においこんだ。

このおめでたい年もおわろうとしている歳末のある日、御成婚の喜び未ださめやらないオーフェンの宮廷に急使が到来した。マティアスは蜜月の床にひとりペアトリーチエ妃をのこして出征しなければならなくなった。スルタン、ハンガリア国境に現わる、の報がそれであった。

メヘメットは前年の初頭モルダウの支配者大ステファンからワラキアで蒙った敗北の恥をそごうとしてその年こそ宿願を果せなかつた(前述)ものの、翌一四七六年の三月末にはトルコ軍集結の地であるアドリアノーブルにむかい、そこで一ヵ月余滞在の後、ヴァルナを経、黒海沿岸にそってドブルジャを北上、ドナウを渡河してワラキアに入った。これに対抗するステファンは前年同様、ワラキア全土を廢墟とし、その農民および市民とともに、通過困難な嶺の森林に身を匿した。トルコ軍は進むにつれてワラキアの伏兵からゲリラ戦をいどまれていくとも手痛い敗北を蒙ったのち、七月二六日夜半ケタテア・ネアムツルイ近傍の「白い谷」で包囲された。メヘメットは麾下イエニ・チエリ軍団の先頭にたつて反撃に転じた。ステファンは敗走した。しかしメヘメットは勝手の知らないこの荒涼たるワラキアの野にいつまでも軍をとどめておくことはできなかった。それに、モルダウ軍より更に強力なハンガリア軍を

警戒しなければならぬ事情も手伝って、メヘメットは軍隊をひき上げ、ニコポリスでドナウ河を渡った。そして遠征軍の編成を解くためアドリアノーブルにむかった。こうして不徹底な遠征をおえたメヘメットをそこで待っていたのは、ワラキア遠征中、マティアスがセメンドリア攻略をねらい、そのために木づくりの三要塞をその前面に建てた、という情報であった。スルタンは遠征軍の疲れをも無視して一〇日後には北部セルビアへの進発を命令し自ら指揮をとった。ソフィア通過のときには、この年のことのほかきびしい冬がもう始まっていた。木づくり城塞のハンガリア守備隊はこのトルコ軍の接近をみとめると戦意を失い、ただ一城塞だけが抵抗したが、それもながくは続かなかつた。すではりつめたドナウ河の氷面をトルコ軍はたやすく渡ることができたからである。防備隊はベオグラードへの徹収を条件に開城を申し出て許可され、城塞をすてた。

オーフェンの宮廷にとどいた、スルタン出馬す、のさきのしらせは、トルコ側のこのうごきをつたえるためのものであった。マティアスは急ぎ戦場におもむいたが、セメンドリアのまもりをかためたメヘメットは、一二月二二日イスタンブルに帰還してしまっていた。こうしてマティアスは戦場にもはやスルタンのかげをみとめなかったのである。この一四七六年のほとんど休むひまもない遠征の連続で、スルタンは身心ともに疲れはててしまった。なによりも休息が必要であった。こうして翌一四七七年をスルタンは首都ですごすことになった。

スルタンがワラキア、セルビアと出馬していた一四七六年には、その前年ヴェネツィアとの間に成立した半年の休戦期間も満ちて、トルコ軍はヴェネツィアに攻撃を再開した。五月にはギリシアのヴェネツィア領レバント要塞が攻撃をうけた。ヴェネツィア提督アントニオ・ロレダンは基地ナウブリアから一一せきのガレー船で急遽レバント沖に

おもむき、籠城ヴェネツィア軍に武器、糧食を補給するとともに、現れたトルコ艦隊と戦いを交えた。城壁に押しよせるトルコ軍は撃退されて(七・二五)しりぞいた。アルバニア戦線ではヴェネツィアにとって困難なたたかいが続いた。晩春ゲディツク・アーメッド・パシャがクルヤ城を包圍攻撃したが、ヴェネツィア守備隊長ピエトロ・ヴェツトウリは勇敢に抵抗し、全アルバニアのヴェネツィア人総督フランチェスコ・コンタリニが救援におもむいてトルコ軍を一たん解圍させた。しかし統いてコンタリニがトルコ軍の奇襲をうけて捕虜となった。ふたたび包圍は始つた。

西方に進出するトルコ帝国にとってさいごの関門であるこのアルバニアにたいして、ヴェネツィアは根づよい防衛の努力をつづけたが、これは、始終その対トルコ關係において動揺し、一貫した方針を堅持できなかったマティアスと対照的であつた。ハンガリア王は、ペアトリーチェとの結婚式まではともかくも問わないとして、その後も、メヘムットとの困難な、出費の多い戦闘に全身を投ずるほどの情熱は、一かからほども、もち合せていなかったのである。

そのヴェネツィアには一四七六年末から、さらに新たな脅威が加わる事になった。この年の一月二六日にはイストリアのカポ・ディストリアがトルコ軍遊撃隊の奇襲をうけたが、翌一四七七年秋には、イソンツォ河口のアクイレイアからギョルツにはしる防衛線を突破して、トルコ輕騎兵はフリアウルに侵入し、ヴェネツィア傭兵隊は破れて多数が捕えられた。トルコ軍はイソンツォ・タリアメント両河にはさまれた山野を荒掠し、森林、城塞、納屋、家屋に放火した。つづいてかれらはタリアメントを渡河してピアヴェ河までの平原を荒した。ヴェネツィアではサンマルコの望楼からトルコ軍のはなつた火焰がのぞまれたという。一月二日ヴェネツィアが集めうる最大の兵力がヴェツトーレ・ソランツォに指揮されて、すでに指呼の間にせまったトルコ軍を駆逐しようとしたが、いち早く侵入軍はお

びただしい捕虜とともにひき上げていった。

「敵は城下におしよせている。斧は根にふり下された。こういう叫びがヴェネツィアにあがっていた一四七七年、マティアス・コルヴィヌスはスルタンにほこきを向ける代りに、ボヘミアの王位継承問題をめぐってフリードリッヒ三世と戦いを開始し、八月上旬には下オーストリアに侵入してその地方の都市の大半を自己の権力下に収めた。そして教皇シクストゥス四世およびシニョリアの仲介で、ようやく一二月に皇帝と和解する始末であった。

イタリアでは一四七七・八年、ナポリのアラゴン家のフェランテがスルタンにたいして親和な態度を示し、ナポリ王国内の全海港をトルコ艦船に開放した。その動機は不明のままに、その提唱者がマティアスの義父フェランテだったところから、ハンガリア王もまたスルタンと友好関係を保っているのではないか、という疑いがヴェネツィアを悩ませた。ともかくもこの年マティアスが、有望におもえる攻撃をならおこなわず、国境防衛のみを事としていたことだけは事実であった。こうしてヴェネツィアが、ひとり戦争を遂行しなければならぬ重みにたえかねて、たとえいかに苛酷な条件であれスルタンと和平を結ぼうという気になっていた折も折、スルタン側から話が切り出された。トマソ・マリビエロは翌一四七八年一月上旬、広般な権限をシニョリアからささずけられてイスタンブールにおもむいた。しかしかれは、メヘメットから、ヴェネツィア側の譲歩の腹をよみとられて、ますます過大な要求をふきかけられた。かれは本国にもどって相談するためスルタンから二ヶ月の猶予・休戦期間をとりつけ、四月一五日イスタンブールを後にした。トマソ・マリビエロをむかえて、元老院はスルタンの申し出た和平の条件を検討したが、結局それをのむよりほかなかった。ふたたびトマソ・マリビエロはスルタンおよびヴェジールたちのために高価な贈物をたず

さえてイスタンブールにもむいた。しかし使節は目的地につかなかつた。休戦期限のきれる三日前にスルタンはアルバニアに大軍をひきいて出馬したのである。途中メヘメットはボスニア総督スケンデル・ベグにフリアウル侵入を命じたが、これは直ちに実行にうつされた(後述)。

こうして最後のアルバニア攻撃がはじまつた。攻撃の主目標はスクタリであつた。トルコ軍近接す、の報が相継いで至るなかを、スクタリでは連日連夜、城壁と堡壘の強化工事が続行された。城内の人間は三分され、一部が要塞に配置され、一部が土木工事を担当した。聖職者を含めたのこりがそのままでいた。婦女子は近くの安全な海港都市に移された。その間、五月一五日にはミハル・オルグ・アリベグが八千人のアクンジイを指揮して現れたのをはじめ、つづいてボスニアのサンジャク・ベイであるイスケンデル・ベグが四千の、セメンドリアのサンジャク・ベイであるマルコチ・オルグ・バリベグが三千の軽騎兵をひきつれてスクタリ城外に到着した。しかしこれは先遣隊で、総勢の一部にすぎなかつた。メヘメット自身はまずクルヤにむかつた。一年以上も包囲されて、この堡壘の籠城者たちは犬猫の肉まであさるほど餓餓状態においこまれていた。スルタン自らが包囲に加わつてはもうこれまでと、六月一日かれらはメヘメットに開城を申し出でた。生産財産の保障にもかかわらず、かれらが城をすてて平地に出ると、身代金支払い能力のある者をのぞき、すべての者が殺害された。前者は奴隸とされたがそのなかには、クルヤ防衛司令ピエトロ・ヴェットゥリとその家族がいた。こうしてクルヤ政略をおえたスルタンは七月二日スクタリ城外に現れたが、すでにここには、ルメリ総督ダウドゥ・パシヤおよびアナトリア総督メシ・パシヤがそれぞれ主力をひきいて到着し、六月二二日に包囲攻撃がはじまつていた。

この第二回スクタリ包圍（第一回は一四七四―前述）をめぐる攻防戦は、西ヨーロッパとトルコとの戦いのなかでも、最も特筆すべきもので、キリスト教側はこの最後の拠点をかためるために莫大な資金を投じており、そのおこなう抵抗は熾烈をきわめた。これにたいしてトルコ側はルメリの全動員軍を主力とし、これにアナトリアからの援軍を加えて、その数三〇万と同時代の史家は報じている。無数のラクダと駄獣がテント、荷物、攻城器を運搬した。攻城用重砲も、トルコの兵法どおり、すでに現場で鑄造されており、その巨大な口径からは、無数の大石が発射された。蠟・硫黄・油その他の可燃性物質で浸された布巾の弾丸、焼夷火筒もはじめて登場をみた。

これらの飛道具で突破口がひらかれた後、七月二日には第一回総攻撃が、五日後の早朝から翌日正午にかけては第二回総攻撃がこころみられたが、いずれも成功しなかった。三日後の八月末日、スルタンは大本営会議を召集し作戦計画を練りなおした。その結果スルタンはトルコ軍の一部を包圍にあて、残り全軍をもって四周の敵拠点を攻撃を加えることになった。イワン・クルノジュヴィッツが拠っていたところのザブリヤクは、モラツチャ河がスカダル湖にそそぐ沼沢地帯を見わたす屈強の地点にあったが、攻撃をうけて直ちに降伏し、ドゥリヴァストも一六日間の抵抗の後に陥落した。住民が逃げて人気のなくなったアレッシオは放火され、ニコラオス教会に安置されたスケンデル・ベクの遺骨は荒された。アンティヴァリだけは勇敢な防衛で攻撃を押しかえした。すでに秋はせまっていた。大軍をいつまでもアルバニア山中にとどめておくことはできない。九月七・八日の夜スルタンがまずひき上げ、つづいて同じ月のうちにアナトリア軍団が、一二月にはルメリ軍もアルバニアをすてて東方にひきかえした。こうして、ヴァロナのサンジャクベイだけがのこって包圍網を維持することになった。

ともかくもこうして危機は一たん緩和されたが、その間スクタリ籠城者の状態は、すでにたえ難いものになっていた。水とパンこそまだあったものの、鼠までを含めて一切の動物がすでに食い尽されていた。守備隊長アントニオ・ダ・レツツツェは本国に事情をうったえて即刻の急援をもとめてきた。ヴェネツィアのシニョリアは一月一日、一たん援軍派遣を決議したが、その四日後これを撤回した。東南ヨーロッパをおそっていたペストがいまやヴェネツィアに蔓延したのである。富裕な市民はまちをすてて山中に伝染病の難をのがれるありさまであった。

一四七四年（前述）に根をひくイタリアの政治的分裂はますます大きくなり、ヴェネツィア・フィレンツェ・ミラノ陣営と、教皇庁・ナポリ陣営とのみぞは深まる一方だった。この同じ一四七八年には、アク・コエンのウズン・ハッサンがこの世を去った。イスケンデル・ベグはスルタンの命令で（前述）、クライン、ケルンテン、シュタイエルマルク、フリアウルに遊撃に出た後、夏のさかりにふたたびヴェネツィア近郊にあらわれた。そして荒掠をかさねた後、ふたたびケルンテン、クラインにむかって姿を消した。こうしたなかでこの年の暮ヴェネツィアはとうとう戦争終結を決心した。特使にえらばれたのは、当時もっとも有能な政治家であるとともに、オスマン・トルコ帝国の事情に精通していた元老院書記ジョヴァンニ・ダリオであった。ヴェネツィアのレヴァント貿易が確保できるなら、メヘメットにいかなる譲歩をおこなってもはやいた仕方ない。ヴェネツィア史上かつてみないほど大幅な権限を附与されて特使はスルタンのもとにいそいだ。

一四七九年一月二五日、ジョヴァンニ・ダリオはスルタンとの間の和平条約の話し合いに成功した。その内容はつぎのようであった。一、ヴェネツィアはスクタリとその周辺地域をトルコ側にひきわたすこと。二、クルヤ、レムノ

スおよびネグロポント両島、およびモレア南端のマイナ、についても同様であること。三、一六年の戦争の間にヴェネツィアが占領した地域はトルコ側に返還すること。但しヴェネツィアは守備隊と武器を安全にひきあげる権利をもつ。四、メヘメット側も、この期間中にモレア、アルバニア、ダルマティアで占領した地点はヴェネツィア側に返還すること。五、双方の側から全権を出して戦線整理をおこない、国境を戦前の状態に復帰すること。六、二ヶ年以内に分割払いで金貨一〇万ドゥカートをヴェネツィアは明礬鈹についての貢納分としてスルタンにおさめること。七、金貨一万ドゥカートをヴェネツィアは、トルコ帝国内での免税輸出入許可料としてスルタンにおさめること。八、イスタンブールのヴェネツィア総督はそのまま存置され、従来どおりの権限がみとめられること。ゾヴァンニ・ダリオは大任をはたしおえて四月一六日帰国した。和平条約は同月二五日公表された。カナル・グランデに沿ってたちならぶヴェネツィア貴族の館の一つにゾヴァンニ・ダリオの屋敷がある。そこには誇らしげな碑銘 *VRBIS GENIO IOANNES DARIUS* が今日なおみられるであろう。

和平締結の報が伝わると、スクタリの生き残り籠城者はアントニオ・ダ・レッツツェに引率され、はこびうるすべてをたずさえ、トルコ側から通行の安全を保障されて激戦の地アルバニアをあとにした。スクタリの城壁には昨日までの聖マルコの旗、およびこのまちの守護神である聖ステファヌスの旗にかわっていまや半月旗がひるがえった。かれらはボヤナ河に達し、そこで碇泊中のヴェネツィア艦隊に收容されて本国にむかった。

翌一七八〇年にもゾヴァンニ・ダリオは全権を委託されて活躍した。ヴェネツィア領としてとどまったナウブリア、モネンバシア、コロニ、メトーニ、レバント、コルフ、ドゥラツツォ、コトール、ブドゥヴァ、アンティヴァ

リ、ドゥルチニヨ、そしてスバラトの各地におもむき、トルコ・ヴェネツィア国境線の整理確定するのがその仕事であつた。かれはそれを果した。

トルコ・ヴェネツィア和平条約は、一五世紀ののこりの二〇年間ともかくも維持された。ヴェネツィアは年額金貨一万ドゥカートの通関税とひきかえにレヴァント貿易の自由を確保した。この年金は数々年支払われただけで、一四八二年一月二日バエジツト二世によって権利放棄されてしまった。しかしヴェネツィアがアルバニアで払った犠牲は甚大であつた。今やスルタンはこの地方で思いのままに振舞うことができるようになった。アルバニアでヴェネツィア領としてなお残つたアンティヴァリ、ブドゥヴァ、ドゥルチニヨは、不落の城塞スクタリに到底かわりうるものでなかつた。そのうえ、一四八〇年にはトッコ家の支配するケファロニア、ザキェントス両島（但しザキェントスのみは四年後、バエジツト二世によって年金ひきかえにヴェネツィアに移譲さる）がトルコ海軍によって占領された。トルコ海軍のこの地方における根拠地としてすでにヴァロナがあつたが、いまイオニア諸島の領有を加えて、ヴェネツィアのアドリア海支配にはひしひしとトルコの重圧がおよびはじめた。ながらくイオニア諸島に領主として君臨しつづけたトッコ家ではあつたけれども、当主レオナルドは一族とともにナポリのフェランテをたよつて落ちのびた。こつしてイオニア諸島におけるトッコ家の支配は消滅し、この地方ではただイワン・チエルノジェヴィツツのみが岩山のモンテネグロ（ツルナゴラ）に拠つて独立を保持するにすぎなくなつた。

西ヨーロッパはヴェネツィアのトルコとの和平をどう受けとつたであらうか。それは教皇の態度に端的に表明されている。十六年もの対トルコ戦争を、キリスト教国の側から援助らしい援助もほとんどうけずに独力で生死をかけて

聞いぬき、いま刀折れ矢尽きてスルタンと講和したヴェネツィアにたいして、教皇シクストゥス四世も、さいしよのうちこそ批難を浴びせたものの、ヴェネツィアが長いこと苦境にたたされて止むえず「苛酷な、罰当りの条件」をのんだことを最後には了解しなければならなかった。

ハンガリア王マティアス・コルヴィヌスは一四七九年の和平を耳にして激怒したが、それも、こんど矢面てに立つのが自分であることを感じたからにほかならない。予感はずな中とした。

この年の八月二四日ワラスディン近郊のネデルヤンズで折からひらかれていた歳市が、ボスニアから侵入したトルコ輕騎兵隊によって急襲された。トルコ軍はつづいてベッタウの下手でドゥラウ河をわたりルッテンベルクにむかい、ラープ河にまで到達してから南にひきかえした。つづいてジーペンブルゲンへの大規模な侵入がおこった。すなわち、一二人ものトルコ人ベグがこれに参加したのであって、かれらはセメンドリアに集合した後、オルソツヴァでドナウを渡り、鉄門峠をこえてジーペンブルゲンに入った。その金銀鉱および岩塩鉱がめざす目標であった。あまりの急襲にジーペンブルゲンの領主ステファン・バトリがヘルマンシュタットで軍隊をあつめたとき、トルコ輕騎兵はすでに無数の掠奪物と捕虜を伴ってひきかえす途次にあった。一〇月一三日、マロス河のプロートフェルト平原で両軍が会戦した。ステファン・バトリのハンガリア軍は縮くずれになりかけたが、まちこがれていたテメシエヴァールのバン、パウル・キニズシイの到来によって勢いを盛りかえし、トルコ軍に殲滅にちかい打撃を与えた。ハンガリア軍はオーフェンに凱旋した。マティアスはうばったトルコ軍軍旗をキリスト教国家の諸君主にくばった。そしてふたたびフリードリッヒ三世との争いをはじめた。

一四七九年には南のエーゲ海でもトルコ軍の出撃があった。ヴェネツィアとの和平で手すきになったメヘメットが、その海軍力をつぎこんでロードス攻撃に出てくるであろうことを、当のヨハネス騎士団はこの和平の報を耳にしたときから予期していた。時の騎士団長ピエル・ドオクビュッソンは城塞の強化につとめるとともに、すべての麾下プリオリにあてて、騎士たちを鼓舞する書面をおくった。果してこの年の夏、カラマン地方の総督であったメヘメットの息子のヂェム・スルタンの使節が到来し、平和条約の締結をよびかけ、その前提として年金をおさめるべきことを示してきた。騎士団長は時をかせぐために、ヴァティカンおよびキリスト教諸国家の意向を打診してから、と称して三ヶ月の猶余期間を申し出た。使節は再度渡来したが、この時も騎士団長は話し合いに乗らなかった。もっとも休戦のとりきめの方は成立して、相互的な交易の自由が確認された。この交渉によってスルタンがねらっているのが、いまおこなっているロードス攻撃準備の偽装であることは、ヨハネス騎士団にとってははっきり解っていた。ピエル・ドオクビュッソンはいそいでマムルークのスルタンと和平条約を締結し（一〇・二八）、チュニジアの支配者とも、必要な穀物の輸入についてとりきめを交すとともに、自ら最高指揮権者となって騎士団の指導者たちの分担部署をきめ、城壁工事を開始した。いまにのこる約四キロメートルのロードス市をめぐる城壁はこうして着工された。これを見てメヘメットは、陸軍をイスタンブール対岸のウシュクダラに集結して小アジア西岸をロードス対岸のマルマリス湾にまで南下させるとともに、ガリポリ、イスタンブールから大小一六〇せきの艦船をメシー・パシヤの指揮下にロードス向けて出港させた（二二・四）。トルコ艦隊はロードス島で北西岸に上陸作戦を試みたが騎士団によっておいはらわれ、近隣のティロス島上陸にも失敗して、マルマリス湾にひきあげた。こうしてともかくも、第一回のロードス

攻撃はおわった。しかしピエル・ドオウビュッソンはさいしょの試練をくぐったにすぎなかった。

翌一四八〇年五月初旬には、ふたたびトルコ艦隊はダーダネルスを通過し、中旬ロードス海域に現れた。前年度の指揮官メシー・パシャが今回もまたロードス攻撃の最高司令であった。アナトリアで越冬した陸軍はロードスにはこばれ、五月二三日ロードス市の包圍がはじまった。トルコ軍の怒濤の攻撃は六月から七月にかけてロードス城壁にぶつかってはくだけ散った。こうして七月二八日がやってきた。この日、夜明けの太陽がのぼるとともに臼砲から巨石が発射され、それを合図にトルコ側は総攻撃にうつった。イエニ・チエリは城壁の裂け目がけて突入し、ロードス騎士団側の防禦をはじめとばした。奪取した城壁に金銀のふちどりをしたトルコ提督旗がうちたてられたのを見て、すでにロードス攻略が成功したものと思ひこんだメシー・パシャは、城壁の上で伝達係に、ロードスの財宝はスルタンのものだから掠奪してはならない旨イエニ・チエリにむかって叫ばせた。攻撃側はこれを聞くとたちまち士気を沮喪し、戦線の状況ががらりとかわった。騎士団は騎士団長以下、救世主キリストの像をえがいた騎士団旗を中心に退却するトルコ軍においすがって肉弾戦を演じた。無数のトルコ兵の屍が濠と塁壁を被いつくした。メシー・パシャはロードス攻略をもちや望みなしとみて、陣地をたたみ、手かけた攻城工事に放火して残存トルコ兵を対岸のマルマリス湾までひき上げた。こうして第二回のロードス攻略も失敗に帰した。

ロードス総攻撃の同じ七月二八日、トルコ艦艇はアドリア海でも上陸作戦にでた。ここでは、当時ナポリのアラゴン家に属していた南イタリアのオトラントがねらわれた。この年の初夏、ゲディック・アーメッド・パシャはメヘメットからの指令で、一四〇の艦船を指揮してヴァロナを出航し、オトラント海峡を横切って六五キロ距った対岸のア

ブリアに上陸作戦をおこなったのである。六〇せきのヴェネツィア警備艦艇は、コルフ沖を遊弋していたが、すでにヴェネツィア・トルコ条約が発効していたので通過を阻止する挙にでなかった。ヴェネツィア艦艇はトルコ大艦隊を数マイルおくれて尾行し、アブリア上陸が目的であることをたしかめると、上陸をみとけもせず、コルフにひきかえした、という。上陸地点はオトラント市の北方で、上陸はなんらの抵抗もうけずに完了した。上陸軍は六月上旬、陸路バルカンをヴァロナに集結した軍隊で、数千頭の馬匹のほか、多数の発射器と火薬備品をともなっていた。ここから丈でも、トルコ側が通り一べんの掠奪行でなく、本来、広大な征服計画をもち、イタリアに定着する目的でこの上陸作戦を敢行したことが判明する。それにゲディック・アーメット・パシヤはスルタンから、占領地を封土として与えられる約束をされていた、とまで伝っている。こうしてはじまった上陸作戦で、すでに八月一日にはオトラント市が陥落し、つづいてプリンディシ、レッツェ、タレントゥム、と、北方および西方に攻撃のほこ先きがむけられた。該当者のフェランテが衝撃からたちなおって、ナポリをたち、トルコ軍をむかえうつため南下したのは、ようやく九月八日のことであった。

当時イタリアでは、すでにのべたように、一四七四年以来の、ヴェネツィア・フィレンツェ・ミラノ陣営と教皇・ナポリ陣営とが対立し、政情は二分していた。だから、当時の人々が、トルコ軍のアブリア上陸を、フェランテに死の一撃を加えるためヴェニスが仕組んだ大陰謀ではないかとあやしんだのも無理もない。他方メヘメット側についても、メヘメットがこのようなイタリアの政情二分を手にとるように知っていて、フェランテ領アブリアに上陸するに先立ち、敵対者のヴェネツィア、フィレンツェに上陸を予告していたのではないかと推測させるいくつかの根拠もある。

がともかくも、これら両イタリア都市とスルタンとの関係はきわめて友好的だった。コルフのヴェネツィア警備艦艇がトルコ艦隊にたいしてとった態度はすでにふれたけれども、ヴェネツィアとよりをもどしたばかりのスルタンは、ながらも懐きつづけてきた対ヴェネツィア悪感情を一時たなあげた。その宮廷ではチェンティレ・ペルリニその他のヴェネツィア人がスルタンの寵をほしのままにしていた。フィレンツェについても、メヘメットは一四七八年四月二六日ジュリアノ・デイ・メデイチを殺害してイスタンブルに逃亡したベルナルド・バンディニ・デバロンチェルリを翌年逮捕し、ひきとりのためイスタンブルにやってきたアントニオ・デイ・メデイチに殺人者をひき渡すほどの好意の示しぶりだった。アントニオはイスタンブルからヴェネツィアを経て一二月二四日フィレンツェに帰還した。その数日後ベルナルド・バンディニは最高裁判官の邸バルジェルロの窓からつるし首の刑に処された。この光景は当時それを目撃したレオナルド・ダ・ヴィンチのペン画の写生におさめられているが、ともかくもこうしてスルタンの好意でメデイチ家の復讐が成った。もっともこの絞首刑にメデイ家の当主ロレンツォ・イル・マニフィコは立会わなかった。かれはナポリにおもむいてフェランテと和平の交渉中だったのである。この和平交渉は一四八〇年三月一三日に調印されたが、それにもかかわらずフィレンツェは苦境におかれた。六月末フェランテの息子であるアルフォンゾがカラブリアから北上してシエナに入城し、八月六日には教皇の軍隊がフォルリ城下にまで到着したのである。こうして、ロレンツォが教皇・ナポリ戦線によって包囲されつづあるときおこったのがトルコ軍のカラブリア上陸であった。その真意はともかく、こうして少くとも結果的にメヘメットはロレンツォの救済者となった。

九月八日アブリアにむかったフェランテは同月末トスカナからひきかえしてきたアルフォンゾと合流したが、冬の

到来をまえにして攻撃を翌年春までのばし、オトラント市と対峙して陣を布いた。一方トルコ側はこのオトラント市に守備隊をのこして、大半はヴァロナに撤退した。つづいてゲディック・アーメッド・パシヤはヴァロナからイスタンブールにおもむき、兵力と糧食の増加についてメヘメットに要請した。

いまだトルコ軍のアブリア上陸が伝えられる前の七月二七日および八月五日、教皇シクストゥス四世はイタリアの全都市に対トルコ防衛戦争をよびかけていたが、いまや、翌年の春スルタン自らが大軍をひきいてアブリアに出馬するという噂が巷間に流布するなかを、一層声を大にしてこのよびかけをくりかえした。こうして一月初頭ローマではヴェネツィアをのぞく全イタリア会議がもよおされ、席上、教皇はフィレンツェと和解して、自ら全イタリアの一致協力の先例を示した。会議ではふたたび十字軍の実施細目が練られた。シクストゥス四世はイタリアのみならず、ひろく西ヨーロッパの全キリスト教君主に対トルコ共同戦線をよびかけた。おそらくこのような、キリスト教側での、予期しなかったほどの大規模な反応ぶりを考慮に入れてのことであろう、オトラントを橋頭堡として全イタリアを征服するというトルコ側の本来の意図は消え失せた。一四八一年九月一〇日をもって、アブリアにおけるトルコ軍の最後の抵抗は止んだ。

一四八〇年にも、トルコ軍のクライン、ケルンテン、シュタイエルマルクへの遊撃作戦が恒例のように繰返された。交戦中のフリードリッヒ三世の軍隊とマティアス・コルヴィヌスの軍隊とは、一時的にはこをおさめて共同して侵入者にあたったが、たくみに肩をかわされた。ヴェネツィアに平和条約を遵守させるためのフリアウルへのトルコ軍の索制的侵入もこの年には欠けていなかった。

一四八〇年にはスルタンは小アジア南東にもトルコ軍を派遣した。事のおこりはこうであった。スル・カドゥリエ朝は僻地のエルビスタンおよびメラシュにあって従来スルタンのめこぼしになっておるとともに、他方これと種々の姻戚関係をむすんでいたが、当主のスレイマン・ベグがこの世を去ったあと継承問題をめぐって遺児たちの間に争いがおこったのであった。以上が事のおこりであるけれども、その結果早速近隣の二大強国、オスマン・トルコとマムルークがこの事件に介入することになったのであった。一四八〇年小アジアに派遣されたトルコ軍は、マムルーク朝のスルタン、カイト・バイの候補者をカイロに駆逐し、かわってメヘメットの推す候補者を位に即けたのである。こうして、イスタンブールとカイロとの関係が悪化する端緒がひらけたのであった。

一四七八年、アルバニア戦線に出馬したのを最後にメヘメットは、健康状態がすぐれずセラユにひきこもっていた。ほとんどたえまない遠征がメヘメットの心身に、過度の緊張を強いたうえ、あらゆる面で人生の愉業者であったメヘメットは、大の美食家でもあり、中年とともに肥満がつのっていった。こうして、悪条件が出そろい、骨腫はみにくいほどに大きくなった。それにもかかわらず、一四八一年の春ルメリとアナトリアで大動員をおこなったのち、四月二五日、メヘメットは出馬した。スルタンはイスタンブールをあとにウシユクダラに渡り、マルマラ海岸をゲブゼまですすんだ。しかしここでとうとう激痛をうったえて発病した。今回はいままでの痛風だけでなく病状は深刻で、容態は激変した。そして発病後二日目の五月三日、スルタンは「過去の世界をはなれて未来の世界へ」うつったのである。メヘメットの遠征がエジプトのマムルーク朝をめざしていたのか、それともロードスのヨハネス騎士団をめざしていたのか。嚴重に秘匿された目標は、メヘメットの死とともに永遠のなぞとなった。

五月末のローマですでにメヘメットの死の噂がとんでいたが、このおなじ頃ヴェネツィアのシニョリアはイスタンブールからの確報を入手し、ヴァティカンに伝えた。ローマのよろこびはおさえようもなく、祝砲はとどろき、あらゆる教会の鐘は打ちならされた。「大鷲は地に墜ちた」(La grande aquila è morta)。こう叫んで一四八一年五月一九日ヴェネツィアの密使はシニョリアにメヘメットの死を報じたが、事実これをもってオスマン・トルコ帝国の征服史の第一期の幕は閉じた。メヘメットの子でスルタンの座にのぼったバエジット二世(一四八一—一五二二)は父とあらゆる点で対照的な性格の持主で、猜疑心がつよく、険難性で、大規模な作戦など敢行する人物ではなかった。他方同時にキリスト教側でも、トルコ軍のアブリア上陸を棧として漸く燃えあがるかにみえた十字軍熱もふたたびさめきってしまった。

しかし一五世紀さいごの二〇年間の東地中海の政情を仔細に検討すれば、一四八一年をもって危機が去ったわけではなかった。

ヴェネツィアはリュージニア家のジャック二世が死ぬと(一四七二)、その妃であるヴェネツィア貴族コルナロ家の娘カタリナの名の下にキプロスの実質的な支配権を握り、一四八九年にはこの「イエルサレム・キプロス・アルメニア女王」カタリナ妃をヴェネツィアに鄭重にむかえ入れることによって、名実ともにキプロスの領有者となった。早くからキプロスの経済開発(なかならず砂糖キビ・プランテーション)に関与するとともに、そこを仲継地としてアレクサンドレイア、ベイロートとレヴァント貿易を営んできたヴェネツィアは、いまや同島を自国植民地としてしっかりと自らの支配下につなぎとめることに成功した。このように東地中海の最東部でヴェネツィアの栄光は輝きを

加えたけれども、対トルコ関係においては、平和条約にもかかわらず戦争の導火線は随処にころがっていた。トルコ海賊はカボディストリアまで進出したし、カタロ周辺でトルコ人は策動をやめなかった。他方ヴェネツィアに備われたアルバニア人国境守備隊はトルコ領を常習的に荒しまわっていた。たしかに、事実、この様な出来ごとに当時人々は次第に慣れ事になっていったけれども、その間にあって、それをとりまく客観情勢は次第に転位しはじめていた。ヴェネツィアの敵対者、ことにミラノの宣伝活動は活発さを加え、バエジット二世はフランスとヴェネツィアのむすびつきを聞くにおよんで両国間の十字軍戦線をおそれはじめた。こうしたさなかでおこったのが一四九九年のトルコ・ヴェネツィア間の一不詳事件であった。この年トルコの一せきの船舶がヴェネツィア艦隊に慣例の挨拶をおくらず後者によって沈められたのである。これが原因でついに同年八月一二日、両国艦隊がメトリーニ沖のサビエンツァ島海域で相見えることになった。第二回のトルコ・ヴェネツィア戦争はこうして開始された。ヴェネツィアではこの年の初年、大銀行バンコ・ガルトツォニの破産があり、財政の窮乏から艦隊を良好な状態におくこともなおざりにされていた。他方オスマン・トルコ帝国はこの一五・六世紀の境の頃から、その性格を、従来の内陸帝国から海洋帝国へと転じつつあった。その結果がガリポリの戦い（一四一六―前述）以来最大の海戦といわれるこのサビエンツァの海戦でのトルコ艦隊の勝利であった。

このトルコ帝国の性格転換については、カハネ夫婦とティーツェの共著になるイタリアおよびギリシア起原のトルコ海軍用語の研究の冒頭で概観されている。<sup>(26)</sup>

(19) F. Babinger, *Le vicende veneziane nella lotta contro i Turchi durante il secolo XV*. (1956) in *Aufsätze und*

Abhandlungen zur Geschichte Südeuropas und der Levante. I. München, Südosteuropa-Verlagsgesellschaft m. b. H. 1962. S. 240—253. 但しこの碩学に『弘法の誤り』を指摘できる。フランチェスコ・フォスカリのドージェ就任の年が一四五三年とあるのは一四二三年に(S. 245)「死亡の年月日一四五七年一月二日は、同年十一月一日に改められなければならない(S. 251)」。また一四三一年のキオス島攻撃者アンドレア・ロレタンは、アンドレア・マチェニコと改められなければならない(S. 243)。「もしもまた一四七八年夏に陥落したのはスタタリでなく、クルヤと改められなければならない(S. 252)」。

(17) F. Babinger, *Mehmed der Eroberer und seine Zeit. Weltenstürmer einer Zeitenwende*. München, F. Bruckman. 2. Aufl. XII, 592 S. (1. Aufl. 1954). Éd. française, Paris Payot 1954. Ed. italiana, Torino Giulio Einaudi 1957.

(21) F. Babinger, *Aufsätze und Abhandlungen zur Geschichte Südosteuropas und der Levante*. Bd. I. München, Südosteuropa-Verlagsgesellschaft m. b. H. 1962. VIII, 437 S. なお、論文集第二巻が近く刊行を予定されている。因みに本稿に関係ある収録論文はつぎのとおりである。

小アジアおよびバルカンの歴史的的理解に就いてイスラム研究のもし意義と問題点を論じた *Der Islam in Kleinasien* (1922) — *Quelques problèmes détudes islamiques dans le sud-est européen* (1937). — *Byzantinisch-osmanische Grenzstudien* (1929). これはメルトンソンの第二代のビザンツ学泰斗ハイゼンベルク記念論文集に寄せられたもので、イスラム学における「ルコ学の地位」と、古典古代学におけるビザンツ学のそれがきわめて類似していること、中世末期の小アジア、バルカンの歴史はビザンツ学者とトルコ学者との共同作業の分野であること、を指摘したものである。

一連の政治史研究。すなわち「*Von Amurath zu Amurath* (1950)。「ムラトからムラトへ」と題されたこの論文は、「ヴァルナの戦い」(一四四四)を中心としてその前後におこった一連の重要な事件、すなわち、ハンガリア王ウラディ斯拉ヴ三世の「ムラド二世との和約」(一四四四年七月末日—八月一日)とその破棄(同年八月四日)と戦争(同年十一月)とムラド二世の引

退(同年一・二月)と復歸(一四四六年八月)を扱う。——一四六六年アルバニア戦争の最中、中部アルバニア山中にメ  
 ーメットがなした *Die Gründung von Elbasan* (1931)——*La date de la prise de Trébizonde par les Turcs* (1461)  
 (1950)——*Le vicende veneziane nella lotta contro i Turchi durante il secolo XV.* (1956) (上巻)——*Batuzge zur Ge-  
 schichte von Qarqy-Eli vornehmlich aus osmanischen Quellen* (1933) 当世 Carlo はの各に因るでオスマン・トルコ人の間  
 で「カルリの土地」と称されたところの、ケファロニア・ザントのデスホテリス・トッコ家の支配にかんするトルコ側史料で  
 の言及にふれた論文。

一五世紀、西ヨーロッパのキリスト教君主の宮廷に寄遇させてもらって、スルトタンの座をうかがって、一連の「自稱  
 なじし真のトルコ王子たぢを扱った」*Bayezid Osman* (*Calixtus Ottomanus*). ein *Vorkläufer und Gegenspieler Dschem-  
 Sulmans* (1951).——*Zur Lebensgeschichte des Calixtus Ottomanus* (1953).——*Diwân-Celebi, ein osmanischer Thronwerber  
 des 16. Jahrhunderts.* (1957)

メーメット二世とその身辺にかんする一連の研究。すなわち、メーメット二世の母の素性がセルビア王女でもなければ、フ  
 ランス王女でもなく、奴隷女だったことを立証した *Mehmeds II. des Eroberers Mutter.* (1953)——*Mehmeds II. des  
 Eroberers, Geburtstag* (1949)——クワトロネチェント・イタリヤの出身の「メーメット二世の側近者たぢを扱った *Mehmed,  
 der Eroberer, und Italien* (1951)——聖母マリアにたぢするメーメットの迷信的尊崇を扱った *Sultan Mehmed II und ein  
 heiliger Rook* (1958)——父ムラド二世の命令で、エルビスタンのトルクメン朝のスレイマン・パグの娘シット・ハトタン  
 をむかえたが、この美しいけれども好みにあわない后との不幸におわったメーメットの結婚を扱ったところの「*Mehmeds II.  
 Herrat mit Sitt-Chalun* (1449) (1949)」。——セルビア王ケオルク・プランコヴィッチの娘ムラド二世の后となり、その政  
 治的識見に定評あるところから、引退後も、義理の子メーメット二世からしばしば意見を徴されたマラの、その引退先きの修

- 道尼路の居所にかんする *Witwensitz und Sterbeplatz der Sultannin Mara* (1953). —— キリスト教にかんする書目も編纂して見た  
のパンノニア、チッサロニケの聖ノンニヤ修道院を所有財産として与えられたメクメント二世の特許状を扱った *Ein Freiherz  
Mehmeds II., des Eroberers, für das Kloster Hagia Sophia zu Solonika Eigentum der Sultann Mara*. (1459) (1951)
- その他、在ロンスタンチヤーンブルのマルメニア教会総主教にたがせられたメクメント二世の方針を扱った *Ein Besitzstreit um  
Sulu Manaster unter Mehmed II* (1473) (1956) —— ヴェヒニヤット二世の西ヨーロッパ政治勢力との外交交渉の一環を扱った  
た *Zwei diplomatische Zwischenspiele im deutsch-osmanischen Staatsverkehr unter Bajazid II* (1497 und 1504). (1954)
- 一四九一・二二年、ビシトコロトス家出奔のシメリ総督、ムラト・ビシヤを殺した安部宗房にんがせる *Erne Verfügung des  
Palatologen Châss Murrâd-Paşa*. (1952) —— キルヴァン・ムニル中東遊の記述を扱った *Beiträge zur Geschichte des Gesch-  
lechtes der Malgoc-Oghluis*. (1940)
- (91) 久米邦武 F. Taeschner, *Göhanımâ Die aliosmanische Chronik des Menââ Mehmed Neschri*. Bd. I. 1951, II.  
1955 Leipzig (精興社訳)。 *Vom Hertenzelt zur Höhen Pforte*. Frühzeit und Aufstieg des Osmanenreiches nach der  
Chronik. Denkwürdigkeiten und Zeitlängfte des Hauses 'Osman' vom Derwisch Ahmed, genannt 'Aşik-Paşa-Sohn  
[Osmanische Geschichtsschreiber 3] Übersetzt, eingeleitet und erklärt von Richard F. Kreutel Graz-Wien-Köln  
Verlag Styria 1959. 334 S
- (92) Gy. Moravcsik. *Byzantinoturcica*. Die byzantinischen Quellen der Geschichte der Türkvolker I, II. 2. durch-  
gearbete Aufl. Berlin Akademik-Verlage, 1938 XXVIII, 609, XXV, 376 S.
- (93) B. Krekić. *Dubrovnik (Ragusæ) et le Levant au moyen âge*. [Documents et Recherches sur l'économie des pays  
byzantins, islamiques et slaves et leurs relations commerciales au moyens âge V] Paris, Mouton La Haye, 1961.

440 p. この文書レナストウルに含まれているのは、(一)二七七・八年にはじまった文書の組織的保存以来、中世全期を通じて一九世紀初頭のフランス占領にいたる最古の部分、フランス占領時代の部分、一九・二〇世紀の部分、の三部から成るラグーサ都市文書、のうちの最初の部分の一部(すなわち)一一九九年一月二八日より一四六〇年一月二日(ごよみ)まで、合計一四四二点の文書である。収録文書中の七五ノーマントをこめて一〇七七点が今回はじめての刊行である。

(22) Joseph Gill, *The Council of Florence* Cambridge at the University Press, 1959, XVIII, 452 p.

(23) F. Babinger, F. Dölger, *Mehmed's II. frühester Staatsvertrag* (1446) *Orientalia Christiana Periodica* XV (1949) S. 225—238. aufgenommen in Franz Dölger, *Byzantinische Diplomatik*. Buch-Kunst Verlag Ettal, 1956, S. 262—291

(24) *Die letzten Tage von Konstantinopel*. Der auf den Fall Konstantinopels 1453 bezügliche Teil des dem Georgios Sphrantzes zugeschriebenen „Chronikon Manus“ [Byzantinische Geschichtsschreiber. 1], Übersetzt, eingeleitet und erklärt von E. von Ivánka. Graz-Wien-Köln. Verlag Styria 1954 101 S.

(25) *Ἡ πύξη τῆς The Fall of Constantinople*. A Symposium held at the School of Oriental and African Studies 29 May 1953. London, School of Oriental and African Studies. University of London 1955. 44 p. Cf. B. Z. 48 (1955) 477.—D. A. Zakynthos, *Ἡ ἀλωεὶς Κωνσταντινουπόλεως καὶ ἡ τοῦρκοκρατία*. Athen 1954. 143 S. Cf. B. Z. 48 (1955) 236—7.—Byzantinoslavica 14 (1953).—Vizantijskij Vremennik VII (1953).—Le cinq-centième anniversaire de la prise de Constantinople [=L'Hellénisme Contemporain IIe série, 7<sup>e</sup> année. Fasc. hors série. Athen].—E. von Ivánka, *Der Fall Konstantinopels und das byzantinische Geschichtsbild*. Jahrbuch Österr. Byz. Ges. 3 (1954) S. 19—34.

(26) H. & R. Kahane, A. Tietze, *The lingua franca in the Levant. Turkish Nautical Terms of Italian and Greek*

*Orghn. Urbana. University of Illinois Press. 1958. XIII. 752 p. など、トルコ海軍の前身をなしたトルコ海賊については、たゞそれらの諸書を参照。Le Destin d'Umur Pascha (Distinctionné-i Enveri). Text, Traduction et Notes par Irène Melikoff-Sayar. (Bibliothèque Byzantine. Documents. 2) Paris, P. U. F., 1954. 155 p. — P. Lemerle, L'émirat d'Aydn. Byzance et l'Occident. Recherches sur "La Geste d'Umur Pascha." P. U. F., 1957. 276 p.*

### 三

以上その大筋を跡づけてきたように「五世紀の東地中海の国際政局が推移するにともなうて、経済はどのようにそのあり方をかえ、社会はどのような問題をかかえこむことになったであろうか。

ビレンヌの筆法をもってするならば、まず最初に問われなければならないのは、トルコ勢力の東地中海への進出のもとで、レヴァント貿易がたどった運命いかん、という問題であろう。そのさい国際政治関係のうごきを敏感に反映して、目盛計の針のように微妙にゆれうごくのが、ヴェネツィアのレヴァント貿易船団 *muda* の活動であり、ティリエの前掲書および、かれが元老院文書を基礎に一四・五世紀の幾つかの時期について作成した同船団の貿易額の統計表は、この間の事情をつたえて余すところがない。

*muda* とは、もと「変化」といみするヴェネツィア方言で、ついで、「風当りを減ずるために捲きあげた帆」、「強風のさい帆を捲きあげるための綱」の名称となり、さいごに、「航海の季節」、その「航海」そのものを、そしてこれに従事する「商船団」を指すにいたった。ムダと名付けられた商船団については、ヴェネツィア経済史の専門家ルツアットの研究にくわしく、またこれへの投資を通じてヴェネツィア貴族がその富を蓄積した事情についても同人の研究があるが、ムダとは、ヴェネツィア当局

が毎年建設し鱗装する一〇〜一五せきのガレー商船で、弩の射手が同船して船団を護衛し、おなじくヴェネツィア当局が、航海数、参加ガレー船の数、護衛隊の定員、航路、をきめ、船荷や運送料料についてまで種々の規定を設けた。ただしこの国家商船隊の運営は請負 *mercanti* によつたのであつて、国家と契約をむすぶうる入札者 *appaltatori* は、ヴェネツィア貴族に限られ、かれらは入札で国家におさめた金額を、国家がかれらに留保している入金運送費の半額および自らの貿易活動をもつて回収した。以上がムダの概要であるが、入札額は、見込まれる利益の大きさ、つまり、レヴァント貿易のその年々の市況のいかん、によつて左右された。入札額がきわめて高額にのぼり、参加ガレー船の数が一〇せき以上を数えることもあれば、反対に入札額の総計も僅かで、年によつては船団が組めないほどのときもあつた。

レヴァント貿易に従事するムダには、大きくわけて、コンスタンティノールを経、黒海の奥のタナないストラベズントにおわるローマーニアのムダと、東地中海むけのムダとがあつたが、両ムダの年々の入札額の対比は、ヴェネツィアのレヴァント貿易の変動を、それ以上のぞめないような鮮明さでしるしづける。

たとえば、一三三二〜四五年をとつてみると、一三四〇・四一年まで圧倒的優勢を続けたローマーニア向けムダは、その年以降、クリミア汗ウスベクの野望、および、若年のビザンツ皇帝ヨハネス五世の登極、で不安定化したこの方面の政情を反映して不振となり、一三三三年いごキプロス向けムダにより、その優勢がとつてかわられる。そのうえ東地中海向けには、教皇によるエジプトとの通商禁止（一三二二〜四四）が解かれた結果として、一三四五年に再開されたアレクサンドリア向けムダが加わる。このムダはその後急速に伸びて一三六四・五年にはキプロス向けムダを凌駕する。一三七三年のジェノヴァ人によるファマグスタ占領の結果、アレクサンドリア向けのムダのこの優越性はいよいよ決定的なものとなるであらう。なおこの年、ヴェネツィアはシリア貿易の重要性にかんがみ、その時までファマグスタを仲継港としておこなつていたこの地方との貿易を、ベイルートとの直接取引に切りかえようと試み、ここにベイルート向けムダが一三七三・四年に創設される。

つぎに一四〇〇〜一二年をとってみよう。なによりもまず眼に映するのは、アレクサンドレイア向けムダの優勢の継続であり、これに反して、ローマニア向けムダは、もはや一四世紀前半のあの繁栄を再びとりもどすことができない。これにくらべてペイルト向けのムダはいささか安定性をもつが、それでもファマグスタのジェノヴァ人に攪乱されて、ローマニア向けムダと同様あまり伸びない。ただアンカラの戦いでオスマン・トルコ側からの脅威が一時去った結果として、一四〇五年いごにはペイルト向けムダが、一四〇六年いごにはローマニア向けムダが、息をふきかえす。

さいごに、一四四三〜五六年をとってみよう。いぜん優位を占めるのがアレクサンドレイア向けムダであるが、ペイルト向けのムダもその重要さを増す。そのうえ、ヴェネツィア人（なかでもコルナロ家）の経済活動（なかでも砂糖キビ栽培プランテーション）がさかんであり、ジェノヴァ人による攪乱も小止みになったキプロスと、このシリア向け交易がいまやリンクされるにいたる。一方一五世紀のはじめ以来ふたたび上昇をたどりはじめたローマニア向けムダについていえば、この方面へのガレー船団は、ことに一四三〇年のムラド二世との和平条約の結果、伸長するが、ここでは一四五三年のメヘメット二世によるコンスタンティノープル占領が、ヴェネツィアのローマニア向けムダに最終的に終止符を打つ。その年いごもはやヴェネツィア当局はこの方面にむけた商船団を組織しなくなる。

以上三時期の対比が示すように、ヴェネツィア・ガレー商船隊の活躍の舞台は百年ほどの間に大きく転位し、その重点は、一三三〇〜五〇年頃にはコンスタンティノープルと黒海沿岸の諸都市であったものが、一四四〇〜六〇年には東地中海沿岸の近東の貿易港にうつったのであった。このようなヴェネツィアのレヴァント貿易の変化は、なによりもまず直接には、東地中海へのオスマン・トルコ勢力の進出によってひきおこされたものであり、その結果ヴェネツィアは、近東のこの東地中海南岸地方をおさえるマムルークと密接な関係に入らざるを得なくなるのであるが、さらにその背後によこたわる広般な一般情勢として、南ロシアから中央アジアにわたっていた統一モンゴル勢力が瓦解したという事実を忘れてはならないであらう。とも

かくもこうして、西ヨーロッパは、東方から従来クリミアを経てはこびこまれてきた香辛料から絶たれ、シリア、エジプトの海港にそれをもとめなければならなくなった。

上記の国家艦装のガレー船団ムダによって取引が独占されている香辛料その他の奢侈品以外の貿易品目、たとえば、穀物、木材、塩、ブドウ酒などの重量船荷は、私人の船舶 (*navia disarmata*) がその運送をうけもち、またシリア方面には、棉花をはじめ、砂糖、絹、そして香辛料までも積載する私的船団 *muda dei gothoni* が活躍した。であるから前記の国家艦装のムダのみをもって、ヴェネツィアのレヴァント貿易の全貌を云々することは許されない。バルバリゴ家やカペロ家の記録、そしてなかんずく今回刊行されたところの、ジャコモ・パドエルの一四三六〜四〇年間(20)にわたる会計簿が示すところによれば、海峽の緊迫化にもかかわらず、コンスタンティノープル在住のこれらの個々のヴェネツィア商人によって活潑な取引がローマニア・アルタで展開されていたのである。たとえば、黒海沿岸のカスタムニの銅は、コンスタンティノープルの全角江のほとりに集貨されて、ヴェネツィア、アレクサンドレイア、メッシナにむけて発送される。その他の取引品目は、黒海沿岸およびアドリアノープルの毛皮、トラキアの穀物とブドウ酒、ブルサで購入された胡椒、千し丁字、絹織物、木蠟と蜂蜜、石鹼、材木板と鉄、明礬、等々と枚挙にいとまがない。その他、パドエルの会計簿の示すところによれば、ブルサ、アドリアノープル、ガリポリなどコンスタンティノープル近郊へは冬季に、遠方のシミッソ、トラベズントへは春季に、そしてさらに遠方のカッファ、タナには夏季に商旅がおこなわれた。またカペロ家やパドエルの記録には、ヴェネツィア領ローマニアの多数のギリシア人およびヴェネツィア人商人、相当数のユダヤ人商人、それほどではないがトルコ人商人、そして、アルメニア人商人までの多彩な国籍の商人が姿をあらわす。

しかしながら、香辛料にせよ、その他の、嗜好・奢侈品以外の貿易品目にせよ、ヴェネツィア貿易をもつぱら仲継貿易のみからなるものと考えすることは正しくない。なぜならば、たしかに東地中海に飛石のようにはばまかれたヴェネツィア植民地は、

香辛料以下の貿易品目を本国に輸送するための仲継基地の役割りを果たしたけれども、植民地のなかには、経済的開発が実をむすんだ結果、ヴェネツィア本国の、一四世紀中には八万にもたつした人口を支える原料や糧食の供給地として一翼をになつたものもあつたからである。(なおヴェネツィアの支配下にはなかつた同時代のバルカンの経済開発については、ここを舞台として活躍したドゥブローニークの市文書が貴重な資料を含み、同文書を編纂したクレキッツが前掲書でこの点についてふれてゐる)

因みにヴェネツィア領ローマーニアの地勢一般を概観した場合、それは恵まれたものといえなかつた。天然資源は貧困であり、地形は山嶽によって分断されて、いくつもの小平野(もつともそのなかには、河谷の肥沃な土地もあつた)から成り立つてゐた。地質は石炭岩質で脆弱であり、地震が多くて、ことにそれが海中で発生した場合には、津浪がおしよせて海岸地方をさらつてしまうこともまれでなかつた。気候は地中海特有の乾燥地帯に属し、乾燥期は四・五ヶ月から、時によつて七・八ヶ月におよぶこともまれでなかつた。しかしながら、このような、自然的には必ずしも恵まれないヴェネツィア領ローマーニアも、もし一たん管理よろしきを得れば、つまり、灌漑設備がととのえられ、栽培植物の保護育成がはかられ、放牧がなされ、木材伐採が統制されるならば、そして労働力が潤沢ならば、豊かな生産を約束してゐた。事実一三世紀末にいたれば、クレタ、ネグロポントなどの主要植民地の産業は確立し、一四世紀には、穀物、ブドウ酒、乾ブドウ、木蠟、木材、チーズ、絹が生産され、とくにクレタでは、砂糖キビ、棉花など、新しい植物栽培までが試みられた。そして一五世紀に入ればヴェネツィア本国にたいするこれら植民地の糧食供給の役割は急速に増大するのであつた。そのうえこの一五世紀の東地中海では、すでにヴェネツィア人が大々的に砂糖キビのプランテーションを推しすすめていたキプロスがヴェネツィア領として加わることになつたのである。

しかしかかる植民地産業の確立のためにはその政治的社会的な前提がシニョリアによつて植民地にまずつくり出されなければ

ならなかった。こうして、ヴェネツィア本国にかたどった統治組織 *Regimen* が植民地に導入され、とくにクレタでは *Ferri* *Dattini* を中核とする軍事植民体制が布かれて秩序維持にあたることになったのである(前述)。その結果ヴェネツィアは、社会的に、ビザンツ帝国支配時代から受け継いだところの、クレタ在地のギリシア人豪族を頂点とし、農奴によって支えられる「封建的秩序」と、他の自国植民地ではみられないような対処の措置をとらなければならなかった。宗教的に、ギリシア正教徒であるヴェネツィア領ローマーニアの住民と対処しなければならない問題もおこった。

ヴェネツィアが自国の東地中海植民地の開発にはらった関心にはなみなみならぬものがあつた。

すでにのべたような乾燥地帯の植民地を掌握するために、ヴェネツィアは水利に着目したのであり、その結果、クレタのメッサラ平野やカンディア西郊の地区、ネグロポントのカルキス周辺地帯、などでは、水利規制をおこなえるような地点に城塞建設地がもとめられた。

植民地では、開発がすすむにつれて労働力が稀薄化し、奴隷労働への依存度は急速に高まることとなつた。ことに一四世紀中葉の黒死病はそれを促進させた。こうして、クリミア、ブルガリアなどから大量の奴隷がヴェネツィア植民地に輸入されることになった。この問題については、ヴェルランダンが名著の中世奴隷制史の第二巻で近く正面きつてとり上げるであろうが、そのかれはこの問題の考察にすでにいくつかの個別研究をささげている。<sup>(30)</sup>

その他ヴェネツィアの植民地経済開発の努力として、すでにのべたような砂糖キビ、棉花などの新種植物栽培の導入の試みが、また本国への糧食確保のための植民地における穀物取引の国家独占などが注目されなければならないであろう。

ヴェネツィア植民地がかかえていたこの「支配の社会学」のおなじ問題は、ジェノヴァ植民地のキオス、リュエーシニアン朝廷下のキプロス、さらには、またたく間にオスマン・トルコ帝国がその支配下におさめるにいたつたバルカン、の等しく分有するところであつた。これらの地域に臨んだ支配者のいずれもがそこに見出したのは、ビザンツ帝国からひきついでところの、

ないしその影響のもとに進行中だったところの、「封建化」への傾斜をますますふかめていた社会であり、かれらはそれぞれ独自の方式でそれを自らの支配体制に編入しようとした。

キオス島については、前にのべた同島出身の歴史家アルゲンティが、一三四六年ジェノヴァ人征服者ヴィニョソと契約をむすび、ジェノヴァ人支配をうけ入れたキオスのギリシア人御五家アルゲスト、アルゲンティ、コレッシ、ダマラ、ズエヴを研究の中心にすえながら、ビザンツ貴族とは何ぞや、の一般問題にまでおよぶところの考察をおこない、また、島の支配者である乳香プランテーション・商會社と、これらキオス貴族との抱合を基礎に展開してゆく同島のジェノヴァ支配下の歴史、ギリシア正教とローマ公教との関係、についても詳細にたちよつてゐる (cf. BZ 49 (1956) 123—125)。

リュシニアン家支配下のキプロスについても、今回ジャン・リシャルによりヴァティカン所蔵の手書本の一冊 *Instrumenta miscellanea* のなかから、関係文書が公刊されて、この島の一四・五世紀のラテン人および被支配ギリシア人の生活がてらし出されることになった。<sup>(31)</sup> 収録された文書のうち、一三六七年度のリマスール教区の收支計算書は歴史地理学的資料として興味ぶかく、教会十分の一税をおさめる王領 (*regalio*)、聖俗の封建所領主たち (*seigneurs des fés, chevaliers et dames et autres*)、そのいすれにも属さない自由なブドウ園 (*vignes franchises*) などが列挙されている。これら領主の大半は、その名称から推して、すでに一三世紀に西方の故郷をすててキプロスに居を定めた「フランク」貴族の後裔であった。更に興味ぶかいのは、一四三二—五七年にわたる時期にリュシニアン朝の王たちが発し、三キプロス貴族のもとに保存された一二点の文書が照し出すキプロスの貴族所領の実態である。所領農民 (*serfs*) は、(ビザンツ帝国で土地台帳をいみするプラクティカに相当する) *prahico* に登録された *vilains et vilaines* としめられ、これとは區別されて *esclafs et esclaves* が登場する。

オスマン・トルコの陣営についてはどうであらうか。社会経済史的観点から問題となるのは、ティモール・ゼアメット制と

称されるトルコ「封建制」であろう。遊牧民族のつくりあげた軍事国家的性格は、オスマン・トルコ帝国の属州組織においてももともと明確に具現されたのであって、全国はアナドルとルメリに二分され、それぞれに一人の総督ペイレル・ベイがおかれるとともに、つづいてこの二大属州は、軍民両政の権限を兼掌するサンジャク・ベイの管轄地域サンジャクに細分された。メヘメット二世の時代、全国のサンジャクは総計四八で、そのうち二〇がアナドルに、二八がルメリに所在した。この各サンジャク内には更に一連の大小の封地すなわち、ゼアメットとティマールが設定され、この封地を指定されたシバヒは、その代りに自ら騎馬でスルタンにたいし軍事奉仕の義務を果すとともに、そのさい封地の大きさに応じて定められた数の騎士ジュベリを引きつれなければならなかった。シバヒは指定された封地内の農民から貢納の一部ないし全部を自分のために徴集する権利をもったが、この財政上のイムニテートを基軸として、あたかもビザンツ・ブローノイアのパロイコイ同様、封土内の住民ラヤーは、移動の自由を禁ぜられた農奴となった。ティマール・ゼアメット制を通じてオスマン・トルコ帝国は、社会構造上、「封建的」な本質をおびることになったが、このような社会秩序のなかで、スルタンの中央権力は、いかなる地方当局機関を通じていかに機能したか。この点について、ユーゴのトルコ研究者アドゥヴァ・スツェスカが明快な論考を発表している。<sup>(32)</sup>

同論考は、守備隊が駐屯し、同職組合の組織をもち、カディルクとよばれた行政・裁判地区の中心としてカディが司っていたところの、都市についてもふれているが、このオスマン・トルコ都市をビザンツ都市ないし南スラヴ都市と、行政的機能、経済的役割（たとえば周辺の農村地方にたいする）、社会構成（たとえば都市の有力者層）、人種構成（人種別の地区別居住）、そしてなかならずく集落形態、の諸点で対比関連させて考察し、両者を、その連続面と変容面とにおいて把握することも、きわめて魅力ある課題となるであろう。

オスマン・トルコ帝国の大土地所有と農民の問題は、マルクシズム・ソヴィエト歴史学の陣営でも取上げられた。<sup>(33)</sup>  
オスマン・トルコ帝国の社会経済史研究についてさいごにとりあげなければならない業績は、ベルディセアニュがバリのピ

ブリオテーク・ナショナル所蔵のトルコ語手書本を渉獵し、そこに保存されている六〇点のメヘメット二世およびバエジィット二世の سلطان 文書について作成した要記である。これら文書については、すでにベルディセアニニ自身がおさめた手書本のマイクロフィルムにもとづいて F. Babinger, *Sultansche Urkunden zur Geschichte der osmanischen Wirtschaft und Staatsverwaltung am Ausgang der Herrschaft Mehmeds des Eroberers*. München, 1956 がその写真版を収録し、R. Anhegger, H. Inalcik, *Reglements imperiaux conformes aux coutumes ottomans*. (en turc) Ankara, 1956 では原文のトランスクリプション・テュルクが刊行されていたが、今回ベルディセアニニによりその内容の要記が著された結果、トルコ語の未知者にも、その全貌が判明し、史料として役立てられることになった。内容は、行政、土地制度、租税と関税、市場と港湾、鉱山と塩田、貨幣鑄造所、などの諸点にわたるもので、オスマン・トルコ帝国の一五世紀の財政をうかがう好箇の史料である。たとえば、保有者のいなくなった封土ティマールや、逃亡ラヤーにたいする国家の措置についてこれら سلطان 文書は、貴重な報知をもたらずであらう。

以上のべたような支配の秩序は、支配者の側でいかなる正統性の論拠によって支えられていたであらうか。民族的にも宗教的にも異なる被支配者の側で、どのようにむかえられ、うけとられたらうか。

このような点からオスマン・トルコ帝国をながめたとき、トルコ古貴族と、イスラムに改宗して سلطان の高官に就任したギリシア人、セルビア人、以下の旧キリスト教徒との反目、そしてなかんずく、キリスト教住民から一〇〜一五歳の男児をデウシルメという方法で徴集してイスラムに改宗させ、訓練をほどこして新軍イエニ・チエリを創設するというあの特異な軍事制度が問題となるであらう。その他、バルカンにのこる民謡や叙事詩、更にはトルコ時代にイスラムの衣をかりて生きのこった小アジアやバルカンのキリスト教聖者伝説、の分析は、大きな成果を約束するであらう。<sup>(33)</sup>

..「フランク人」の支配地域についても、ヴェネツィアのクレタ、ジェノヴァ商事会社のキオス、北フランス出身のリューシ

ニアン家のキプロス、ヨハネス騎士団のロードス、等々、個々の地域について、支配者と被支配者のあいだの「民族問題」や、ローマ公教とギリシア正教のあいだの宗教問題が解明されなければならないであろう。この点、たとえばクレタでは、一五世紀の和解的なふんいきのなかで開始したヴェネツィア・ギリシア文化の融合が、続く諸世紀のあいだトルコ人の征服にもかかわらず進行し、独特の形成を遂げたことを、前掲のティリエの著書、およびマヌサカスの研究が明かにしている<sup>(36)</sup>。

本稿を閉じるにあたってさいごにふれなければならないのは、政治、経済のうえで以上のような流れをたどった一五世紀の東地中海のその精神的風土が、いかなるものであったかという点である。その十全な解答は後日にゆずるとして、一五世紀の東地中海がこの点でどれほどの問題をふくむものであったか。それを示すが、昨一九六三年九月七日から二九日にわたり、ヴェネツィアのサン・マルコ広場とカナレ・デイ・サン・マルコをへだててむかいあうイソラ・デイ・サン・ゾルデオ・マッヂォーレで開かれた第五回コルソ・インテルナツィオナーレ・ダルト・クルトゥラであった。今回は「中世後期およびルネッサンスにおけるヴェネツィアとオリエンタ」がテーマとしてとりあげられた。未だその議事録を手にしないままに、かかげられた多様な講演題目に眼をとおしながら、一五世紀の東地中海の精神的風土をしのびたいとおもふ。

メヘメット二世をとりまくクワトロチェントのイタリア人について取扱ったパービンガーの論文はすでにふれたが、それは、E. Babinger, *Maometto il Conquistatore e gli Umanisti d'Italia* なる報告がおこなった。このようなメヘメット二世側近の一人であったヒューマニスト、アンコナのチリアコについてもヴァイスの報告がなされた、P. Weiss, *Ciriaco d'Ancona in Oriente*.

ビザンツを通じての西ヨーロッパへの古典古代文化の伝播とルネッサンスの開花という、古くして新しい問題をめぐっても、いくつもの報告がなされた。

P. Lemerle, *Byzance et la conservation des valeurs occidentales de la culture*.

F. Garin *Maestri bizantini di filosofia e Venezia nel secolo XV.*

P. O. Kristeller, *Umanesimo italiano e Bisanzio.*

Id., *Platonismo bizantino e fiorentino e la controversia su Platone e Aristotele.*

A. Pettusi, *Italo-greci e bizantini nello sviluppo della cultura italiana dell' Umanesimo.*

A. Campana, *Italiani in Oriente nel Quattrocento e importazione di codici greci.*

ヴェネツィアに亡命したギリシヤ文人によるギリシヤ文化普及についで著書をあらわしたゲアナコプロス<sup>(98)</sup>は、この国際会議で、リオ・ディ・グレチのほとリ、サン・チャルチオ・デイ・グレチ教会を中心に形成されたヴェネツィア市内のギリシヤ人植民地について報告した D. Geanakoplos, *La colonia greca di Venezia.* また、リボウスキはギリシヤ人亡命者の一人ハッサリオン枢機卿とマルロ図書館創設の問題をとりあげた L. Labowski, *Il Cardinale Bessarion e gli ituzi della Biblioteca Marciana.*

クレタとヴェネツィアの文化交流の問題をとりあげられた。ちなむが、

L. Politis, *Il teatro a Creta nei suoi rapporti col teatro italiano del Rinascimento, e in particolare con la commedia veneziana.*

M. Manoussakas, *Un poeta cretese ambasciatore di Venezia a Tunisi e presso i Turchi: Leonardo Dellagorta e il suo poema.*

D. Geanakoplos, *Il ruolo cretese nella trasmissione della cultura greca all'Europa occidentale attraverso Venezia.*

美術史のうえでは、ヴェネツィアとビザンツ、オリエンタをいならぬ問題について、たゞ左の諸報告がまじなわれた。

E. Steingraeber, *L'influsso bizantino sull'oreficera dal Duecento al Quattrocento.*

A. Chastel, *Sté. Sophie, les Ottomans et la Renaissance.*

そのほか美術史の領域では、ヴェネツィアのダルマティア人スクオーラ、サン・ジョルジオ・デリ・スキアヴォーニに、「聖ジョルジオの竜退治」をはじめとする名画をのこしたカルバッチョ（一四六五—一五二六）について、また、スペインのギリシヤ人画家イル・ゲレコや、一五世紀のロシア美術についてまで、ヴェネツィアやイタリア・ルネッサンスとのかかわりにおいて、報告がなされた。

P. Zampetti, *La tradizione orientale e il Carpaccio.*

R. Pallucchini, *Venezia e il Greco.*

M. Alpatov, *L'art russe du XVe siècle et la Renaissance en Europe.*

そしてヴェネツィアとイスラム勢力との関係、両者間の外交交渉、さらには、ヴェネツィア人ないし西ヨーロッパ人が当時いざうていたトルコ観やトルコへの関心についても、左の報告がおこなわれた。

M. Nallino, *Venezia e gli Arabi.*

G. Gabrieli, *Venezia e i Mamluochi.*

M. Bataillon, *Mythe et connaissance de la Turquie en Occident au milieu du XVIe siècle.*

C. Dionisotti, *La guerra d'Oriente nella letteratura veneziana del Cinquecento.*

以上、本稿の第三部では、一五世紀の東地中海の経済、社会、文化を含む諸問題を指摘した。これをまとめて、第一部、第二部の政治史の叙述にくみ入れること。それが続く歴史の作業となる。そのいみでこの第三部は、材料の準備、蒐集にとどまり、文化・経済史の叙述にまでいたりえなかったことをここに告白しなければならない。なお本稿は、昭和三八年（一九六四）日の関西学院大学における「日本オリエント学会第五回学術大会」での同名の報告を、整理補足したものである（一九六四・



orientaliste Paul Geuthner. 179 p. avec IV pl.

- (22) A. Suceșka, *Die örtliche Verwaltungorgane des Osmanischen Reiches bis Ende des 17. Jhd.* Zeitschrift für Balkanologie. I. (1963) 1962 Wiesbaden. Otto Harrassowitz. S. 153—181.

- (23) A. S. Tveritinova. *Sur la question de l'origine de la première révolte paysanne de caractère anti-féodal en Turquie du moyen âge.* (russ.) BB XI (1956) p. 200—224. Id., *Sur la question de la paysannerie et sur l'utilisation de la terre dans l'Empire Ottoman (XV—XVIIe siècles).* (russ.) Učenyje Zapiski Instituta Vostokovedenija XVIII (1959) p. 3—50—Id., *Sur la question de la possession domaniale de la terre par les feudataires dans l'Empire Ottoman aux XV—XVIIe siècles.* (russ.) Kratkije Soobščenija Instituta Vostokovedenija XXXVIII (1960) p. 26—29.—A. D. Novičev, *La population de l'Empire Ottoman aux XV—XVIIe siècles.* (russ.) Vestnik Leningradskogo Universiteta XIV (1960). Série d'histoire, de langue et de littérature, fasc. 3. p. 28—37.—Id., *Révolte des paysans en Turquie au début du XVIe siècle.* (russ.) Problemy Vostokovedenija, 1960 no. 3. p. 67—81. 576. 22. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

- (24) A. S. Tveritinova. *Sur la question de l'origine de la première révolte paysanne de caractère anti-féodal en Turquie du moyen âge.* (russ.) BB XI (1956) p. 200—224. Id., *Sur la question de la paysannerie et sur l'utilisation de la terre dans l'Empire Ottoman (XV—XVIIe siècles).* (russ.) Učenyje Zapiski Instituta Vostokovedenija XVIII (1959) p. 3—50—Id., *Sur la question de la possession domaniale de la terre par les feudataires dans l'Empire Ottoman aux XV—XVIIe siècles.* (russ.) Kratkije Soobščenija Instituta Vostokovedenija XXXVIII (1960) p. 26—29.—A. D. Novičev, *La population de l'Empire Ottoman aux XV—XVIIe siècles.* (russ.) Vestnik Leningradskogo Universiteta XIV (1960). Série d'histoire, de langue et de littérature, fasc. 3. p. 28—37.—Id., *Révolte des paysans en Turquie au début du XVIe siècle.* (russ.) Problemy Vostokovedenija, 1960 no. 3. p. 67—81. 576. 22. 20. 21. 22. 23. 24. 25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

Mouton et Co. La Haye. 194 p.

- (25) J. Matl, *Okazientale und europäische Auffassung der slavischen Geschichte?* Saeculum 4 (1953) S. 288—

